半端者

ランプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
半端者

【Ｎコード】
Ｎ３１３６Ｉ

【作者名】
ランプ

【あらすじ】
１００均で買った箱の中に　人形が入っていた
その人形は動きだし「世話になる」と　驚く私にこう言った
怖い存在ではなさそうだが　一体どうして　こんなことになったのだろう
それから　この人形との不思議な共同生活が始まった

ファンタジー

最近すっかり秋めいてきて涼しくなってきたが

なんだか　ぽっかりと穴があいたような　さみしい感じもする

本屋に立ち寄って　気に入った本もなかったので　私は　ふらりと
　雑貨を買うために

近くの１００均に立ち寄った

数年前は　なんだか１００均にはいることが　恥ずかしかったが

主婦となって3年が過ぎ　小さい子供もいる身にとっては　なんの
抵抗もなく　店に入れる

お菓子を入れる　小さな箱を見つけ　ちょうどよい大きさのものが
見つかったので

こんなささやかなことだけど　それだけで　さっき感じた　さみし
い感じも和らいでいた

結局　大きな問題を抱えてるわけではい主婦の気持ちなんて　こん
な程度かな？

そう考えると　また急に　空しい感じが押し寄せてきた

家に帰り　さっそく　箱に　お菓子を詰めようと　箱を開けると

中に　小さな人形が　入っていた

きっと　誰かが　箱に　人形を入れて　うっかりそのままにしてしまったのだろう

小さな人形は　木彫りで　私にでもすぐ描けそうな　単純な表情で愛嬌があった

「どうしよう　お店に言ったほうがいいかな？　」木彫りの人形を手に取り　考えてると

「単純な顔で悪かったな」と　聞きなれない声がした

ちょっと高めの子供のような声で　びっくりして　思わず振り返ったが　誰もいない

ぞっと　寒気がした

あわてて　人形をテーブルに置き　少し離れてみる

人形は　だらんとした状態で　何も動きを見せない

「なんだったのかな・・・・・」　気持ち悪いという言葉を飲み込んで

やはり　この人形は　店に返そうと思った瞬間　人形は　自力で立ち上がり

テーブルに座り　私を見つめた

あまりのことに　私は　大きな声を上げ　その場にへたり込んでしまった

人生最大の　恐怖と言っていいほど　大きな悲鳴だった

人形は　相変わらずの無表情で　私を見つめている

身動きが取れず　固まっていると　また　あの声が聞こえた

「驚くのはわかるが　危害はない　　こわがらなくていい」

どうみても　この人形が喋っているようだ

「魂が宿った　人形はいくらでもいる　わたしは　決して悪の存在ではない

トトロやドラえもんと似た類いだ」

続けて　こう説明した人形に　思わず笑ってしまった

人形は　片足を組み　動きもどんどん滑らかになっているように感じた

たまに　妖精をみたという話を聞くが　この人形もそうなのだろうか？

恐怖は　いつの間にか消え失せて　あんなに大きな声をだしたにも関わらず

家には誰もいない時間で　近所の人も　駆けつける気配もなく　静まり返ってる

もし　強盗がやってきたら　私はおわりだろうなと　思ってしまった

「一体　なんなの？」

困惑している私に　人形は

「妖精の類と思ってくれていい　名前は　まだない」

吾輩は猫であるのフレーズに似た調子でしゃべりだすので　なんだか　どっと疲れが出てきた

人形は　続けて　こう言った

「あなたが　私を買ってくれたので　しばらく世話になる」

「買ったって・・・・私は箱を買っただけよ　人形は知らないうちに入ってたの
世話になるって・・・・そんなのこまるわ」
いきなりの人形の発言に　慌てて訂正したが

「箱を買ったのは　あなたと私の巡り合わせだ　最初からそうなるべきことだったのだ
私は　こんなに小さいし　場所も食事もとらない　トイレもいかない　散歩もいらない
実に　エコな家族の一員と思ってくれていい」

・・・・・・エコって・・・・・・・・・・・・・・

一言一言に　愛嬌があるので　恐怖は感じられず　気が抜けてきた

「私がいると　退屈な日々に　ハリがでるだろう？」
表情は　変わらずとも　この言葉を言うと少し首を斜めに上に向けて　ニヤリと笑った気がした

捨てられた妖精（前書き）

ほかの人には見えないものが見える・・・・・・・

まさか　自分がこんな体験をするなんて思ってもいなかった

捨てられた妖精

「私の名前は　モパだ
ほかの者には　私の姿は見ないので　普段通りに過ごして欲しい
ちなみに　この姿も仮なのだが　性別は男だ　　悪魔のような存在
ではないので　心配いらない」
人形は　相変わらず　ニコっと笑ってる表情で　自己紹介を始めた

「なんで　私にはあなたが見えるの・・・・？」
と　やっとそれだけ聞き返すと

モパは「よく分からないが　波長が合う人には見えるらしい　　と
ころで　あなたの名前は？」

「・・・・ユイよ　　私　頭がおかしくなったのかしら？・・・・」
そう　諦めたようにつぶやくと　モパは　立ち上がってこう言った

「そう思って　精神科に入院した人を何度も見ている
ほかの人と違うからといって　現実から逃避せずに　そこは強く気
持ちを持ってください
出来たら　私の存在を　もっと気軽に考えてほしい」
口調は真剣で　本当にユイのことを心配してるようだった

もともと　ニコちゃんマークに手足がついたような姿で　緊張感が
ないためか
ユイの警戒心はどんどん薄らいできた

「仮の姿って言うけど　本当の姿にもなれるの？　表情が読めなく
て分かりづらいんだけど・・・・」

モパは
「希望があれば　本来の姿に戻ろう。　この姿が一番怖がられないと思ってそうしたんだが
わたしとしても　動きにくいのだ」

人形の姿がぼやけ初めて　手のひらに乗るくらいの人の形が見えてきた
俗に言うイケメンで　黒髪が肩につくくらいの長さで　鼻筋の通った　大きな眼の２０代の男の姿に変わった
中性的な感じがする姿は　好印象でユイの好みにぴったりだった

「かっこいいじゃない　こっちのほうが　断然いいわ！」

モパはその言葉に「ありがとう」とニコっと笑った

こんなイケメンとなら　一緒に住んでも悪くないと　考えたユイだったが
そう簡単にモパを受け入れていいものか　また不安が高まった

考えが読めるモパは
「危害はないよ　ただ　私が見える人は限られていて　私は選べないのだ
見える人と接触を持たないと　私の存在は消えてしまう
ユイの前は　女子高校生だったんだが　最初は物を投げつけられて
　大変だった
ようやく　受け入れてもらえたと思ったら　化粧されたり　願いを叶えろだの言いだしたり・・・・
挙句の果てに　私をその小箱に捨てたんだ」
ため息をつきながら　モパはテーブルに座りなおし　そう言った

ギャル系女子高校生とモパとのツーショットが浮かび　なんとも不似合いで
モパが苦労してる姿が　浮かんできた
おまけに　どうやら捨てられたようで　とても気の毒になってきた

「やはり　純真な心を持つ人のところに行くべきだよな
アニメの世界が小さな子供のところに不思議体験がおこる設定が多いのも　身にしみて納得だ」
ユイもその言葉に　素直に納得してしまう

「ひどい目にあったわね・・・・それに商品の箱に入れて捨てるなんて　許せないわ　ひどすぎる！
・・・・でも　それを　私が買ったのよね・・・」
ここで　モパをつき放したら　その女子高校生と一緒だ

「ユイのような人に出会えてよかった」
ニコーっと本当に嬉しそうに笑うモパを見て　ユイは　突き放すことが出来なくなってしまった
ユイと名前で呼ばれるのも新鮮で　嬉しい気持ちもあった

お母さんか●×ちゃんのママという呼び方が定着してしまい
久々に自分の名前で呼ばれただけで　こんなに嬉しくなるなんて
不思議だ
モパが悪い存在じゃないと　感じ始めたので　もう少し　一緒にいてもいいのではないかと思った

「ありがとう　ようやく　私も一息つけるようで安心した
これから　よろしく」
手を差し出すモパは　清々しい表情で握手を求めた

人懐っこい表情は　とても悪い人には見えなかった

「考えてることが分かるのね・・・・・
モパ　本当に一緒にいることで　危害はないの？　家族にも　何もしない？」
差し出した手を見つめながら　真剣な表情で聞くと

「ユイの力になれるよう手助けをする　ユイの望むことは希望に沿うつもりだ
もちろん　家族や親戚・ご近所にも　無害だ　」
手を差し出したまま　真剣な表情で見つめ返す

ユイはその言葉を聞くと　ゆっくりと手を差し出した
モパの手はあまりに小さいので　握手というより　「お手」に近い形になってしまった
思わず笑ってしまったが　ユイは　しばらくこの不思議なモパと暮らしてみようと思った
小さな手は　暖かかった
「　ずっと一緒は無理だから　しばらくは　　私のところにいてもいいわ　　それでもいい？」

「大丈夫だ　私は同じ人のところには居続けられない運命だから
また次の人を探す時期はやってくる　」
少しさみしそうにモパは答えた

きっとずっと　そうして渡り歩いて過ごしてきたんだろう

とにかく　この小さなイケメン小人を自分が守らなきゃいけないという正義感がわいてきて
ユイは　モパとの共同生活を始めることにした

「よろしくね」
ユイはようやく　モパに向かって笑顔を向けていた

同居からはじめましょう（前書き）

イケメン妖精との共同生活が始まりました
モパには　いろんな力があるようで　不思議な能力を目の当たりに
驚きの連続です

同居からはじめましょう

モパは　すらりと伸びた長い足を組んで　何やら探し物を初めたユイの様子を眺めていました

ユイは　おっとりした感じで　かわいいらしい顔立ちに　きれいに化粧をしていて
恰好も若く　結婚しているとは思えない　まして　子供がいるとは思えなかった
でも落ち着いた雰囲気があって　安心できるのは　独身にはないものだったのかもしれない

根掘り葉掘りモパについて詮索することもなく　前の同居人女子高生とは大違いだ
と　心地よく感じていた

育ちがよいのか　純真で　悪く言えばだまされやすい一図タイプなのかもしれない

こんな得体のしれな妖精を　いとも簡単に受け入れてしまった

モパからしたらありがたいが　まだすべてを話するには早いので
すこしづつ理解していって
もらいたいと考えていた

・・・・・・・・・・・ユイになら　あの人を救い出すことが出来るかもしれない・・・・・・

真剣な　表情でそう思っていたが

「あった！」と嬉しそうな顔をして　大きな段ボールから取り出した物に　モパは驚いた

「・・・・・・・・ユイ　それって・・・・・・もしかして　わたしにか？」

顔をひきつらせながら言うと

「小さい頃に使ってたものなの。　きれいにしたら使えると思うのよ本当は　子供に取っておいたんだけど　男の子だから　こういうものので遊ばないのよね」

嬉しそうな表情で大きなドールハウスを手にしたユイは　それを掃除し始めた

「・・・二階建てなんだな・・・・　キッチンや　風呂もある・・・・・・

でも　ユイ　悪いが　これは必要ないよ」

ドールハウスには　小さな　ウサギやクマ達も　いた

「女の子っぽいから？」

「いいや　そうじゃなくて・・・・・・　」

「でも　モパにも　部屋が必要だと思うのよ　やっぱり　プライバシーってあるから

お互い　部屋をもった方がいいわ」

その考えには　納得できたモパだが

「でも　この家は　半分丸見えだよな・・・・・・・・」

「・・・・・・そうね・・・・・・おもちゃのお家だからね・・・
やっぱり　駄目かしら　いい考えだと思ったのに」
掃除を止めて　ユイは　がっかりした様子だった

その様子に　モパはクスッと笑うと
「心配いらない　ユイ達のプライバシーは守るから　むやみに動き
まわらないよ
私には　部屋は用意できるから　そのおもちゃはいらない
そうだな　この部屋は　私が行き来してもいい部屋なのか？」

リビングとなりの和室を指して　モパは尋ねると

「みんなが集まる場所で　申し訳ないんだけど　家が狭いから　こ
こなら自由に使って」
と　ユイは答えた

「分かった　ありがとう　十分だよ」
お礼を言うと　モパは壁に向かって　片手をかざすと　そこに　丸
い白い空間が出来た
ちょうどモパが出入りするのに十分な大きさで　モパはゆっくりと
その空間へ　入っていった

ユイはびっくりして　固まってしまった

すると　顔をピョコッとのぞかせて　ユイを見て
「わたしの部屋は　ここにしたから　何かあったら　声をかけてく
れ」

ユイは　そろりとそこへ近づいて　空間を見てみたが　そこだけ白

く光ってるだけで
中は見えなかった

「ちなみに　ユイにしか　この空間も見えないから　家族は気付かないよ
中は　わたしが必要とするのものが揃っているから　何も用意しなくて平気だ」
空間から出てきた　モパが　驚いてるユイにそう言った

「すごい・・・・モパってやっぱり妖精なのね」
心から感心してるようだった

そのとき　時計が鳴り出した

気がつくと　もうすっかり日が落ちて　あたりは暗くなっていた

ユイは時計を見ると
「もうこんな時間だったのね」と　急にあわただしく家の中を動き始めた
鏡の前に立ち　ピアスやネックレスを外し始める

「どうしたんだ？　せっかく似合ってるのに外すのか？」
その様子を見て　モパは尋ねると

「もうすぐ　子供が帰ってくるのよ　　今日は　おばあちゃんがたまに一人の時間を過ごしたらって
子供を預かってくれてたんだけど
そろそろ　帰ってくるわ。
アクセサリーしてると　ひっぱられちゃうのよね」
すべてを外し終えるとそれをジュエリーボックスにしまって　隣の

部屋の前に進んでいった

入り口で　クルッと振り返り
「着替えてくるから　モパはここにいてね」
そう言って　戸をしめた

ユイはドキドキしながらも　急いで着替えをしはじめた
こんなに　信じられないことが起きてるのに　余韻にも浸っていられないなんてね・・・・
と　そんな自分に笑えてきた

ジーンズにトレーナーと　ラフな格好に着替えると　モパの待ってる部屋に現れた

「まるで　シンデレラだな」
笑いながら　そういうモパに

「そうなの　母親に戻る時間がきたわ
でもね　モパに出会えたことで　嬉しい秘密が出来てうれしいの」
やさしい笑顔でそういうと
「今日　一人の時間をもらっても　何もすることなかったのよ
おしゃれして　買い物したりしたんだけど　なんだか気持が晴れなくて・・・・
友達も子供のいる人ばかりになっちゃって　一緒に出かけることも難しかったから　一人で退屈してたの」
ニコッと笑うと
「モパ
不思議なことがいっぱいで　お互いわからなことだらけだけど　ゆっくり話していきましょうね」
そうっいった　ユリは　すっかり優しいママに変わっていた

カエレナイ（前書き）

カエレナイ

玄関でチャイムが鳴り　迎えに行くと　ユイの胸に勢いよく飛び込んできた小さな男の子と
後ろで　その姿を笑いながら見てるおばさんがいた

「ママ！ママ！」
かわいいらしい顔立ちの男の子は　ユイにぴったりくっついて離れない

この子が　息子か・・・　かわいいなぁ　ちょっと離れてモパはその様子を見ていた
顔立ちからして　ユイに似てるようで　女の子のように可愛い男の子だった

「やっぱり　ママね～　今まではご機嫌だったんだけど
急に恋しくなったみたね。　春くん。」おばさんは　覗きこみながら言った

ユイは　子供を抱きしめながら　大事そうに見つめている

おばさんは「いい子にしてたのよー　ぐずったりしなくて　いっぱい遊んでたのよね
夕飯も食べていければ　もっと嬉しかったんだけど、ごめんね。
　短い時間だったけど　ママは気分転換できたかしら？」
春くんとやらを　なでなでしながら　ユイに話しかけると
「えぇ、久しぶりにいい気分転換になりました　御母さんいつもありがとう。
春も　おばぁちゃんに　ありがとうは？」

春は　振り返り「アリガト」と答えた
孫がかわいくて仕方ないおばぁちゃんは　それを聞いて満面の笑みを浮かべた

「また　いつでも誘ってね　おばあちゃん　春くんとまた遊びたいから。
じゃあ、夕飯の支度があるから　またね」
そういって　いそいそとおばあちゃんは　帰って行った

いい気分転換にはなったのかどうか・・・・モパは　ユイの少しの時間のゆとりが
まさか妖精と同居することになるなんて　誰も思ってないだろうなと思うと　おかしくなってきた

ユイは子供を抱きかかえながら　リビングに向かった

子供は　リビングで飛び降りておもちゃを広げ　遊びだした

「いくつなんだ？春は？」
子供に興味はないが　可愛らしい姿に　思わず微笑んでいた

「2歳と1カ月よ　かわいいでしょう？　言葉はまだいっぱいしゃべれないけどね」
ユイは　そう答えると　忙しそうに台所へ向かっていった
「ところで　モパは　食事取らないの？　遠慮せずに言って」

夕飯の支度をするらしく　モパはその言葉に
「自分の部屋に用意されてるから　大丈夫だ　人とは食べるものも

違うんだ」
と答えた

その世界のものの食べのものをとると　ずっとその世界に住まなくてはいけない
モパは人間界に住み続ける気はないので　「食べる」ことはタブーとしていた

「ん」
急にモパの目の前に　お菓子がつきだされた
春が　自分のおやつを　モパに渡そうとしたので

「・・・・・・・・わたしが見えるのか？」
驚いて　春にそう尋ねると
「ん」と言って　顔の位置までお菓子が迫っていた
モパは　驚きながら受け取ると
春は　満足そうにして　言葉にならない言葉で　ぺちゃくちゃ喋りだした

その言葉は　ときどき　聞きなれた言葉に聞こえた

トラワレル　二人　カエル道ヲ　ミツケラレナイ

妖精の言葉だった

モパは鳥肌が立った

春から目が離せなくなり　時が止まったかのように見ていたが

春は　構わずおもちゃで遊び出し　もう　モパに構う事はなった

「モパ　どうしたの？　怖い表情して」
ユイが心配そうに　聞いてくる

「ユイ　この子は　私が見えるようだ。　」妖精の言葉を喋ったことは　言わなかった

「あら　小さい子って　よく不思議なものが見えるっていうじゃない　春もそうなのよ。
そんなに　意外？」
あっけらかんとして答えるので

「ユイ　もっと驚くことだと思うよ　・・・・・　この狭いエリアで2人の人にわたしを
見つけられるこのは初めてだ　　とても珍しいことなんだよ」
この親子には　強いパワーがあるのかもしれない

とくに　春は　・・・・・・・・・・・・一瞬だが恐怖を感じていた

ユイにあやされて　春は楽しそうに笑い声をあげて笑っている
とても　無垢で　大きな力があるようには見えないのだが

モパは　さっきの言葉を頭の中で繰り返していた

「カエル道ヲ　ミツケラレナイ」・・・・・か　確かにな

いつもの人のいい顔でなく　真剣な表情のモパだった

幸せ一家と隣の妖精

夕方　ユイの旦那さんが帰ってきた

背が高くて　真面目で優しそうな人だった

食事が出来るまで　リビングでねっ転がりながら　春と遊んでいる

笑顔全開で　春を持ち上げ飛行機状態だ　それに大喜びの春の笑い声が家中に聞こえ

幸せを絵に描いたようだと　モパは思っていた

夕飯に　晩酌付きで　旦那さんはご機嫌だ

悪とは無縁の世界だな・・・・・・・

少し遠くから　様子を見ていたが　　食事が終わりそうな頃

家族があつまるリビングへ

近づいた

春はテレビに夢中になってる

旦那さんは　新聞を見ながら　一瞬　モパの居る方向を　チラリと見た

妖精の存在は　見える人のほうが少ないので　モパは特に気にせずにいた

新聞をじっくりまた読み始めた旦那さんは

ユイが片づけを終えて戻ってくると

「ママ　あそこにいる人は？また例のやつかな？」と　尋ねた

指差す方向は　モパがいるところだった

モパは　ドキッとした

ユイは

「モパっていうの　今日知りあったの。しばらく家にいるそうよ」

と答えた

そんな　何事もないかのように言うが　今　すごいことがおきてるんだぞ！

自己紹介された　モパは　ユイにそう突っ込みたかったがが　声に出せなかった

旦那さんは

「最近多いよな～　妖精。流行ってんのかな？」

と

こちらも　負けず劣らず　無関心・無反応だった

相変わらず　目線は新聞に向いているし・・・・・・・・・・・・

「あの・・・・・・・・・」

モパは　夫婦に語りかけた

「流行ってるって・・・・・　妖精　よく見かけるのか？」

なんだ　この質問は・・・・・

野良猫見ますか？って聞いてるのと違うんだぞ　と　自分でこの状況にかなり動揺しながら
尋ねる

旦那さんは　ぱっと　こちらを向いて
「あれ？　言葉通じるんだ？　　こんばんわ。」
と　挨拶をした

条件反射で　モパも挨拶する

「2か月に1回くらいの割合で見かけるよ　でも　わたしは言葉は分からなかったけど」
にこやかに　答える

「しばらくすると　いつの間にかいなくなってるから　気にしないことにしたんだけど
ママ～　今回は　わたしも言葉が通じるよ～」
と　嬉しそうに　ユイに報告している

「そうなの！　あなたは初めてね。　春も見えるようよ」
と　夫婦で　喜んでいる

「気兼ねしないで　ゆっくりしなさい　」
この家族に暖かく迎えいれられたモパだった

なぜか　この家族は　妖精がよく集まる家族らしい

こんなことは初めてだ・・・・・・・・・・・・・

初めて　公に受け入れられて　戸惑ったモパは　幸せ家族が寝入っ

た後
風にあたりに　庭へ出ていた
茫然としている気持ちとは裏腹に　自分の力は漲っている
どんよりとした　雨雲を見上げると
両手を上げ　意識を集中して　気をこめた
すると　雨雲は一瞬で吹き飛び　きれいな丸い月と　星空が広がった
・・・・・・・・・やはり　力は数段　上がっている・・・・・・・・・
今までの能力では出来ないことも　ここでは出来る
人の力を蓄えエネルギーに変換できるモパは　この家に来て　また
たく間に力をつけたようだ
名の変哲もない普通の家族だと思っていたが　計り知れないパワー
をもってるようだ
星空を見上げながら　そう考えていると
聞きなれない女の人の声がした
「美しい夜景をありがとう　お隣さん」
腰まである　栗色の髪を一つに束ね
淡い緑色の服を着た　同業者だった
ネコ科系の　ちょっとつり目の大きな瞳が印象的だった

「・・・・・・・・隣にも　妖精がいるのか？　本当にこの辺りは多いんだな」
思わずため息がでた

「私は　ミクよ　どう？　そちらのお家の住み心地は？」
おかしそうに　空を舞い　隣の家との垣根に座って　モパに近づく

「モパだ　今日この家に来たんだけど　家族全員わたしの姿がみえるらしい
妖精も　日常的な存在らしいな」

「エネルギーの塊だからね　その家族を目当てに　よく妖精が集まるのよ
わたしも　その一人なんだけど　力が強すぎて長くは　近寄れないのよ
モパは　よく平気ね　」
心底感心してるようだった

「ユイの家族のエネルギーに引き寄せられたのか・・・・・・・」
自分が引き寄せられるほど　ユイの家族は強大な力を持ってるのか
先駆者たちは　数か月で消え去ってしまったから　ユイ達もあんなにあっさりしてたんだな
ようやく　不思議一家の謎が一つ解けて　すっきりしたモパだった

「早く　力を得たら　引き上げることね
欲を張ると　自爆しちゃうわよ」
ミクは忠告をくれた

大きすぎるパワーは　自分の存在も消してしまうのだ

「そうだな・・・・・・・・・親切にどうもありがとう」
ミクを見つめると

ミクは美しい顔でにっこり笑って
「あなたが気に入ったわ　どうぞよろしく
困ったことがあったら　訪ねてきてね」
と　モパを見つめ返した

「あぁ」
モパは　立ち上がり　ミクと別れて家に戻った
ミクは名残惜しそうに　モパをずっと見送っていた

考えることに　疲れてきたモパは

自分の部屋へもどり　深い眠りにつくことにした

歓迎会に招かれる

久々の深い眠りに就いたモパは　夢を見ていた
明るい光に導かれるように　歩いて行くと　広くてきれいな公園にでた
たくさんの人がそれぞれの時間を満喫していた
見慣れた光景として　まず　ユイ達が　お弁当を広げ　春の三輪車の練習をしているのが見えた
笑顔があふれ　いつも幸せそうな家族
モパはほほ笑んでその様子を横目に　空中に飛び出した
近くのベンチでは　前の同居人の女子高生が短いスカートをはいてベンチに腰掛け
足を組んで携帯で誰かと喋ってるのが見えた
身振り手振りが大きいが　話の内容は驚くほどつまんないこだろうと相変わらずの様子を見て　次の場所へ移る
花壇の近くでは　ミクが仲間の妖精と集まってるのが見えた
年寄りから同じような年の妖精　男女数人が　ミクを中心に話し合ってるようだった
ミクはつまらなそうな顔をしていたが　モパを見つけると笑顔で手招きをしていた
軽く手を振り　モパはそこには立ち寄らず　高く高く空へ舞い上がっていった

広い公園は　たくさんの人がいるけれど　よく見ると　いままで何かしら関わってきた人達ばかりだった
懐かしい気持ちで　遠くからその様子を見ていたが

小さな丘の横にあるログハウスに目を移すと　そこが気になってきて
吸い込まれるように　目が離せなくなってきた

昼間なのにそこだけ　影を落としたようにひっそりと暗く　誰にも気づかれない
寄せ付けないような雰囲気だった

近くまで近づこうとするが　部屋に明かりはなく　暗闇しか見えなかった
どうしても　気になって仕方なくなってきて
モパは入り口に近づき　ドアに手を伸ばす
心臓の鼓動が激しくなり　見てはいけないものがそこにあるような
　危険な感じがした
でも　ドアに置いた手にぐっと力を込めた
その瞬間

まばゆい光に　辺りは一瞬で白い世界になり　何も見えなくなってしまった

モパはゆっくりと瞼をあける・・・・・・・・・・・・・

気がつくと朝になっていて　キッチンから物音と食べ物のにおいがした
ユイが朝食の準備をしているようだ

ゆっくりと　自分の部屋からでたモパは
ユイと旦那さんのいるキッチンへ向かった
旦那さんは　新聞を読んでいると思ったら　半分寝ているようだった

「おはよう　モパ　昨日は眠れた？」
ユイにそう問われて
「あぁ、よく眠ったよ」と返事をすると　旦那さんが　目を覚ましたようで　モパに挨拶をくれた

「眠れた？よかった。
そういえば　モパは食事取らないんだって？普段はどんなものを栄養にしてるんだ？」

あなたたちのエネルギーを・・・・・・・・とは言えないので
「基本的にお腹はすかないので　食事する必要がない」と答えた

旦那さんは　話が通じるのが嬉しいようで
「もっと色々話を聞きたいんだが　もうでかけなきゃ
今日は早く帰ってこれたら　モパの歓迎会をするから　予定空けておいてくれる？」
屈託のない笑顔でそう言うと　急いで食事を済ませ　バタバタと仕事に行った

「歓迎会・・・・？」
聞きなれない言葉をつぶやくと
ユイが
「いいアイディアよね　これから　しばらく過ごすんだし　交流を深めるのにもね」
と　こちらも　楽しそうに旦那さんの意見に大賛成のようだった

いろんな人と出会ってきたが　ここまでの歓迎を受けたことがなかったので
茫然としてしまって　断る機会も失い　夜は歓迎会に参加することになった

しばらくして起きてきた春は　歓迎会の準備としてユイと一緒に
画用紙に　モパの肖像画らしきものを作成している

ちらっと見た限りでは　モパの顔とは程遠いのもだったが
春なりに一生懸命　モパを描いてくれていた

出来上がりまで　そばにいるのがいけないように感じたので
モパは近所を散歩することにした

ゆっくりと見物しばがら空中散歩をしていると　正面に広場が見えた
そこは夢で見た公園によく似た場所だった

夢で見たほど広くはないが　遊具やベンチ　花壇　池など　そっくりだった

ただ　丘の横にはログハウスはなかった

「それにしても　そっくりだな・・・・・・」
そう呟きながら　公園に足を踏み入れると

「やぁ　こんにちは」
と　若い背の高い男の妖精に後ろから　声をかけられた

その妖精は　浅黒くてきりっとした男らしい顔立ちだった

「やぁ・・・」
本当に同業者が多いんだなと感心していると
「新人さん？　見ない顔だね」
と　喋りかけてきた
「あぁ　昨日来たばかりなんだ　あなたは　ここには　長いのか？」
「もう１０年くらいになるかな　　この辺りは入れ替わりも多いんだけど
僕は　長いほうだよ」
と　少し自慢げにそう答えた
「ここに　以前丘の近くにログハウスがあったか知ってるかい？」
モパは気になっていたことを質問してみた
丘のある方向を見ながら　若い妖精は
「5年ほど前にあったけど　危険だからって取り壊されたよ　どうして知ってるんだ？」
不思議そうにそう聞いてきたが
「そう感じたから」とだけ　答えた
また何かを喋りかようと　若い妖精が口を開いたとき
「モパ！」
と　嬉しそうにミクがやってきた
長い髪が揺れて　光を反射してきれいな顔立ちのせいもあるが　可愛らしい可憐な姿だった
若い妖精は　ぱっと顔を赤くして　ミクを見つめている
どうやら　ミクが好きらしい　　分かりやすい奴だな・・・・と思

っていると
そんなことはお構いなしに　ミクがモパの手を取る
「体に異変はない？　平気なの？？」と　若い妖精には目もくれず
顔を覗き込む

ミクが手を握ってることにびっくりしている彼を　横目で見ながら
「平気だ　何も変わらない」と　ミクの手をそっと離す
こんなことで　早々にいざこざを起こしたくなかったモパだった

「そう　やはりモパには強い力があるのね
・・・・・・・センバティとは　今知り合ったの？
センバティは　見た目は若いんだけど　ここに長いから困ったこと
があったら　助けてくれるわ　ね？」
大きな瞳で見つめられた　若い妖精は

嬉しそうな表情を浮かべ
「あぁ！　力になるよ」と　ミクに笑顔を向けていた

初々しいセンバティの様子に　モパは挨拶をして早々にその場を離
れようとしたが
ミクにいいところを見せたいセンバティは

「モパの歓迎会をしよう！　近所の妖精を集めて　今夜はどうかな？
・・・・・都合悪い？・・・・・そうか　じゃあ、　明後日にでも！
わたしからみんなに声を掛けておくよ」
と　またもや　張り切ってるセンバティに　ミクも大はしゃぎで
二人で　どんどん歓迎会の準備を進められていた

同業者にも　こんな歓迎されるなんて　初めてだな・・・・・・・・
ふつうは　妖精同志はもちろん　人間ともほとんど交流をもたない

ので
こう濃厚にかかわってくる　ユイやミク達に戸惑うモパだった
そして　またもや　断る機会を失ったモパは　暖かく歓迎されることになった

ヒーローは2歳児

センバティとミクが歓迎会のことで　まだ打ち合わせをしているので
邪魔しないように　家に帰ることにした
センバティは憧れのミクと一緒にいれて　鼻の下がのびるってこう
いうことかと実感できるほど
嬉しそうだった

モパが窓から家の中に入ると　春が　駆け寄ってきて
「モパ　モパ～」といいながら　抱きしめてきた
熱烈歓迎はまだ続いてるようだ

そして　ポケットから歓迎会の招待状を取り出し　モパに差し出す
ユイと二人で作ったようで
≪今夜8時に　モパの歓迎会をします≫と大きなハートマークつき
だった
「ありがとう　春」と　笑顔で受け取ると　春もご機嫌だった

ユイは主役のモパは食べれないだろうご馳走をせっせと準備していた
しばらく　春とおもちゃのつみきで遊んでいたモパだったが　ユイ
に一言
「いつも　ユイは忙しそうだな　今回はわたしのために　時間を使
わせてしまっているし」
と声をかけた

ユイは「私達がしたくてしてることだし　気にしないで
モパは食べれないのに　なんだか張り切りすぎかしら？」と照れな

がら笑っていた

それから　折り紙で　わっかをつくりそれをつなぎ合わせるという
作業を3人でやり
モパも　なんだか気恥かしかったが　高い位置に飾り終えると
二人が　大喜びしてるので　まぁ　いいか・・・と思ってしまった
人生初の　工作だったのだ

その時　家の空気が微妙に変わったのに　気付いたモパは
気配を察知して　庭に飛び出した

分かりやすく　黒い衣装に身を包んだ小さな悪魔が　エネルギーに
ひかれてやってきたようだった
中年の細身で　軽薄そうなチンピラ風だった
モパを見て　じろっと睨むと
「先客がいたか・・・・まぁ　いい
大きなエネルギーを見つけたので　私も補充させてもらうぞ」
横柄な態度に　気分を害したモパは

「ここは私のテリトリーだ　断る」と言い放った
モパには強い力がもともと備わっているので　戦いに負ける気がし
なかった
たとえ悪魔でも何でも　この家にそぐわない悪魔にいつになく好戦
的だった
悪魔は　怒りに顔をゆがませて　戦闘態勢に入った
「妖精風情が！！」悪魔は大声で怒鳴った

お互いにエネルギーの塊をぶつけ合い　モパ優勢のところで
悪魔は　苦痛の表情だった
そのまま戦っていても　十分勝利したのだが　その時庭のドアがガ

ラリと開いて　春が現れたのだ

モパは　危害を加えられるんじゃないかと
春にシィールドを張りつつ　戦いつづけた
「危ないから下がってなさい」
大きな声で　そういったが　下がるどころか　春は　ダッシュで悪魔のところへ向かった

悪魔にもモパにも　あっという間の出来事で　制止することも　何もできなかった
春は　悪魔に大接近して　間髪いれずに　右足で踏みつぶしたのだ
エネルギーの根源の春につぶされた悪魔は痕跡すら残さず　消え去った

モパは　ポカンとして力を一気に抜いた

春は　モパに向かってピースサインで　笑っている
「悪いやつ　ばいばい」無邪気にそう言って　ひょいっとモパを抱え　家の中にまた戻ったのだ

茫然としているモパは　春を見上げる

「春は　モパのことが好きなのね～　」と　ユイは庭に出た春の足を丁寧に拭きながら
そう言った
まさか　その足で悪魔を退治したとは知らないだろう

不思議な子供の春は　今までも害とみなしたものを　次々退治してきたようだ

なんて　とてつもないパワーだ・・・・
どおりで　これだけの強いエネルギーなのに他のものが寄り付かないはずだ・・・・
ミクの少々異常なほどの心配も　これでうなづける

放心状態で　春に抱えられてるモパを見て　ユイが不思議そうに
「どうかした？」と聞いてきた

「・・・・・・・・いや　・・・・・・・春は・・・・・・・」
このことを　ユイに言ったところで　しょうがないなと　思ったモパは
「右利きだな」と的外れに変なことを言ってしまった
そのまま　春に抱えられたら状態のモパは　額に手を当てて　物思いにふけっていた
ユイは　少し不思議そうに見ていたが　「すっかり仲良しね」と呑気なことを言い
またいそいそと食事の準備に戻っていった

夜は　早めに帰ってきた旦那さんも加わり　温かい食事を囲み
花束を受け取って戸惑うモパとお酒が入って　異様に陽気になってるユイ達と
今日　悪魔を退治したヒーローが　ニコニコと拍手と乾杯を繰り返し　笑顔を振りまいていた
モパは　時折　ひきつった笑いになっていたが　みんなはもう気にしないほど楽しんでいた

・・・・・・・・・・邪な気持ちで　この家に来なくて本当によかった・・・・・・・
と　心からそう思ったモパだった

旦那さんはモパを見るたびに「イケメンでかっこいいなぁ！モテモテだろう？」をひたすら繰り返し
酔っ払いモード全開で　モパのいいところを褒めていた
ユイも　それを聞いてはしゃいで同意していた
もう　いい加減寝てくれ・・・と思う時間まで宴は続き
眠くなった春と一緒に酔っ払い達も　倒れこんで寝てしまった

強いエネルギーの持ち主と　この隙だらけの家族の能天気なギャップに戸惑うモパだった

流される新参者と美しきリーダー

春はモパのことが大好きになり　よく名前を呼んで一緒にすごしたがった
モパは悪い気はしないけれど　適度に距離を持って接していた
それでもユイも家事の合間に　相手をしてもらえるのでだいぶ助かってると喜んでいたのだ

数日がたち　夜公園に今度は妖精同士の歓迎会に行くことなったモパは
隣の家に住んでるミクと一緒に出かけることにした
春はまだ起きている時間だったので　大好きなモパが出かけるのを知って大泣きしていた
旦那さんは困り果てて「父親の面子ないね」と苦笑していたのだった

若干後ろ髪引かれながらも　会場までの近い道のりだが
いつもより月の光を浴びて　すべてが輝いて見える美しいミクと
スラりと背の高い　物腰の柔らかい均整のとれた顔立ちのモパが一緒に並んで現れると
誰もが見惚れるお似合いの二人だった

公園には　１０人くらいの男女合わせて　妖精が集まっており
国籍・見た目年齢や風貌も様々だったが　みんな　新しくやってきたモパに興味を注いでいた

ミクが「モパよ　最近あの青い屋根の家に来たの」
とみんなに紹介を始めた

それだけで　辺りから大きなどよめきがあった

「あの青い屋根のうち？　ミクの隣の？？」
センバティも驚いて　モパを凝視している
春の例の一軒を目の当たりにしてからは　この反応も納得できるモパは黙ってうなづいた
「・・・　あのチビと共存できる物がいるなんて驚きだ」
誰ともなくそういうと　改めてモパの力の強さと非凡さが知れ渡った
一人一人　ミクとセンバティは仲間に自己紹介を始めた
一目おかれたモパは　遠巻きにもみんなに歓迎されたのだ
エネルギーを求めて　ここにはたくさんの人が集まる
だが　邪気を放つものは　ことごとく消されているのだ
もちろん　春に・・・・・・・・・・・・
家に直接住む者はいなくて　離れた所からエネルギーを狙って　よそからいろんな奴がやってくる
縄張り争いも熾烈なこの地域で　生き残ってる物は　それなりに力をもっているそうだ
妖精たちの話を聞き　モパは　改めて不思議な所にやってきたのもだと思っていた
それぞれ　他の話題に話が反れたところで
仲間の中で　物静かにしている　体の大きな濃い顔立ちの男に目をやる
明らかに　他のものより力がありそうだ
眼差しも鋭く　威厳があった

モパと目が合うと　男はモパの隣に近づいて
「ツフュールだ　・・・・・・・・モパはここに長居するつもりはあるのか？」
と聞いてきた
その言葉に　数人が耳を傾けていた
「いや　そのつもりはないよ」と答えると
聞き耳を立てていたセンバティは心なしかホッとしていた
ミクは　眉をしかめて
「気が変わるかもしれないわよね　モパがいてくれたら心強いのに・・・・」
と　訴えるような眼で言った
その様子に　ツフュールは　フッと笑う
ミクは　目線を移すと　険しい表情でツフュールをにらんでいるようだった

「少し　場所を変えよう、あちらにきれいな池があるんだ」そう言って　ツフュールと二人きりになったモパは
「あなたが　ここのリーダーか？」と尋ねた
ツフュールは池に目を移したまま
「以前はそうだったが　今は違う。美しき新しいリーダーに譲ったのだ」

「・・・・・・・・ミクのことか？」
飛びぬけて≪美しい≫姿をしているのはミクだった
しかし　女であり若いミクがリーダーだとは　少し意外だった
しかも　このツフュールを差し置いて

「彼女は　君の家の隣に居れるくらいの力をもっている
見た目はかよわいかもしれないが　この中ではリーダーに相応しい」
遠くに離れたミクを見つめ　そう言った

「ただ　やはり対処しきれないほどの相手もやってくるのだ
君は強い力を持っているし　彼女も好意をいだいているようだ
若き美しいリーダー達が生まれれば　彼女もお飾りではなくなるの
だはないか？」
どこか　ミクを小馬鹿にしているような話だった

「それは　あなたが決めることではないと思うが」
怪訝そうな表情で　ツフュールを見つめたモパだったが

ツフュールは失笑しながら
「すまない　年寄りの戯言だ」と言い　ツフュールはその場を離れた

またみんなのもとに戻ったモパ達は
他愛無い話をして　仲間とのひと時を過ごす

ミクは帰り際　モパにツフュールとの話の内容を聞いてたが　モパ
は口を濁した
「あいつは　私を認めてないのよ」と　大体の話の予想はしていた
らしく　険しい表情をみせた
「でも　こまった時は　頼りになるのよね
いつか鼻をあかしてやりたい相手なのよ」と　力を込めて言った

「ミクは　逞しいな」
笑顔で　本心からそう言うと

ミクは　真剣な表情で見つめ返し
「モパがいてくれたら　もっと強くなれるわ」と言った
・・・・・・・・・？・・・・・・・・・・・

これは　どういう意味だろう
とっさに判断が鈍くなったモパは　大きな瞳に吸いこまれるように
動けずにいた

ミクの細くて長い指がモパの腕に触れると　さすがに　ドキッとした
たモパだった
形のよい唇がゆっくりと近づいてくる
思わず　その様子をただ見ているモパだったが

後ろから　すごい勢いで近づいてくる気配に我に返った

目を血ばらせながらセンバティが二人の間に割り込む
「私も　話に混ぜてくれ」と　息を上がらせて　そう言った

お似合いの二人の様子にやきもきしていたので　ずっと割り込む隙
をうかがっていたのだ
センバティだけは　二人が親密になるのを　あからさまに嫌がり
みんな　その気持ちを知ってるだけに　歓迎会の間もずっとからか
っていたのだ

ミクもその気持ちを十分知っているが　気持ちにこたえるつもりは
毛頭ないので
そっけなかった

邪魔者をはさみながら　家までの近い道のりを3人仲良く帰路につ
くのだった

捜索される妖精

ある晴れた天気の良い日に　買い物に出かけたユイが　急いだ様子で帰ってくると
モパに　意外な話をした

ちょっと興奮してるのがわかる　大きな眼を見開いて　唐突に
「今日　モパを探してる人に会ったの」
と言った

「わたしを？　妖精か？」
身に覚えのないモパは　誰のことか見当もつかなかった

ユイは　大きく首を振って　深呼吸をすると

「１００均でね・・・・
前に　モパが入ってた箱のコーナーにたまたま　行ったのよ
そしたらね　女子高生の子一人　次々と箱を開けてたの」

モパの脳裏に　前同居人の女子高生が鮮明に浮かんだ

「なんだか　慌てた様子で　でも　必死で　探してるようだったわよ
あれって　前に話してた　女子高生なんじゃないかな～って？」
モパの表情は変わらないので　ユイはさらに続ける

「それでね　余計なことだったんだけど　どうしたのか　声をかけたの」
ちょっと気まずそうに言った

「それで？」
モパは　前同居人である確信があったが　いまさら何の用で・・・・？
理由は分からなかった
「箱に入ってた人形を探してるんだけど　見なかったかと　尋ねられたの」
モパの顔を覗き込むように言った
「間違いなく　前同居人だな」
ため息をもらしながら　そう呟くと　さらに話の続きを聞くことにした
「見かけないって言っちゃった　だって　一度は捨てたんだんもんね」
仲間内では一目置かれるモパだったが　子犬のように　捨てられたのだ
顎に手を当てて　考え込んだモパだったが　いつ聞いても　この身の上は　情けないと
感じていた
「見た目は　いまどきのギャルよね
エクステ　ネイル　化粧もすごいし　まつ毛も　すっごく重そうで・・・・
モパは　あの子と波長が合ったから一緒にいたのよね？　不思議だわー」
しみじみとそう言ったユイだった
「彼女については　波長は関係なく

色々データーを集めていたら　ひっかかってしまったと言うほうが
　正しい」
と　告げた

「携帯を　いろんな人が持っているだろう？
欲しい情報があって　携帯をメインに探し物をしていたら　やたら
携帯に固執する者に
ぶつかってしまって　それが　彼女だ
とにかく　尋常じゃない頻度の使いようだったから」
その記憶は消し去りたい　モパだった

「情報って？」
ユイは　不思議そうに尋ねたが
「仲間についてだ」と　簡単に説明をしたが　それ以上は話さなな
かった

「それにしても　今頃なんで？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱり　あれかな　願いを叶えるって約束の
ことかな・・・」
欲深い彼女のことだから　モパを手放した後　約束を果たしてない
ことに
気がついて　諦めきれないのだろう

ユイは驚いた顔で
「それ　本当？　モパそんなこと出来るの？？」
と　真剣な表情で　聞き返した

モパは
「ユイでも　そういう話に興味あるんだな」と笑いながらそう言った

「だって　すごいことじゃない！！　」
ややムキになって　そう言った

苦笑しながら　モパは
「結局　叶える前に捨てられたんだがな」
と　言った

よくある物語のように　そんなことがあるのかと　ユイは驚いたが
ファンタジーの世界に　目をキラキラさせている

現実は　そう甘くないと　諭したかったが　声をかけるのも躊躇する
ほど
妄想の世界に入ったユイを横目に　ちょっと　気が引けたモパだっ
た

妖精にすがる女子高生

とある高校の　職員室で　いかにもいまどき風の女子高生は担任に呼び出されていた

校則から大きく外れた格好をしているので　呼び出されることには慣れている

長い髪をもてあそびながら　短いスカートやネイル　茶色い髪色について

毎度　同じような注意を受けてうんざりしている様子だった

中年の男教師は　諦めたような様子で

「山本　いい加減　こちらの言うことを聞いたらどうだ？

毎回毎回　こっちだって好きで注意してるわけじゃないんだぞ！

それに　今回は　お前の進級が危ういんだ・・・そんな格好に構ってる暇ないハズだぞ」

最後は　神妙な顔つきで心配そうに言った

今回呼び出された理由は　進級についてだったのだ

今まで高校を遊び場の延長としてしか考えていない女子高生の成績は悲惨なものだった

ついに　進級できないところまできてしまったのだ

「次の模試で　３教科５０点を超えないと　お前は進級できないんだわかってるのか？」

まっすぐ　山本という女子高生の目を見て言うと

伏せていた顔をゆっくりあげて　小さな声で
「わかってます・・・・・・・・」
と　答えた

さすがに　進級できないとなると　困るのだ

担任は　きっと分かっていないだろうなと　感じていた

５０点というハードルは　この女子高生にはとてつもなく高いので
　不可能であると
職員会議でも　他の指導者たちも同じ意見だったのだ

真面目に勉強に取り組むタイプではないので　留年も無理となると
「退学」しかないのだ
担任から　解放された後も　放心状態の女子高生は　いつもと同じ
身なりには構うのだが
イマイチ　勉強に本気になれなかった

模試まで３週間を切っていた　家族にもその旨通知が行き
毎日　親からも泣きながら怒られてる状態で

本人もさすがに「やばい」と思い

最近は　クラスメートや　先生に放課後勉強を教わっているが　今
までサボっていた分
とにかく　飲み込みが悪く　ちんぷんかんぷんだった

親からも　高校中退後の働き口を探せと言われ
最近は　事の深刻さに気づいて　自分なりに　勉強も真剣に取り組

んでいた

「ゆかり・・・・　どう？　この問題は　わかる？」
クラスメートで成績の良い友人が　放課後　数学を教えてくれていたが

泣きそうな顔で　ゆかりは　首を振った
「どうしよう　もう時間もないのに　これじゃ　学校辞めなきゃいけない」
そう言うと　みじめで　涙が浮かんできた

集中力もなくなってきたゆかりは　友人がまとめてくれたノートを持って
家に帰る途中の　１００均に　今日も立ち寄っていた

頼みの綱はあいつだけだ・・・・・

わらにもすがる思いで　今日も　前に捨てた妖精を探していたのだった

今　一番会いたい人

高校の授業が終わってから　放課後は　友人か教師が1～2時間ゆかりの勉強を見るのが
ここ最近の日課になっていた

模試の日が迫ってくると　友人も自分の勉強もしなくてはいけないので
教師に教わるというパターンが多かった

今日は数学の新任の男性教師だった

年が近いせいか　頼りなく見えて　いままで小馬鹿にしていたが

今は親身になって　勉強を教えてくれる味方だった

新任教師も　早々に進級できない生徒を持ってしまい　なんとか進級させようと
テストに出そうなところを教えたり　問題の解き方を分かりやすく説明するが
今まで　何も勉強をしてこなかった　この生徒には　かなりの難関だった

今日も　手ごたえなしで　下校の時間もとっくに過ぎたので　女子生徒の
元気のない姿を見送りながら　同じように深いため息をついた

辺りは　部活帰りの生徒もほとんどいなくなり　真っ暗になっていた
今日も重い足取りで　家へ帰るが　その前に　いつもの　例の妖精
探しだ

以前偶然見つけた妖精は　しばらく同居したものの

次第に邪魔になり　一緒にいるメリットとして　願いをかなえると
いう提案をくれたのだが

当時のゆかりの願いは　「憧れのバスケ部の先輩と両想いなること」

けれど　人気のある先輩には　すでに彼女がいて　　願いを叶える
には　難しいと言われ
願いを叶えても　無理に思いを捻じ曲げて付きあっても　続かない・
・・・・
ということを言われ

頭にきて　近所の１００均の小箱の中に　捨てたのだった

この話を　友人にしたら　成績はゆかりと同じようなもになのに
ものすごく　変人扱いされ　他の友人にもその話が伝わり「危ない
子」と思われたので
この話題は　もう　他の人にしなことにしたのだ

大きなため息をついてから　いつもと同じように　小箱の中を片っ
端から開ける

お店にも毎日来ているので　店員に目をつけられ　ゆかりの行動は
　遠くから見守られるようになった

その視線に気づいているが　構わず　最後まで確認すると　今日も収穫なしで
泣きそうな表情で　何も買わずに　店を出ていく
その時携帯が鳴り響き　母親からの着信があった
「ゆかり！　今どこにいるの！？　もうすぐ試験なのに
道草してないで　さっさと帰ってきなさい！！」と　一方的に用件を伝え　電話はきれた
母子家庭で育った　ゆかりは　家族会議で進級できなければ高校を辞めるという話になったのだ
帰ってからも勉強の続きをしなくてはいけないが　まったく捗らず時間だけが過ぎて行き　進級できる自信はほとんどなかった
「もう　1週間しかないじゃない・・・・・・・・・
どこにいるのよ　モパ・・・・・・・・・」
ついに　泣きだしてしまった
泣きながら　道を歩くと　回りの人から　珍しそうに見られるが
声をかける人は　誰もいなかった
その時　迷子になった子供のように泣くゆかりの目の前に
見覚えのある　人形を片手にもった男の姿が　涙で滲んでぼんやりと映った
背の高く　若い男は　ゆかりの目の前に立ち　ほほ笑んでいた
「久しぶりだな」

それは　ゆかりが　必死で探していた　モパだった

金八妖精モパ

実寸大のモパを見たのは初めてだった

服装も　雑誌に出てきそうなカジュアルな格好で　紺色の上着と黒っぽいジーンズが
細い体を強調してるかのように見えた

服の上からでも　均整のとれたバランスの良い筋肉が健康そうで
物腰も柔らかく背も高い　モデルのような風貌だ

マスカラが取れ　目の周りが真っ黒になってたゆかりと　モデル風のモパは遠巻きに
いろんな人から視線を集めている

黙っているゆかりに　モパは
「私がだれか　わかるか？」と　声をかけた

ゆかりは　その言葉にようやく反応し
「ずっと　探してたのよ！　分かるわよ・・・・どこにいたのよ！！」
と　半分怒りながら言い放った

「どこって・・・・わたしを捨てたのはそっちだろう？」
モパがそう言うと　ゆかりも何も言えなくなってしまう
確かに　捨てたのはゆかり本人だから

しかし　この会話は　情けない痴話げんかにしか聞こえないので
あまり　人通りの多い所でするものではないと　察したモパは

「場所を変えないか？　人目に付きすぎるから・・・・」
と　歩きながら　近くの公園に向かった

ゆかりは　モパが消えないように　トレーナーの裾をずっと掴んでいる

モパには　ゆかりと接触を持つメリットは何もなかったが
モパ以上にこの女子高生のことが気になって仕方がなかったユイに
ゆかりがずっとモパを探してると　報告をうけていたのだ

毎日の日課になった報告にさすがに　仕方なく　重い腰を上げざるを得なかった
それに　かなりのエネルギーを蓄えたモパは　人間サイズに変身することでエネルギーを拡散することにしたのだ

そして　あっさりゆかりを発見し　接触することにしたのだ

公園に着くと　二人はベンチに腰掛け　ゆかりが口を開くのを待った

他には　遠くに犬を散歩させている人など　まばらにだが見かける程度で
２人の会話に支障はなかった

ゆかりは　化粧もとれた　泣きはらした顔でモパの横顔を見上げ
「高校を辞めなきゃいけないかもしれない　進級できなくて・・・・
勉強してるけど　全然だめで・・・・・
もう　試験までちょっとしかないのに・・・・・」
と　後半はまた涙が浮かんで泣き声になっていた

だまってゆかりの話を聞いていたモパが
「学校は辞めたくないんだな」と言うと
ゆかりは　勢いよくその言葉にうなづいた
「前に　願いを叶えることができるって言ってたじゃない？
まだ　叶えてないし　これで最後のお願いだから　進級出来るようにさせて！」
真剣な表情でそういうのだが　モパは無表情のままだった
「仮に　願いを叶えて進級できたとして　そのあとは　どうするんだ？」
「どうって・・・・？　　とりあえずこの危機を乗り越えれたら
それでいいのよ！」
「・・・それで　また次の進級会議で　ひっかかるんじゃないか？」
「・・・・・・・・・・それは・・・・・・・。
じゃあ、頭を良くして！っていう願いは??」
モパは大きなため息をついて
「他力本願じゃ　またすぐ次の危機がやってくる　願いは持続しないんだ。
その時　わたしは　もう手助けは出来ない・・・・・そもそも　捨てられた身としては
あなたの願いを叶える義理もないんだが・・・・・・・・・」
その言葉を聞いて　ゆかりは大きなショックを受けていた

最後の頼みの綱がせっかく現れたのに　つきはなされた感じを受けた

「前にもいったが　魔法は悪の力を借りれば　簡単だ
でも　それには必ず代償がいる　願いが困難であればあるほどにだ・
・・・

進級のことについては　事は大げさではないけど　それでも大きな
問題だろ？
親切でいってるんだから　誤解しないように！　死んでも永遠に
魂を持て遊ばれる人もいるんだ。

わたしは　悪の力を使いたくないし　あなたとの関係も　これで終
わりにしたい
お互いの　利点を考えると　わたしは　あなたに立ち直るきっかけ
を与えることが一番だと思う」
言ってることが　すぐ飲み込めないゆかりは

「どういうこと？」
さっぱりわかりませんという顔をしてるので

「つまり　いずれまた同じような困難に会った時
もう対処できない。　あなたも　努力するべきだと言っているんだ」
と　簡潔に伝えた

「するわ！　どうしたらいい？？」

単細胞の脳みそのゆかりの発言に　思わずひるんだが

「進級出来ないのは　どうしてだと思う？」

「・・・・・・・・・・頭が悪いから・・・・・・・・・」と、ばつの悪そうな顔でゆかりが答える

「みんなスタートは一緒だ　努力はしてるのか？」

「してるわよ！　ここずっと勉強漬けで　頭がおかしくなっちゃいそう

少しは分かるようになってきたけど　目標までは　届きそうにないの・・・」

「少しは　分かるようになってきたんだな」

と　モパは優しくほほ笑んだ

「時間はどれくらいいる？」

「え？」

「どのくらいの時間があれば　自信がつくんだ？」

「・・・・わかんないけど　2か月くらい本気で頑張れば・・・・・・」

「1か月だ　　長すぎても　集中力は続かないだろう」

そう言うと　すくっと立ちあがったモパは空を見上げた

そして　振り向くと　ゆかりを見つめ

「1か月　時間をあげることにするよ　　本気で頑張れば大丈夫だ

願いを叶えたら　私のことは忘れる・・・・もう助けはできないあとは　自分次第だ。」

と　有無を言わさない強い眼差しだった

それでも　一度は捨てたモパからの思わぬ申し出は　ゆかりにとっては

とてもありがたかった

「わかったわ　モパ・・・・・」

泣いても笑っても　これで最後のチャンスだが　親身になって協力してくれることがありがたかった

「モパ　イイ人よね、イイ妖精か？・・・・とにかく金八先生みたい！」

と　ゆかりは　すっかり笑顔になっていた

苦笑したモパだが　約束通り　勉強に専念できる時間をゆかりに与えた

そして　最後に手を出し

「これで　さようならだ」と　握手を求める

ゆかりは　長身のモパを見上げ　笑顔で　片手をだす

そして　ふっと真顔になると

「そういえば　モパが前に探していた人　この公園の近くにいたそうよ

モパがいなくなってから　従兄に気になって聞いちゃった

確か　ログハウスで何か起きて　そこが取り壊されたとかで・・・・・

詳しくは知らないけど　そこに居れなくなって家族で引っ越しした

そうよ」

ゆかりから　その情報を聞いて

思わず　丘の横を見たモパは　鋭い目つきに変わっていた
ただならぬ様子に　一瞬ひるんだが
「モパ？」と声をかける
「・・・・・・そうか　ありがとう　」
と　今度は優しくほほ笑みを浮かべ
「最後にその情報を聞けてよかったよ　　さようなら」と
ゆかりのおでこに　片手をかざし　モパに関する記憶を消した
あとは　進級試験の一か月前に戻ったゆかりが必死で　勉強にとりくむのを
遠目で見守ることにした
モパは　ゆかりが消えた後も　しばらく公園にいた
目線は　やはり丘に向いている
「わたしは　この場所にひきつけられたんだろうか？」
偶然この土地に　やってきたのではないという　予感がした

恋愛相談にのる妖精

あれから妖精サイズに変換して　家に帰ると　ユイ達は一家団欒を
囲んでいたが

興味深々で　女子高生の話を聞いてきた

「で？　　で？」
とくにユイは　モパより気になっていただけあって　力が入っていたが
話を最後まで聞くと　安心した表情になった

「よかったわね～　いい妖精に出会えて！　　その子の人生大きく
変わったわよ。」

「う～ん　あとは　本人次第かぁ・・・・　どうなるんだろうね
一ヶ月後」
旦那はビールを飲みながら
「モパは　もし　その子が進級できなかったら　どうするんだ？」
と聞いてきた

少し考えて
「・・・・言った通り　もう　助けはしない　　それが彼女の人生
だ」
と答えた

その言葉を聞くと　ゆっくりうなずき
「その子のためにもなるしね　　そう考えると　アニメのキャラは

主人公に甘いな
あれじゃ　成長できない
いつまでも　頼る存在を離せなくなってしまうよなぁ
あぁ　でも　ドラえもんの最終回は　泣けたけど・・・・」

なぜか　ドラえもんはリサーチ済みのモパも　うなずいた

まぁ　一緒にされてもどうかとも思ったが　確か　のび太が独り立ちするのにボロボロになっても
果敢にジャイアンに攻めていく姿が浮かんだ

「私　春がそういうことになったら　どうしようって考えちゃうな
進級・・・・受験・・・・・いつかは来るのよね～
なんだか　その女子高生のこと　どうなったか気になっちゃう・・・・
あ！　でも　もう、　私も声掛けたりしないからね」
最後は　モパに向かって言った

数日後　公園にまた足を伸ばしたモパに　センバティが笑顔で近寄ってきた

「この前の夜の若い女は　彼女か？　　ああいうタイプが好みなのか？」
からかうように話かけるが　モパは嫌な顔をせずに

「そうだな　前の女だ」
と言った　間違いは言ってない　前同居人だから

かなり不似合いの2人だったので　その言葉を聞いて　とても驚いたセンバティは思わず
「趣味　悪いぞ！」
と　モパが怒ったらどうしようかとは考えずに　うっかり言ってしまった

「・・・・そうだろうな・・・・・・」
相変わらずの真顔のモパに　センバティは信じられないという表情で固まっている
ゆかりが聞いていたら　物を投げつけられそうな会話だと　思っていた

「モパはさ・・・・
ミクのことどう思うんだ？　タイプか？」
ようやく言いたい本題に話を持っていくと　今度は真剣な表情で答えを待った

「美しい人だと思う　彼女に好かれて嫌な思いをするものは居ないんじゃないか？」
と　センバティの反応を見ながらモパは言った

「そうだよな・・・モパでもそう思うか・・・・」
好きな相手を褒められてうれしいけれど　ミクは　モパに気があることくらい
センバティも分かっていた
最初は　にやけていたが　突然凛々しい表情になって　モパをまっすぐ見つめ

「実は　私は　ずっと前からミクが好きなんだ」

と　言った
いまさら　愛の告白をしなくても　誰でも気づいてるんじゃないかと思っていたので
逆に　モパは　話の続きが気になった

「でも　自信がなくて　彼女に言えない・・・・
なんて言ったって　彼女のほうが強いし　賢いし・・・・立場ないし・・・・」
どんどん背中が丸くなっていく

「モパくらい　力があれば　自信持てるんだがな」
恨めしそうな目で見られた

憎めない奴だが　これでは　ミクでなくても　ついていけないだろうと思った

「力の問題じゃないだろう」
と言うと

「力があるから　そう言えるんだよ」
と　センバティは　投げやりになっていた

見かけは男らしいのに　意外に女々しいなと思ったが　その言葉を飲み込んだ
これじゃ　いつまでたっても　ミクに振り向いてもらえそうにない

「力があればいいのか？
じゃあ、　我が家で補給したどうだ？」
この提案を聞いて　センバティは　驚愕の表情になる

「何言ってるんだ　この前　またあのチビに　両手でバーンって
つぶされた悪魔がいるんだぞ！！　知ってるだろう？
それから　あの技はサンドイッチと仲間内で言われてるんだ」

「・・・・それは知らなかった・・・・・」
笑いをこらえてモパはそう言うと

「そ・・・そうだな　どうしよう　確かに力は格段に得られるけど
死ぬかもしれないし・・・・・・・サンドイッチで死滅って・・・
かなりブルーだなぁ」
大きな体が　どんどん丸まっていくのを見ながら

「私の友人としてなら　大丈夫じゃないか？
もちろん　保証は出来ないけど　邪な気持ちがなければ　春も手だ
ししないよ
煩悩を捨てるんだな」
と提案した

いつまでたってもキリがないので　このおかしな友人が悩んでる隙
に　モパは　丘のほうへ移動した

気が弱いが男らしい奴と気が強い愛しい人

丘の周辺は　日が陰ってるところは　湿気が多いが
マイナスのエネルギーとなるものは感じられない

以前と同じように　これと言って　なにも読み取れないので
ここにログハウスがあったということも知らなければ　ただの丘で
しかなかった

なぜ　ログハウスは取り壊されたのだろう？
この土地に古い人に聞けば　糸口がつかめるかもしれない・・・・

確か　センバティは１０年前から居るはずだったが　知らないとな
ると　もっと古い人・・・・
この辺りの妖精に　尋ねてみようか

黙って　考え事をしていた脳裏に　寡黙そうなツフュールの姿が浮
かんだ

なんだか　気軽に聞けない雰囲気だが　一番　情報を得るには早そ
うだ

ツフュールに会いに行こうと決めて　居場所を確かめるために　セ
ンバティの方向を見ると
小さくかがんだり　立ち上がったり　まだ悩んでる姿が目に入った

「ここは　一皮むけるチャンスなんだ・・・・！
いや　でも　強行すぎないかなぁ・・・・」
ブツブツつぶやく　センバティに　半ば飽きれて

「まだ悩んでるのか？　取り込み中すまないが　聞きたいことがあるんだ」
と　隣に立ったモパは

「この土地で　一番古くから居るのは　誰か知ってるか？」

「そりゃあ、　前のリーダーのツフュールだろう
きっと　１００年はこの土地に居るんじゃないかな」

「そんなに長いのか・・・・　分かった　じゃあ、ツフュールはどこいるのか知ってるか？
聞きたいことがあって　会いたいんだ」

「・・・・ツフュールにか？　隠居してからは　どこにいるか知らないなぁ
なんだか　喋りにくい相手だし・・・・・　ミクに聞いたら知ってるだろうけど」
そこで　ぱっと明るい表情になったセンバティは

「じゃあ、　今からミクに会いに行かないか？　ツフュールについてミクは詳しいし
ミクもこの土地に３０年はいるはずだからサ」
さっきまでとは違い　生き生きしている

「ミクもながいんだな・・・・そうか　じゃあ、とりあえずミクに会いに行こう」
モパは提案を受け入れ　センバティと一緒に家の方向へ向かった
公園から家までは２００メートルほどの距離だが　センバティは徐

々に
「力が漲るような感じがする・・・・」と　言っていた
実際は　そんな短時間で力は得られないと思ったので
「愛の力かな？」
というと　照れたセンバティに　思い切り突き飛ばされた

そのとき　正面の道路に　悪魔が2人うろついているのが見えた

エネルギー目当てか？　咄嗟に身構える　センバティとモパだったが
さらに　悪魔が　後方から3人　近づいてきた

どれも　凶悪な顔で　背中を丸めて　ニヤニヤ笑いながら　近寄ってくる

「なんだ！お前ら　　何か用か！？」
センバティは正面の悪魔に向かって言った

「青い屋根の家に住んでるのは　どっちだ？」
前のめりになって　戦闘態勢に入るのが分かる

「私だ　何の用だ？」
モパは　睨みつけてそう答えると

「邪魔なんだよ！！」
と　スピードを上げて　モパに飛びかかってきた

すると　周りにいた悪魔も　次々と飛びかかろうしてくる

モパは　後方にいた悪魔3人を　パワーで押さえつけ
前方の悪魔をにらんだ瞬間

センバティが正面の悪魔を2人捕まえ　思いっきり蹴り上げ
後は　プロレス技が炸裂していた　バックドロップで　もう一人の
悪魔は　立ちあがれず動きが止まった

見るからに　ボロボロになっていく悪魔の様子をみて　ここはまか
せようと

残りの悪魔の首を　魔法で締め上げていった

苦しそうにもがく悪魔の体が　どんどん小さくなっていく

「何のつもりか知らないが　いきなり戦いを挑むなんて　それなり
の覚悟あってのことだろうな」
モパは冷たい目で　悪魔をさらに締め上げる

すでに悪魔3人は泡を吹いて　意識がなくなった

残りも　ボコボコにされて　フラフラで意識もうろうとしている

その時　ミクのテリトリーから　さらに3人の悪魔が　道路に飛ん
できた

飛ばされたといたほうが正しい

その後を　ミクが　追いかけ　大きな波動で　悪魔の動きを封じて
身動きの取れない悪魔の前に　怒りの表情で　立っている

右頬には　戦闘でついたようで　赤い擦り傷があった

それを見た　センバティは　ブチ切れ
ありったけの力を放出し　その場にいた悪魔全員をパワーで吹き飛ばした

ミクも　それで　ようやく2人に気づき

悪魔が消え去ったあとを確かめると
「ありがとう　悪魔が徒党を組むなんて初めてのことで・・・・・」
と　頬に手をあて
硬い表情で2人に礼を言った

「ミク　怪我してる！」センバティは　慌ててミクの頬押さえ　手当をはじめた
しばらくすると　怪我は消えて　元通りに戻りホッとしたが
ミクと目が合うと　大接近したセンバティはあとから　うれしさと恥ずかしさがこみあげて
不自然に距離を置いていた

モパは
「私を狙ってきたようだ　巻き込んですまない」と　誤った

「よくあることなんだけど　悪魔はまず　つるまないと思ってたから油断したわ」
と　悔しそうにミクは言った

「モパの様子を見るために　家に入ってきたみたい
で、　あの子が　先に入って行った悪魔を4人　退治していたわ」

「サンドイッチで・・・・か？」

センバティが尋ねると聞くと

「・・・・飛び跳ねて　石飛みたいにつぶしていたわね」
と　ちょっと　苦笑いで答えた
春は　またいとも簡単に悪魔を蹴散らしてしまったようだ

「ミク　やっぱり　危険だよ！　青い屋根からもっと離れないと
また　どんな奴らが来るか分からない　場所を変えよう！」と
センバティは心から心配してそういったが　ミクは首を振った

「どこにいても一緒よ　　私はここを守る義務があるのよ　離れられないわ」
きっぱりと答えた

「リーダーは　またツフュールに頼めばいいじゃないか？」
センバティが諭そうとすると

その言葉に　ミクは険しい表情に変わって
「悪魔を仕向けた　本人かもしれないのに？」と
強い意志を持った　眼差しを　モパとセンバティに向けた

この辺りの妖精事情

「どうして　ツフュールが・・・？」
モパは　理由が見当たらないので　黙っているミクに尋ねた

センバティも　黙っていたが　ミクが話す前に
「・・・・・モパが来てから　悪魔が現れる回数が増えたって言ってたことと
関係あるんだろう？
それに　最近　緊急招集がかかったっていうのは　そのことで？」
と　黙っているミクに　尋ねると

小さなため息をついて　ミクはゆっくりと口を開いた
「そう　緊急集会ではそのことを話し合ったわ
でも　ここでは詳しく話せない　とりあえず　私の家へ2人来てくれるかしら？」

少し　警戒しているような2人も　同意して　ミクの家へと向かった

ミクの家は　モパの隣の家なのだが　テリトリーとして
家の中ではなく　庭の物置の一角に　大きなブラックホールを作り
中は　妖精が30人はくつろげる
立派で大きな作りになっていた

人間の家のように　応接間として　いくつかソファや　テーブルなども設置されていて
白亜の城のような印象だった

ソファに座るよう勧めると

「ここは　会議にも使われるから　とても広いのよ」と
驚いているモパとセンバティに　言った

「実は　最近　エネルギーを狙って悪魔が頻繁に出入りをするようになったの
原因は　色々意見を交換したんだけど　あなたが原因じゃないかという結論が出たわ」
ミクは　早速本題に入った

「私が？」

「つまり　隣の家のエネルギーを求めて　縄張り争いが続いたこの土地は
今は　妖精が支配している

以前は　悪魔が支配していた時もあって　お互い　ずっと機会をうかがって
奪い返そうとチャンスを狙っているの

そこで　私達はこの地を拠点に半径2キロ四方ごとに　リーダーを立て
縄張りを守ることにしたの

本来妖精は　戦う種族じゃないけれど　ここは戦闘タイプの妖精が集まっている
拠点から近いほど戦闘能力は高いんだけれど　周りも　もとは　激戦区で戦っていた妖精達だから
知恵と経験値は　ずっと上ね。」

「なんだかすごいところだったんだな・・・・知らなかった・・・」

驚きを隠せずモパが言うと

「その激戦区のリーダーは　ミクなんだ
エネルギーの見返りもあるけど　ここを狙うものから守ってるんだよ　　リスクも高い」
センバティは　モパに付け加えて説明した

ちょっと　さみしそうな表情で笑うと
「現実は　私ひとりじゃなくて　ツフュールの意見を聞いたり力を借りて
リーダーになったって感じね

ツフュールは　私に色々教えてくれる先生みたいな存在だったの」

でも・・・・・と　表情を強張らせて
「ツフュールは悪魔とも　交流を持っているのよ
気に入らない相手は　人知れず消していた　　今回も　そうなんじゃないかと思うの」

「・・・・・・」
3人は黙ってしまったが　センバティが

「ツフュールは　確かに強くてこの土地をずっと守ってきたけれど
仲間を襲うように仕向けるなんて　許せない」
沸々と怒りをたぎらせてるセンバティは　先ほどの　ミクが怪我したことを思い出し
静かに闘志を燃やしていた

ミクも
「今回のことが　彼の仕業なら　ほっとけないわ」

と　言った

「わたしも・・・・　理由が知りたい　彼は何か意図があって行動する人だと思うし
他に　聞きたいこともあるんだ」
真剣な表情で3人は話し合いを続けた

しかし　解決策はやはり直接確かめるべきだと思ったモパは
「ミク、ツフュールの所へ　案内してくれないか？」
と　聞いた

「ええ、いいわ」と
ミクもすぐ賛同してくれたので　3人は　一斉に立ち上がり　ツフュールを尋ねることにした

彼の思惑

悪魔を引き寄せている・・・・・本当なんだろうか？

センバティは　移動中　３人ずっと黙ったままの状態で各々考えは別々だったが

自分なりにモパについて考えていた

自分たちにとって　敵になる存在とは思えないのだが　もしかしてツフュールは

何か情報を掴んでいるのだろうか？

そして　ミクは　どう考えているのか？

追放や戦いを余儀なくされれば　彼女はモパと戦うのだろうか？

隙のない美しさや物腰からは　そうなれば躊躇しないだろうと想像はついた

そんなことを考えていると

１キロほど離れた　小高い住宅地に入り　駐車場になっている裏手に　たどり着いた

そこからは　モパ達の家や　公園まで一気に見渡せた

ミクは　立ち止り　テレパシーで交信をした

すると　ブラックホールが開き　３人は　順番にその中へと進む

ミクの家とは正反対で　部屋は一つ　無機質でシックな部屋だった
一人用の　ソファとテーブルがあるだけで　すぐ　ツフュールの姿
が目に入った

ギロッと鋭い眼光で3人を見ると　立ち上がって
「3人お揃いでで　何の用だ？」
と　無表情でミクに向かって聞いてきた

「さっき　悪魔に襲われたわ　しかも　つるんで12匹もよ　」

「そんなに大勢でか・・・・？　　それで　3人で追い払ったわけか？」

「正確には　人間の子も入れてだけどね」
と　センバティが言った

ツフュールは硬い表情のまま
「頼もしい仲間がいて　よかったじゃないか　　私も　安心だよ」と
言うと

「悪魔がつるむことなんて　今までなかったわ！
それに　あれだけの数の悪魔が一気に入ってきたら　まず　あなた
が気付くはずよ」
強く言い放つと

「・・・・・・何が言いたい？」
渋い顔はますます　不機嫌そうにゆがんでいく

「この前の会議でのあなたの発言が　気になるの・・・・
悪魔を　差し向けたのは　あなたなんでしょう？」
確信を得ているのか　ミクは　ツフュールから目をそらさず返事を待った

ツフュールは　ニヤッと頬を緩めると
「さすがに　リーダーだな・・・・
確かに　何人かで拠点へ突破していく姿を見た　　私は　阻止しなかった

しかし　君たちなら　あの悪魔どもを追い払うことも予想がついていたよ」

その言葉に　ムッとしたセンバティは　ツフュールを睨んだ

3人の様子を面白そうに見ながら
「結果的に　しばらく悪魔はやってこないだろう・・・・・
大勢で行っても　蹴散らされると実証されたんだ　　予定通りだよ」

ずっと黙ってモパは　ツフュールの発言について考えていた

ミクとセンバティは　あからさまに　怒りを露わにしたが
ミクがゆっくりと
「こんなこと・・・・・　仲間を危険にさらすことは許さないわ！
二度としないで！」
と　言った

ツフュールは　それを聞くと
「仲間と思っている者には　危害を加えないよ」と挑戦的な発言を

残した

うまく3人は使われて　しかもその策略でツフュールの言った通りになる

当分　悪魔は寄り付かなくなった

やり方は問題あるが　犠牲もなく　平和な日々が続くのだ

本当のリーダーはツフュールであると　否応なしに感じてしまう

悔しそうに口を閉じていたが　それ以上　話すことはなくなった

モパは

「新参者の私があのうちに来たから　悪魔になめられたのか？

それで　意図的に　あなたが悪魔を操ったと解釈していいのかな？」

口調は穏やかだが　静かな分　怒りが伝わってきた

「その通りだ」

短く返答した　ツフュールは　何事もなかったかのように椅子に腰掛け

「他には　何を聞きたい？」と　聞いた

何もかも見透かしているような　ツフュールの目つきだった

警戒すべき相手

「わたしは・・・・・あなたたちにとって　敵か？」
モパのこの言葉に　ミクセンバティも黙って　２人を見つめていた

ツフュールはまるで面白そうに身を乗り出して　ゆっくり口を開いた
「今は　まだ敵ではない・・・・
しかし　知っての通り　この場所は君が住まいとしている場所のエネルギーを求めて
集まって出来た群れがいる

拠点に　居続けるのなら　敵となるか　味方になるか・・・・・決めるのは君だが？」

ツフュールから目をそらさず
「前にも言ったが　ここに居続ける気はない
君たちを敵に回すつもりもない」
きっぱりと言ったモパに

さらに　ミクは
「モパからは　邪悪な気配は感じない
敵となるなら　最初から歓迎なんかしないわ・・・・・
今の状態で　モパが拠点に住むことで　エネルギーの大きな拡散はないでしょう？」
ツフュールに向かって　強く言った

「確かに　悪魔達が消されたりする率を考えれば　拡散は問題ない」
と　頷いた

「もし・・・・」
ミクがちょっと考えながら　目を伏せ
「もし　この場所に居続ける気なら　モパがリーダーになるべきね」
と　言った
センバティは　驚いて　隣のミクを振り返っていたが　かける言葉を失っていた
ツフュールは　無言でチラリと　ミクを見たが　何も発言はしなかった
強い力の持ち主がリーダーになるのは　当然のことだ
今までも　そうやってきたのだが　問題は「力」だけでは決められないことなので
今は誰にも　判断がつかなかった
モパも　ミクの言葉に驚き　すぐに
「そういうつもりは　ない」
と　言った
ミクは　分かったというように　少しほほ笑んだ
その様子をじっとみていたツフュールだったが
「他には？」
と　モパに尋ねた
「え？」

「聞きたいことは　それだけか？」

「いや・・・・・　今のこととは関係ない話なんだが・・・・・」

ツフュールは話を続けるよう　ソファに座り直し　手を組んで　言葉を待った

「公園に昔　ログハウスがあったらしいが　取り壊されたと聞いたいつ頃のことなのか　それと　取り壊された理由を知っているか？」

意外な話しだったのか　一瞬　目を大きく見開いたが

「古い話だが　確か7～8年前のことだ

確か　小学生くらいの子供が　よくそのログハウスに集まっていた

死角ともなる場所だったんだが　そこでいじめがあったらしい

そして　いじめられた子が　そこに火をつけたというのが理由だった

火をつけた時は　子供数人がログハウスにいたようだ

みんな軽い火傷程度で済んだらしいが　火をつけた子は　町から出て行った

知ってるのは　これくらいだ？　　いいいかな？」

聞いていて　なんとも後味の悪い話だった

取り壊された理由は初めて聞く話だったらしく　よく集まるあの公園で　そんなことがあったのかと

センバティとミクも途中は　眉をひそめて聞いていた

「あぁ　ありがとう
なぜか　あのログハウスのことが気にかかるんだ　それに私は引き寄せられたのかもしれない」
みんなに向かって説明した

特に　それ以上聞くことがなくなったので　モパは　礼を言うと
チラリとミクを見た

ミクは　その視線を見て　引き上げることにした

ツフュールは　モパに向かって

「それから　もうひとつ・・・」
と　人差し指を立てた

帰ろうとしていた3人は一斉に振り向き
「そのログハウスでは　私達と同じような妖精の類が　放火した子供と
一緒だったらしい
その一件以来　どうなったのかは分からないが　姿を現さなくなったようだ
・・・・聞きたかったのは　そのことだったかな」
と　鋭い眼光で　モパを見た

それを聞いて　モパは目を見開いて　しばらく固まっていたが
それは一瞬のことで　すぐ平静を取り戻して
「あぁ　わたしがずっと探している人かもしれない・・・・」と言った

それから　モパは引き上げる途中も　ミクとセンバティの話は耳に入ってこなかった

ミクは　モパの言葉を　思い出し　とても大事な人のことだろうと想像はついたが
モパから話があるまで　そのことには触れないでおこうと思った

そして　帰り際にこっそりと　ツフュールが言った言葉も　気にかかっていた

「彼とわたしは　似ている・・・気をつけなさい」

どういった意味か分からなかったが

モパのことを　より　リーダーとしても特別視するようになった

忘れられない人

ここしばらく　本当に平和だ
幸せな家族と　毎日同じようなことが繰り返され
この幸せを　壊すものもいない
モパは　ベランダから　春が　雨上がりにできた水たまりを　大きめの黄色い長靴で
バシャバシャ遊んでるのを見ながら　物思いにふけっていた
先日重大な手掛かりを得たハズなのに　それを聞いたあとは　いつも何か考えてるような
考えていなような　とにかく　ぼーっとしている時間が増えた
彼女が姿を消して　１０年が経っていた
妖精の寿命は　まちまちで　「力」による
最短５年から長いものでは２００年とも言われているが
バロメーター的なものがはっきりしていないので　自分の死期は直前まで分からない
この１０年　彼女が無事かどうかもわからなかった
そして　自分の運命も

でも　どうやら　彼女も生存している可能性が　強かった

白い肌に　栗色の柔らかい髪と　可愛いらしい笑顔が鮮明に浮かんだ

いわゆる正統派美人系のミクとは違う　花の様な愛らしい美しさだった

華奢な体も　折れてしまいそうな　守ってあげたくなるような　そういうタイプだった

呆けた状態のモパを見て　ユイがちょっと　心配そうに

「どうしたの？　悩み事？」と　聞いてくる

「あ・・・いや　大したことじゃないよ」

と　笑って見せたが　やはり元気は出なかった

ツフュールの話を聞いた限りでは　居なくなったのは7～8年前

それから　見なくなったというのは　自分の意思か

それとも・・・・・・・・・

今度は　真剣な表情になって　顎に手を当て考えていると

はしゃいでいる春が　水てっぽうを　モパに発射させた

何が起きたか　分からなかったが　バッチリズブ濡れだ

春は　ぎゃはっは！！と大笑いをして　歌を歌い　ご機嫌だ

それで　ちょっと　すっきり目が覚めたような気もちがした

どんどん　頭の靄が晴れていくようだ

生きている可能性は高い！　　エネルギーを　さらに蓄えれば　彼女を見つけられるかもしれない

でも　どこに・・・・・・？

また　もやっとしたところで　以前春が言った言葉が浮かんだ

「トラワレル２人　カエル道ヲ　ミツケラレナイ・・・・・・・・・・」

無意識に　つぶやいていると

それを聞いた春が　また　妖精の言葉を喋り出した

「カゴノ鳥　空ヲ眺メル　同ジ景色　イツモ同ジ」

歌うようにそう言うと　また　水たまりへ　突進していった

モパは　思わず　滑り落ちそうになった

捕らわれる・・・・カゴの鳥・・・・・・誰かに捕まって動けないのか・・・・・・？

春は　その事を　言っていたのか？

改めて聞いても　もう　春は　首をかしげるだけで　答えてはくれ

なかった

噂の彼女

ここ2週間くらい　モパやミクとあれっきり　連絡をとっていない
モパのことがなんだか気になる　センバティは　意を決して
また　小高い丘の上の　ツフュールのアジトへやってきた

ミクは　それ以上何も聞こうとしなかったが　中途半端に情報を得て
センバティは　モヤモヤしていたのだ

「モパの大事な人」　　どんな人なんだろう？

半分以上は　興味本位なので　そんな理由で　このことを聞いても
いいものか
ツフュールも答えてくれるのかどうかと
また　悩んで　入り口でウロウロしていた

あいにく　ツフュールは不在だったようで　仕方なく　帰ろうとし
た時

「あら？　こんなところで珍しいわね」
と　古株の仲間に会った

リュウと飛ばれていた　この妖精は　中年くらいの風貌で
髪を　きっちり　まとめてあげているのが特徴的な　世話好きなお
ばさんだった

体も丸みを帯びている小太りだった　赤い紅玉色のピアスをプラプラさせて
センバティを手招きしている
「どう？　ミクとは　進展あったかい？」
からかうように　小声でそう言われて　センバティは耳まで真っ赤になった
「な・・・・・！　ないよ！」
と慌てるセンバティを横目に
「そうだろうねぇ」
と　楽しそうに笑っている
うわさ好きでもあるので　ちょっとやっかいな人だが悪意はないので
みんなから慕われている
センバティもよく　ミクのことでからかわれているのだ
何度言っても　センバティのこの新鮮な反応はリュウには　いい暇つぶしだ
「なんで　いつまで　ぼーっと待ってるんだろうね　この子は・・・・
私達には　結婚とかないんだし　好きなら好き！　嫌いなら嫌いで
　相手にぽーんと
いっちゃえばいいのに」
と　言うので
「そんな単純なものじゃないんだ　」
と　リュウに　この思いを詳しく説明しようと思ったが

相手が違うし　なんだか馬鹿にされそうなので　言えなかった

「そう？　　じゃあ　ライバルに先手越されちゃった？」

「ライバルって　　誰！！？？」

目を見開いて　小柄なリュウに詰め寄っていた

「落ち着きなさいよ！　冗談よ・・・・・・・・

でもさぁ　ミクは　モパのこと　かなりお気に入りみたいじゃない

ピンチじゃないの～　お隣同士だし　いつでもあえるしさぁ」

うわさ好きだけあって　観察力はすごかった

ミクがセンバティを相手にしていないことも分かっていたが

リュウはセンバティがかわいいので　たまに役にたつ情報をこっそり教えてくれたりしてたのだ

「モパは　そんな気がないみたいだよ

なんていうか　現代風のギャルが好きみたいだから」

一瞬ミクとモパがくっついてしまうことを想像をして

さえぎるように　そう言い切った

現代風ギャルとは　以前の同居人の女子高生のことだが　冗談でモパが言った言葉を鵜呑みにして

いるようだ

「へぇ　　意外・・・・・」

リュウも　それを聞いて驚いていたが　本気にはしていないようだった

「！」

突然　云いひらめきが浮かんだ

「リュウ　昔　公園にあったログハウスの事件知ってる？

そのときの　子供についてた妖精の女って　どんな風??」
突然そう言われて
古い記憶を辿るように　ゆっくりと思い浮かべていたが　ぽんと手を打つと
「あぁ　　知ってるよ
可愛いらしい永遠の女の子って感じで　ふわふわしたドレスが似合うきれいな子だったねぇ」

「えぇ!?　現代風じゃなくて?きれい系か?」

「うーん　きれいな子だよ　色が白くて　ピンクの血色よさそうな顔で
お菓子みたいな可愛らしさ
あんたには　あんな子がいいんじゃない?」
無責任にそういうリュウだった

「けどさぁ・・・・・たしか　あの時代って　悪魔が拠点を張ってた時で
あの子も　妖精ではなかったよ・・・・・
確かに　敵ではなかったねぇ　　私達にはどうでもいい　よそ者だったから気にしなかったけど」
と　おでこにしわを寄せてそう言うと
「え?　妖精じゃないのか?・・・・・悪魔ってこと?」

リュウは首を横に振り
「ほら　いわゆる悪魔と妖精のハーフってやつよ　「半端者」って言われて
どこにも属さない奴らさ」
と言った

「でも　良いとこどりって感じで　美しく力の強い物がよくいるんだよねぇ
あの子もそんな感じだね・・・・・」
小さく頷きながらリュウはそう言った

「・・・・・・・・・・・・・」
センバティは黙って　先日のツフュールの言葉を思い返していた
確かに　「妖精の類」と言っていた
妖精ではないのだ　モパの大事な人は・・・・・・・・・・・・
もしかして　モパも・・・・・・・・・・・・？

じゃあね～と　リュウは手を振りながらとっくに立ち去っていたが
センバティは真剣な表情で　その場で立ち尽くしてしまった

秘密を共有

この情報は　やはりミクに伝えるべきだろうなぁ
シリアスな表情でそう思ったのは一瞬で　ミクのことを思い出すと
　自然と笑いがこぼれる
センバティだった

なかなか　リーダーで忙しい彼女に接近するチャンスがないので
これはチャンスだ！と　人知れずガッツポーズをとる

けれど・・・・・・・・　モパはどうなるんだろう？

自分たちとは違う種族で　もしかしたら　その情報を伝えることに
よって
敵となるかもしれない

「悪い奴じゃないしな」
モパを敵に回したくない　センバティは　また　悩んでしまった
短い期間だけど　モパと一緒にいて　心地よいのだ
そういう相手には　そうそう出会えない

男らしい外見とは　反対に　心優しい一本気な所があるので　友情
は売れない！と
立ち上がって　自分の胸に秘めようと決めたとき

聞き覚えのある声で　声をかけられた

「こんなところで　何してるの？」
振り向くと　タイミング良いのか悪いのか　愛しのミクだった

濃い紺色の服が　きめの細かい肌を引き立たせて　いつもよりさらに美しい

思わず見惚れてしまうところだったが
「わたしに何か用か？」
と　言う声に　視線を右にずらすと　モパもいた

二人一緒だったことに　驚くセンバティは　急に焦り出した

用事があるといえばそうだが　まだ心の準備が出来ていない
当然のように一緒にいる二人を見て　少なからずショックを受けた

「モパとの友情　やめたくなったよ」
と　小声でつぶやくと

ミクと一緒のに居たことにやきもちを焼いたと察したモパは　笑いながら
「ミクに会いに来たんだな？」と　ミクに聞こえるよう大きな声で言うと
センバティの肩に手を置いた

「わたしに？」
ミクは　センバティに目線を移すと　用件を聞いてきた

「い・・・・いや　そうなんだけど・・・・・それより
2人は　どうして一緒なんだ？どこかへ出かけていたのか？」
先に　気になっていたことを聞いた

ミクとモパは目を合わせると　軽くほほ笑み
モパが

「この前ツフュールが言ってた　居なくなった彼女のことについて聞いてたんだ」
と言った

ミクは
「わたしも　直接面識はないけど　見かけたことはあるのよ
でも　役に立てる情報はないんだけどね」
と　申し訳なさそうに言った

「あぁ・・・可憐な彼女のことか・・・・・」
リュウが言ってた内容を　思わず繰り返すと

「知ってるの！？」
と　ミクが驚いていそして　また3人でミクのアジトへ移り　話を再開した

センバティは　2人に　リュウが言ってたことを伝えた
モパは真剣な表情で聞いていたが　一言も発さなかった

彼女が純粋な妖精ではないということは伏せていた

ミクは　センバティは話し終えると　ゆっくりと喋り出した

「あの頃って　悪魔が拠点をはってたのよね　　わたしはまだ
力が弱くて　拠点に入れないくらいだったけど
彼女は私達の味方じゃなかったわ・・・・・・でも拠点に近い場所
に居れた・・・それって・・・・・」
きれいな眉をしかめてそう言うと

センバティはドキっとした
長くこの土地にいるだけあって　さすがにミクは彼女のことについて知っていた
何も言わずに　モパを見ると　モパは軽く笑って
「あぁ　彼女は妖精と悪魔のハーフだ　　わたしもそうなんだ」
と　あっさり告白した

ミクは信じられないという表情でモパを見ている
センバティは　あまりに簡単に正体をバラしたことに驚いていた
違う意味で固まっていると言葉を失ってしまった

ミクはチラリとセンバティのその様子を見て
「センバティは知ってたのね」
と　それにも気づかれてしまった

「・・・・・リュウから彼女のことを聞いて　モパも　もしかしたらって思っていたんだ」
正直にそう言うと

モパもセンバティも怒られた子供のように　首をすくめてミクを見た

ミクは　ため息をつきながら
「わたし　リーダーなのに何も知らなくて　残念だわ・・・・・・・・・・・・・・・・・わたしの能力ってね　敵か味方かを瞬時に判断出来ることだと
思ってるの　　モパは敵じゃないわ
それは　以前からそう感じている」
フッと笑いながらそう言った

「そういう種族と直接話すのは初めてで　びっくりしたけどね
あぁ・・・・・・でも　初めてじゃないわね　彼もだわきっと・・・・
モパと同じ波長を感じるもの」
少し　悲しそうにため息をついた

「彼って？」
ミクの次の言葉を2人は待った

「・・・・・・口外しないでね・・・・・・・ツフュールのことよ」
少し険しい表情で　答えた

これには　かなりの驚をうけた

ハーフと言われる種族が　ついこの間まで　妖精のリーダーで悪魔と戦っていたのだ

「それ　本当か！？」
思わす身をのりだしたセンバティは　信じられないという表情で驚いていた

「彼の力は強くて　わたしたちとは異質だわ
悪魔と接触があるのも　そういうのを感じとって悪魔が寄ってきてたのかもしれない」
と　ミクは答えた

続けて
「わたしたちが警戒すべき相手は　モパじゃなくて　彼よ

早く　力をつけないと　この土地が崩壊するかもしれない」
若きリーダーであるミクは　自分に言い聞かせるようにそう言った

居候

「ツフュールは　悪魔側だってこと？
長い間　おれたちのリーダーだったんだぜ？」
センバティは信じられないという顔でつぶやいた

「確かに　近寄りがたくて何考えてるか分かんないけど
仲間を売るような真似・・・・・・・・・・するかもしれないな」
先日　悪魔を差し向けたことを考えれば　彼ならやりかねない
話の途中でセンバティも考え込んだ

「政権交代の時期ってやつかもね
彼が　リーダーを降りた時から　そういう時が来るんじゃないかって思ってたのよ」
師であった　ツフュールに近い位置にいたミクは　悲しそうに言った

「昔は　圧倒的な強さと指導力に尊敬していたけど
彼を知っていくうちに　なんだか怖い存在なんじゃないかって思うようになったの

きっと　古株の仲間は　ツフュールの正体を知ってて黙認してるのよ
あの人達が気付かないはずないわ・・・・・若しくは口出しすらできな状況かもね　」

そう言うとミクは白いソファに　ゆっくり座った

寡黙で　鋭い眼差しのツフュールの姿を思い浮かべ

確かに妖精というより　悪魔と言ったほうがぴったりくる風貌だった
モパは
「彼が何を望んでいるかは分からないけど　ミクには危害を加えないような気がするな」
と　ポツリと言った

意外そうな表情のミクに続けて伝えた
「彼は　君に弟子以上の思いを抱いているように感じる」
との言葉に　ミクより　センバティのリアクションが大きかった

「ええぇぇぇーーーーー！！！」

ミクはその声に驚いて言葉を失っていた

「それは　モパの能力なの？　それとも勘？」

「うーん　勘かな？　でも　結構当たるから　信用していいよ」
と　ニコっと笑った

「それはちょっと考え付かなかったわね　きっと最後の弟子として
　大事にはされてるとは
思ってたけど」
と言うとミクは黙って　顎に手を置いて考えているようだった

いきなりのライバル出現に驚いたセンバティだが
「古株達は　拠点を奪われても良いという考えなんだろうか？
いざって言うときは　戦いはもうしないと思う？」
と　落ち着きを取り戻し2人に聞いた

「自分の命をかけてまで・・・・・ってのは　難しいかもね
団結は弱そうね　まず　自分より格下の妖精についてこないわよね・
・・・・・

まぁ　でも　ツフュールが本気で半旗を翻すかどうかも　まだ分か
らいなし
単なる取り越し苦労だといいんだけど・・・・・・・・
とにかく　今　わたしたちにできる事は　出来るだけ力を蓄えること
とね

もし　彼が敵となったら　センバティ、モパ、わたしに協力してく
れる？」

「もちろん！」
勢いよくセンバティは返事し
「協力するよ」
とモパも同意した

モパは
「けれど　私たちみたいな小規模の種族は　なかなか仲間に巡り合
えない・・・・
ツフュールは長い間この土地で過ごして　しかもリーダーとして君
臨していたんだ
わざわざその地位をひっくり返すとは考えにくいな
もし彼が本気なら　とっくに悪魔と手をくんでいるんじゃないか？
彼にとっても　この土地と仲間は貴重なんだと思うんだが・・・・・
・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・」

モパの考えに　ミクもセンバティも　考え込んでしまった
確かに　迂闊な行動を起こす相手ではない
純粋に　リーダーの座を補佐する立場になって　信頼できるミクを
リーダーに立てたのも
彼がこの地を守ろうとしているからなのかもしれない

「きっと本人と話し合わないと分からない問題だな・・・
とにかく　パワーを蓄えるという提案は大賛成だ　そうだな　手っ
取り早く
センバティは拠点近くに引越したらどうかな？」
と　モパのいきなりの提案に　ミクも頷く

「えぇ！？」

「センバティは、まだまだ力を蓄える余力あるだろうしね」

「どこがいいかな？　我が家は近すぎてダメかなぁ
・・・・・・・・・ミクの所で同居とかは？」
モパの発言に　ミクは
「さすがにそれはどうかしら・・・・？」
と笑いながら言った

「同居」の言葉に　真っ赤になって固まってるセンバティは声すら
出せない状況だった

「まぁ　部屋は十分にあるから　私は構わないけど・・・・・・」
と　センバティをチラッと見ると

ぎこちなく首をかしげている　完璧思考停止だ・・・・・・・・・・
・

「ちょっと　無理かもね」
その様子に　笑いながらミクはモパに言った

「じゃあ、　強化合宿ということでまず1週間　我が家にきたらどうかな？」
との提案に　先ほどのショックからまだ立ち直れないセンバティは
　自然とうなづいていた

「すごいわ　センバティ！」
ミクも　その勇気をたたえた

正気になってこの提案を否定した時には　もう　時遅しで

明日から　センバティの　モパ宅での強化合宿が始まるのだった

我が家へようこそ

「せんてぃ！せんてぃ！」
夕飯時　春は全速力で家の中を駆け回っている
「春！　いい加減にしろーしつこいぞ！！」
センバティがその前を　全速力で逃げている
「モパ！笑ってないで　とめろよ！　これじゃエネルギー使い果たしちゃうだろ～」
モパと一緒に居候することになって3日目
すっかり　春に気に入られたセンバティは　ここ毎日　春と楽しく過ごしている
「いや～　モパとセンティのおかげで　春もご機嫌だよ、ね　ママ」
「昼間も　ずっと春と遊んでくれて　助かるわ～」
ユイと旦那さんは　ビール片手に　また酔っぱらっていた
「ちょっと　誰か春を止める奴いないのかよー！！？
今日は　俺の歓迎会なんだろう？」
センバティが必死で抗議しているが　ほろ酔いの親たちは　ほほ笑みながら頷くだけで
モパも　笑って眺めてるだけだった

・・・・・・・くそ　・・・・・・だめだ　この家族はなんておめでたい　酔っ払い家族だ・・・・

観念したセンバティは　ガッチリ春に抱きしめられて　頬ずりされている

「モパもセンティも　イケメンそろいだな～　妖精ってみんなそうなのかぁ？
うらやましいな～」
旦那の褒め殺し発言も　炸裂している

「ママは　この二人から　告白されたらどうする？」
「えぇ！？　なに言ってるのよーパパったらー」

・・・・・・本当何言ってるんだか　こいつら・・・・・・・

センバティは頭を抱えて苦悩している

酔っ払い達が寝静まった頃　モパのテリトリーで　ようやく　解放され2人になった

「春に殺される危険はないけど　ある意味これが毎日続いたら　拷問だな」
深いため息をつくと
「そういうなよ　センティ！　みんな歓迎してるんだから」
「そのセンティってやめろよな！」

笑いをこらえてるモパに
「この家族は　大人まで妖精と接触出来るし　いやにおめでたいし

能天気で
・・・・・・・正直　驚くことばかりだよ・・・・
でも　こんな調子なのに　パワーはついてる気がするから不思議だな」
自分の大きな両手をかざしながら　センバティは言った
「私も　同感だよ　　パワーについても　見てる限り　格段にレベルアップしてると
思うよ」
寝転びながら　答えた
男同士の同居は　気の合う2人には　にぎやかで　心地よいものだった
春の家族も穏やかで　あっという間に　センバティも馴染んでしまった
「あのさぁ・・・聞いても良いか？」
センバティは　気になっていたことを尋ねることにした
こんなときじゃないと　なかなか聞けないことだと思っていた
断る素振りもないので　話を続ける
「居なくなった彼女・・・・どうしていなくなったか理由は分からないのか？
ずっと　探してるんだろう？手掛かりもないのか？」
仰向けになってる　モパを横目で見ながら尋ねる
大きな瞳を　伏せると
「理由は分からない　手がかりもようやくこの間得た情報くらいだ・・・・」

「もう１０年も経つんだよな・・・・」

「あぁ」

「・・・・・・彼女のこと　愛してるんだな？」

その質問が　聞こえなかったのか　しばらく沈黙が続いた
気になって　モパを　じっと見てると

「今でも大事な人だが　愛しているかは　わからないかな？」
ようやく　言った言葉に

「なんで！？　　だって　２人は・・・・・・・」
言いかけて　センバティはやめた

居なくなった彼女のことで　一番真剣に考えているのはモパだ
長い年月で　気持ちの変化があっても不思議じゃない

「俺には　分からないことだな・・・・・・」

やみくもに　自分の思いを言い放つだけではない　センバティの優しさが
モパには　ありがたかった

自分でも　彼女に会うまでどういう感情がのこっているか　わからないのだ
でも　誰かに捕らわれているなら　全力で助けるつもりだ
そのために　モパも　できるだけパワーをためこむことにしたのだ

「明日は　クリスマスツリーの飾り付けだな・・・・・
きっと　ツリーの上の部分は　俺たちの仕事になるぜ・・・・・」
センバティの　言葉に　モパは軽くほほ笑みながら　頷いた

明日も　賑やかな日になりそうだなと思いながら　2人も　いつの
まにか眠りについていた

あの人は　今

「で、　結局あれからずっとモパの所にいるのね。
ずいぶんパワーは蓄えたんじゃない？　なんだか逞しくなったように思うわ。」
長い髪を揺らして　お隣の垣根でミクとおしゃべりを楽しいんでいた
相変わらず　美しい愛しのミクを横目に
やっぱり　近くにいるっていいなぁと　しみじみ幸せを感じるセンバティだった

「まだ　パワー補給に余裕もあるし　住み心地もいいから
もうすこしだけ　ここに居ようと思う」
家を振り返って　そう言う

「ふーん　楽しそうねセンバティ。」
穏やかな表情を見ていたら　春のことで心配していたことも　もう何の障害もないことに
気付く

「あ！　今から　買い物に付き合うんだ・・・・
じゃあ、ミク　またあとで！」
バタバタと玄関へ向かう　家族の姿を見て　慌ててセンバティも後を追う

モパは　ゆっくり家族と一緒に歩きだしていた
後から追い付いた　センバティに気付くと

「ゆっくり　話ししていてもよかったのに」
と　言った

「あぁ、でも　また会えるチャンス多いから　いいんだ」
と　ニコッと笑いながら　満足そうに答えた

今日は　新年の買い出し・・・・・・・・・　もとい　ユイの目当ての福袋を買いに出かける

旦那さんは　おもに　春のお守だが　なんとなく心配なので2人もついていくことにした

おっとりしているユイが　福袋に群がる集団に交じって　戦利品を抱えてるのを見て
かなりの衝撃を受けたものの　母親の力なんだろうな・・・・・と思わずにはいられなかった

春の　洋服の福袋を2つも買って　ユイはご機嫌だ

昼食をとって　ちょっと一階で一休みしていると　アイスクリーム屋が目に入った

暖房が強めの館内は　結構アイスを買いに並んでる人が多い

ユイ達も　早速アイスを買いに並んでいる

ちょっと離れてその様子を見ながら　モパ達だったが

すごい手招きで　ユイがこちらを呼んでるのが見えた

なんだろう？　そう思いながら　2人は　近づくと　ゆかりがアイス屋の店員になって働いていたのだ
エクステはすっきりと束ねてあるが　相変わらず化粧は濃かった
長い爪で　ぎこちなく注文を受けて　アイスを手渡している

小声で　ユイが「あの子よね？　やっぱり間違いないよね・・・・・・
ここで働いてるってことは・・・・・・・・」
ちょっと　悲しそうな表情でそう言うと

「試験ダメだったのか」
モパも　ちょっと残念そうに言った

「あ！　モパのモトカノか？　試験ってなんだ？」
状況が分かってないセンバティは　まだ勘違いしたままだった
不思議そうに　ユイ達と　ゆかりを見比べている

順番待ちしていると　前に並んでいるゆかりと同じような世代の女の子3人が
手を振りながら　一斉に　ゆかりに話しかけた

どうやら　クラスメートらしい

「似合ってるよ～　もう慣れた？」
「私も　追試なかったら　一緒にアルバイトしたかったなー」
「ゆかりは　いいなぁ　アイスおまけしてよー」

ゆかりは　営業スマイルで
「私に　そんな権限ないのよー　まだ　慣れてないしね！
さ！　注文してね　他にも待ってる人いるから」

「数学の新任泣いてたよー　ゆかりが模試突破して
しかも　赤点なし！　　頑張って勉強付き合ってくれた甲斐があったよね！」

「カンニングも疑われたけど　ゆかり　私たちの中で断トツ1位だったもんね」

彼女たちのおしゃべりは止まらない

後ろに並んでいるおばさんが　迷惑そうな顔をしてるのに　ようやく気付くと
また　手を降りながら　アイスを買って　去って行った

この会話を聞いた限りでは　ゆかりは　模試に通ったようだ

高校を辞めなくてはいけないと泣いていた時とは打って変わって
明るく　とても楽しそうだった

ユイと　旦那さんとモパは顔を合わせて　こっそり　ほほ笑んでいた

他人事だったが　気になっていた相手が　無事　上手く事を成して
ほっとした

幸先良い　新年が始まったように思えた

かごの鳥

田舎の　山に近い　あまり人が寄り付かないような所
辺りを見渡しても　山と田畑しか見えない　そこに大きな病院がある
窓は　人の腕がようやく入るくらいの開閉しか出来なくて　終始出入りのドアは閉鎖されている
今日も　いつもの日常がやってくる
早朝から多量の薬を内服し　拒むと　職員に飲むまで監視され続け
味気ない朝食をとって　それから　どうでもいい　検温のあと
プログラムされてる診察・音楽・運動療法をやるだけの日々
薬づけの毎日
これに従わないと　一歩たりとも外には出られず　自由はない
頭がおかしいと言われてる人々と　くだらない時間・口喧嘩・職員のやる気のない声かけが
死ぬまで続く
周りの患者は　若いころから入院してる人が多くて　もう３０年以上住みついてる人もいる
私は　まだ４年ほどだが　この日常にすっかり毒されている

まだ若い患者の私には　多少の遠慮も見えるが　ここの職員は　すっかり治療というより
「監視」という業務が　板についてるようだ

心の治療ではなく　ただ　外部から遠のきたい私には　薬を飲んで
　指示にできるだけしたがえば
家族から拒絶されている身なので
ここの暮らしは　さほど苦痛ではない

２０歳くらいから　発症するケースがおおい　統合失調症

私の場合も　若く今から楽しい未来があふれてるだろうこの時期
この病気の診断がついた

症状は妄想・幻聴・強迫観念・自殺未遂　そんなところだろ

入退院を繰り返し　家族からは見放され　この病院も常連のように
なってしまった

でも　私には　心の救いがあるのだ

決して　妄想でも幻聴でもないと確信している

動きやすい白のジーンズと　紺色のパーカーを着た細い女の腕には
古い　火傷の傷がときどき見え隠れしている

化粧っけもなく　白い素肌に　傷が痛々しく見える

立ち上がり　ベットの柵の隅に腰掛けている　小さな　小人に話し

かける

「リラ　何が見えるの？」
優しく声をかけるが　小人は　悲しそうな顔で外を眺めたまま答えてはくれない

この場所に似つかわしくない　華やかな顔立ちの　可愛いらしい女の小人だった

「どこにも行けないよ　あなたも・・・・わたしも・・・・」
冷たく笑いながら　女は今日も　他のもには見えない物に向かってだけ　話し続ける

ともしび

パタパタとうるさい足音が近づきてきた

同室者のおせっかいなあいつがやってきたのが　わかると　私はリラに話しかけるのをやめた

「中庭に出れるって！！」
嬉しそうな顔でいきなり　この発言だ

４０代の　いかめしい顔立ちのおばさんは　痩せているが筋肉質
薬のせいでふらついているが
いざというときは　すごい力で抵抗するのだ

よく　職員に押さえつけられてるのを見る

精神症状が落ち着いてる少人数のグループで　決まった時間に　病棟から出ることができる

そのことを伝えに来たらしい

私は　外に出るのは気が進まないが　リラが日に日に弱っていくのを感じる

生気がないというか・・・・・中庭には　たくさんの花が植えられていてそこにいくと
リラが喜んでるように見えるのだ

そのために　私は　行きたくもない中庭へ　何人かで出かけることにした

「リラ　中庭に行けるって」
そっと声かけすると　ゆっくりとこちらを向き　頷いた

やはり　行きたかったのだなと　思う

出会ったころは　童話から抜け出したかのような可憐で華やかな風貌だった
美しい顔立ちは変わらないが　今は病人のように反応も薄く　生気が感じられない

補給するエネルギーに質の悪さからなんだろうか？

出かける準備をしていると　廊下から　職員が　出かけるメンバーを誘いに呼んでるのが聞こえた

一緒に準備してきたおせっかいなおばさんは　それを聞いて　手を止めた
「わたし・・・・・呼ばれなかった・・・・」
出かける気満々だったが　本日は　おばさんはメンバーじゃなかったみたいだ

急に不機嫌になって　布団を頭からかぶって　ふてくされてしまった

「あ！いたいた　中庭にいくよ～　　川野さんは　今から昼寝？
ちゃんと起きててよ！」
私と　おばさんを見比べて　そう言うと　川野さんはムスっとして

「そんな　お人形さんとベタベタしてる人が行けるんだね！」
と　私を睨んでそう言った

リラの姿は　ここの病院では　チラホラ見える人がいる
このおばさんも　見えていたんだと　ちょっと驚いた

職員は　おばさんを軽くあしらい　私を手招きした
「次は　川野さんもいけるようにするからね」

この一言で　ご機嫌を取り戻した　現金な川野さんは　しっかりメモをとっていた
「いってらしゃ～い～　姫～」
ヘラヘラと笑いながら　手を振っている

これは　私のことではなく　リラのことだ

美しいリラの姿に心惹かれて　虜になっている者が　何人もいるのだ
彼女は崇拝者に「姫」と呼ばれている
おばさんは　そう呼ばれてるのを知ってて　からかい半分で声をかけるが
もちろんリラも私も　相手にしない

実は　その崇拝者たちが　彼女をとどまらせるために　協力して
この病院に縛り付けている

エネルギーを奪い　力が弱くなった彼女は　もう脱出する気力もないだろう

わたしにも　その方が都合がよいのだ

しかし　死んでしまっては元も子もないので　崇拝者たちが　必死で作った中庭の花達は
そういう思惑とは関係なしに　美しい花々で溢れている

ちょっとした花園になっているのだ

エネルギーをそこから補給する姫を見るために　今日も数十人の崇拝者が遠巻きに待っている

硬い表情で　心を失ってしまったリラの整った横顔を見ながら
これで　本当にいいのかと　思う時もある

だけど　私には　もう彼女しかいない　　決して　あなたを手放したくない

若い女の　恐ろしい独占欲は　こうしてリラを１０年もの間雁字搦めにしているのだ

つなぎとめるもの（前書き）

短編小説なのに　こんなに続けていいものでしょうか？
そろそろ　終わりに向けて話を考えなくては・・・・

つなぎとめるもの

患者5人　職員2人で　病棟から一階の温室中庭へやってきた
年寄り患者ばかりで　心から楽しそうに　このちょっとした外出を喜んでるようだ
廊下ですれ違う職員や　顔見知りの患者に　過剰なほど元気に声をかけている
私は　一番後ろを職員と一緒にゆっくり歩いている
リラは黙って　私の肩に座っているが　表情はなくまっすぐ前を見ている
中庭に近づくにつれ　小さな人々がリラを一目見ようと　ずらりと集まっている
人数は３０～４０人ほどだろうか
一つの建物にこれだけの不思議な人々が住んでいるのは異例だ
この人々が　リラを崇めそして閉じ込めているのだ
老若男女　妖精も悪魔も混じっているが　みんなけん制し合っている
中庭には　季節と関係なしに　いろんな花々が咲き乱れていた
小さな池もあり　そこには金魚も泳いでいる
ちょっとした花園・・・・・・・・　天国みたいな空間・・・・・・

・・・

そこに似つかわしくない　元気な年寄りとわたし達

はしゃいでる人をよそ目に　私とリラは静かに　ベンチに腰掛ける

リラは大勢が見守る中　花園に降り立ち　その姿は　まさに　「妖精」だった

美しく　見ていても飽きることのない容姿

流れるような長い髪の毛の一本一本まで　神経を集中させ

ゆっくり長いまつげを伏せて　花々からエネルギーを蓄える

神秘的なその姿に　ギャラリーは感嘆の声をあげ　見守ってる

遠くでは　花を世話している小人が　大はしゃぎでその様子を仲間に自慢している

中庭にいれる時間はせいぜい２０分

この時間が　彼女の命をつなぎとめてる

患者が　中庭で過ごすのに飽きてきたころ　リラにゆっくり近づく者がいた

悪魔と妖精のハーフで　この集団を取り仕切ってる男だ

口がうまくて　顔も良いのだが　女好きだ

手当たりしだい気に行った女は　自分のものにしている

独占欲が強いが　口がうまいのでいろんな交流を持っている

中身は軽薄で小さい男だ

リラを自分のもにしたいのだが　一向に　なびく気配はなかった

それどころか　口もきいてもらえない状況だったが　今日もめげずに話しかけてくる

「やあ、　ちょっとは元気になったかな？」

短めの髪を立ち上げ　スマートで背の高い彼は　屈託のない笑顔で近づいてきた

目も大きく整った顔立ちの彼の登場に　女性ファンの黄色い歓声があがる

エネルギーを補給し終えたリラは　声の聞こえた方向に視線を移すが　返事はしなかった

美しい顔にも変化は見れず　また　他のところに視線を落とした

その様子に見惚れていたが　彼は　返答が来るよう必死で話し続けていた

リラが振り向いてくれるまで　お世辞を行ったり　脅したり　とにかく彼の出来る

ありとあらゆる手法で　ずっと喋り続けている

「不便だろうが　ここに来れば　質の良いエネルギーが得られるよ

君さえよければ　結界を解いてくれれば　ここに頻繁に連れ出すことも出来るのに・・・」

その発言に外野が参戦する

「ノベルト！　その花はお前が育ててるんじゃないぞ」

小さな　子供の様な老人の様な花を世話しているテリーがそう言うと
「分かってるよ」
と　適当に愛想笑いを彼に向けていた
リラは　長いまつげを伏せて背を向けてしまった
ノベルトの提案には　全く応じる気配はなさそうだ
その様子にため息をつきながら
「いつまでも　そんな調子だと　命が尽きてしまうぞ
いい加減　意地を張るのをやめて　俺と一緒になれば　何かと自由
になれるのに」
みんなの姫に　ノベルトのこの発言は　大きなブーイングを受けた
ノベルトにいろんな野次が飛んでいる
「・・・・・それとも　負のエネルギーで　悪魔に転身するという
考えもあるけどな」
小声で冗談交じりにそう言うと
リラは　ゆっくり目を開けて　ノベルトを見据える
エネルギーを少しなりとも蓄えたリラは　神々しく美しさも増して
いる
柔らかそうなきれいな形の唇は開くことはなかった
ただ　正面から見つめられたノベルトは　目を離せなくなり　虜に
なっていた
時間が来て　引き上げる準備を始めた患者達と一緒に　私も　立ち
上がる

リラにそっと近づき　抱きかかえると
その様子を誰も　止めることもなく　姫を見送る　人垣が自然に作られていた
病棟に向かって歩き出した最後尾に並んだ私は　リラに話しかける
「また　中庭に行こうね」
リラは私を正面からじっと見つめ
「私を開放してほしい」と　はっきりと言った
困った顔で私は見つめ返す
「あなたがいなくちゃ　私は生きていけない」
「こうしていたら　いずれ私は死ぬわ」
力ない彼女の言葉に
「だから　その時は　私も一緒よ　覚悟は出来てる」
何度も　リストカットした手首を軽くあげて彼女に見せると
リラは泣きそうな顔で　また黙り込んでしまった
そんな顔が見たいわけじゃないのに・・・・・悲しませたくないのに・・・・・

光

エネルギーを蓄えたリラは　結界を張り続け　近くに崇拝者と呼ばれるものを寄せ付けない

なので　遠くからリラを見ることしかできない状態だった

彼女のいない所で　崇拝者たちの小さな会議が開かれていた

人数は４～５人　一応この病院内での妖精類を取り仕切るリーダー達の集まりだ

妖精類の様子を　グループに分けて　報告しあうのだが

今日の話題は　リラのことで持ちきりになった

「姫は　今日も美しかったな・・・・・

もっと　会える時間が増えればいいが」

「ノベルトは　姫を落とすって言ってたけど　もう　何年も口すら聞いてもらえないねぇ」

「それどころか　嫌われてるんじゃないか？」

この発言にノベルト以外は　大笑いだ

ムッとした顔のノベルトは

「彼女はだれにも心を開かない　まだ話しかけれるだけ　俺は特別な存在だと思うぜ」

と　ムキになって言い返した

含みを持った笑いで　年寄りの女妖精が喋り出した
以前は　強い力を持って　この辺りを陰で支配していて恐ろしい存在だったが
最近は年をとって丸くなったのか　穏やかな雰囲気を醸し出している

しかし　だからと言って　発言にも油断できず　みんなが耳を傾けた
「いい加減にしないと　彼女死んじゃうんじゃない？
彼女のために　あなたたちは労力とパワーを使っているし　彼女は私たちを拒んでるし
この状態は彼女が死ぬまで　続けるのかしら？」
半ば　呆れたように言い放った

「だから　ノベルトが説得してるんだけど　上手くいった試しがないな」

「姫は　やはりここから出たいんだろうな・・・・」

リーダー達は　次々と　意見を言うが　いつも解決策は出ない
ただの雑談会となっている

老婆は　またゆっくりと口を開く
「私は　もうここを去る身だからいいけど・・・・・・・
利益を生まない労力は　いづれ不満の火種となって　あなたたちを苦しめるわ
その時の覚悟はしておくのね」
ギロリと周りを見回していった

年老いてついに　この地を去ることにした老婆には　変らぬ威厳が漂っていた

「彼女をつなぎとめる理由が　分からないわ
美しいからと言って　閉じ込めておくと　思わぬしっぺ返しを食らうわよ
美しいバラにはなんとやらって・・・・・・
彼女が　悪魔に転身してパワーを得たら　みんな生きてはいないでしょうね」
ククッとおかしそうに笑った

それは　みんなが恐れていることだった

しかし　姫には抵抗する気力もなくなっていたので　このことについて深く話し合うことはなかった

「その時は　俺が始末する」
力強く　ノベルトがきっぱり言った

軽薄で残忍なこの男なら　そうするだろうとみんなが思っていた
みんなが黙ると　ノベルトは満足そうに腕を組んで　またおしゃべりを始めた

「どこにも居場所なんかない　かわいそうな姫だこと・・・・」
老婆は　ポツリとそう言って　席をたった

誰も彼女を止めることはなく　意味のない会議は雑談へと盛り上がっていった

精神科の病棟は細かく区切られていて　リラがいる病棟は　異性の交流はなかった

女子の精神科病棟だったのだ

ここに結界が張られていて　今は誰も侵入することが出来ないのだ
老婆は　リラの結界にパワーをぶつけ　彼女に交信してみた
異変にすぐ気付いたリラは　ますます強く結界を張ったが　交信してきた相手の声に反応して
ゆっくりと老婆の前に現れた
少なからずとも　エネルギーを蓄えたリラは　いつもより美しく
同性でも見惚れてしまうほどだった
「こんにちわ　少し話がしたくてね　ちょっと良いかしら？」
優しそうな笑顔を浮かべて　続けてこう言った
「私は　時期ここを去る　あなたはいつまで捕らわれている気？
ここの人々をこれ以上堕落させないで・・・・・・・・・・・・・・
ここから出たくないの？　よかったら　協力するわよ」
鋭い眼光でこう言った老婆に　リラは驚いて　目を見開いた
老婆が　周りから一目置かれている存在とういうことは知っていた
しかし　まさ味方になってくれる存在とは思えなかったのだ
「助けてくれるの？」
優しいか細い声だがしっかりと　聞きとれた
「あなた本気で望むのならね　　それがみんなのためなのよ」
久々にリラの声を聞いた
反応を見せたリラに　老婆は、満足そうにほほ笑んだ

別れ

「世話になったな」
清々しい表情でセンバティは　一家にお礼を言った

一週間の居候生活が　なんだかんだで1カ月もの延長滞在になった
ここの家族は優しくてあんなに怖がっていた子供には妙になつかれて
モパとも楽しく一カ月過ごしてきた

力のリミットの加減で　センバティは名残惜しいが　この生活を終
える決心をした

「さみしくなるわね・・・・またちょくちょく顔を見せてね
春には　出ていくことはしばらく黙っているから」
ユイは　小声で言った

「春　すごくなついてるからな・・・・・いなくなったら泣くかも
しれないな」

「いつでも遊びにおいでね」

次々と優しい言葉をかけてもらって　感極まってセンバティは泣き
そうになった

「すぐ近くに居るから　また　お邪魔します　ありがとうございま
した」
ペコっとお辞儀をして　早々に　家を離れた

モパは　目が合うと　後を追いかけた
少し先を歩いてるセンバティは　振り向かず黙って歩いている
「泣いてるのか？」
モパが声をかけると
「これっきりというわけじゃないんだ　泣いてないよ」
と　センバティは振り返ってそう言った
泣くのをこらえたようだ
公園につくと　ベンチで一息ついて　2人は腰掛けた
「あっという間だったな　パワー的にはまだ余裕があるんじゃないか？
どうして・・・・・・」
モパが訊ねると
「まだ　この場所に居たいんだ
春達にも会いたいし　このくらいの余裕あったほうがいいだろう？
長くいると　別れづらくなるし」
モパは自分が　去る時のことを考え　頷いた
「モパの余力は計り知れないな・・・・・・
パワーを発散させてるからと言っても　次元が違うようだ」
センバティは一緒に過ごすことで　モパの凄さを身をもって　感じた
毎晩　意識を集中させ　いなくなった彼女の波動を捜索しているこ

とも・・・・・・・

「肝心なことには　何の役にも立っていない・・・・・・
そんな大したことでもないよ」
目線をまた　丘の上に移すと　黙り込んでしまった

真冬だというのに　子供たちは　走り回って　公園ではしゃいでいる

子連れの姿も何人か見える

「・・・・・・彼女のことさ・・・・・・
情報を得るのに　リュウに相談したらどうかな？
彼女　この辺りに詳しいし、　何か掴めるかもしれないぜ
おれ、　近いうちに　訊ねてみるよ」
お世話になったお礼に　何かしたかったのだ

手掛かりがつかめるかどうかは　分からないが
センバティの申し出に　モパは嬉しくなった
「ありがとう」
人懐っこい笑顔を見て　センバティもつられて笑顔になった

「だから　ミクには手を出すなよ」
ニッと笑うと
「そういうことか・・・・・」
と　モパも苦笑しながら　ほほ笑んだ

古狸

早速　翌日には　リュウにコンタクトを取ったセンバティだった
リュウの住処を尋ねると　暇を持て余していたらしく　喜んで歓迎された
「しばらく見ないうちに　ずいぶん逞しくなったね～」
漲るパワーに　感心してセンバティを褒めた

「あぁ」
素直に　センバティもそのことを認めた

「あんたは　ここ守る男だと思っていたけど　その日も近そうだ」
リュウは顔を皺だらけにして笑った

「ここのリーダーはミクじゃないか・・・・・」

「2人で守ってくれれば　安泰だよ」
ニヤリと笑ったので　またからかわれたと思ったセンバティは　話を遮った

リュウとしては　センバティは　ちゃんとリーダーとしての資質があって
それにふさわしいと思っているのだった

センバティは早速　話の本題にはいった
「実はさ・・・・　前に聞いた　ログハウスに居たハーフのことなんだけど」

リュウは熱いお茶をすすりながら　黙って聞いていた

「彼女の行方を知りたいんだ　　モパの知人らしくて　ずっと探してるんだ」

真剣な目のセンバティに　リュウは　湯呑みを　置くと

「ずいぶん前のことだからね～　　そうかい　モパの知り合いか・・・

彼女かな？　ふふ

あんた絶妙のタイミングだよ」

リュウは　そう言うと　奥の部屋をチラリと見て　客を手招きした

センバティは　驚いて目を丸くした

以前ここにいた　リーダーの補佐をしていた　老婆だった

冷酷で　非情で　地位のためなら仲間を売るような人柄で　恐ろしい存在だったのだ

なるべく関わりあいにならないよう　避けていた人物で

ずいぶん前に　遠くへ行ったのを　心から喜んでいたのだった

「久しぶりね　」

ほほ笑みかけるが　それも　冷酷な笑顔に見えてしまった

「覚えてる？　　昔ここに住んでた仲間さ」

リュウののんびりした声に　センバティは　老婆から目を離さず

頷く

「ははっ　そう？　私は　年老いたからもう　若者のことはずいぶん忘れてしまった

すまないねぇ

実はねぇ　さっきから　話を聞かせてもらってたんだけど
あんたが探してるハーフのこと　よく知ってるのよ」
老婆は　センバティを見ながら言う

「えぇ！？　本当に？？」

「嘘じゃないよ
　それでね　彼女を助けたいんだけど　あんた　協力してくれる？
彼女を探してる　モパって人にも　力を借りたいんだ」
老婆の目が　あやしく光る

信用していいものか　どうか　考えるが　この老婆の意図がさっぱり読めなかった
人助けという言葉が　一番不似合いなタイプだからだ

リュウをチラリとみると

「昔のあんたが　恐ろしいから信用出来ないようだ」
リュウはズバリと　そう言い放った

リュウと老婆は　心底おかしそうに　大笑いしてる

センバティは　言葉を失って　２人を見比べる

「ははは っ！　ろくなことしてこなかったからねぇ
でも　今回は　自分のためでもあるんだ　自分がいたテリトリーを守りたんだよ」
最後は真剣な眼差しで　センバティをまっすぐ見た

「何でもいい　彼女のこと　教えてくれ」
センバティも　老婆を　まっすぐ見る
満足したように　老婆は　センバティを　頭から足先まで　眺める
そして　ゆっくりと口を開いた
「捕らわれてるのよ　彼女はずっと　あるところに。
そして　力を奪われ　生きる気力を失っている
早く手を打たないと　大変なことが起きるわ」
短く言った内容に　衝撃を受けたセンバティ
リュウも　初耳だったらしく　目を見開いている
老婆は　捕らわれてる彼女のことを　詳しく　2人に告げた

片方のピアス

話を聞き終えると　センバティは沸々と怒りが湧いてきた
大勢で命尽きるまで何年も押さえこんでいるということに　他人事ながら正義感の強い彼は
聞いてるだけで　我慢ならなかった

「なんてひどい話なんだ」

そして　今さらながらにその事を相談に来た老婆にも大きな不信感が募った

「モパはずっと　彼女の行方を捜しているんだ
貯め込んだエネルギーもそのために使っている
モパに早く教えてやらないと・・・・・・・・・」
この残酷な話をモパに伝えるのは気が引けるが　悠長なことは言っていられない状況だ

「そう　事は急いだ方がいい
でも　無謀に正面から立ち向かうなんてことは　やめなさいね」
老婆は　センバティの様子を見て　忠告した

「彼女は彼らにとって　宝なんだよ
それを奪うんだから　戦いは避けられないだろう？」

「何言ってるんだ！　彼女は物じゃないぞ」

「そうだね　でも　彼女の意思が強かったら　こんなに長引かなかっただろうね

一緒に居る　若い人間から　離れようとしなかったのも　原因のひとつさ」

「離れようとしない？」

「本来の力は　とても強いものだよ　本気になれば　脱出も可能だったろうに」

意地の悪そうな顔で老婆は笑う

責任はわたしにはありませんと言ってるように聞こえた

「どうして　今頃　彼女を助けようと思ったんだ？」

この問いに　リュウも頷き　老婆の返事を待っている

軽く笑うと　リュウをチラリと見て

「私の死期が近いんだ　そんなに長くはない

近頃　仲間が必死でやってることが　なんだか急に馬鹿らしくて

協力する気になれなくなったんだ」

何年も協力しておいて　今さらの発言だった

リュウは　目を丸くさせて

「ついに　そんな時が来たかい？

あんたらしくない判断だけど　気持ちはわかるね　どんどん性格

も丸くなってきて

別人のようだ」

「あはは！　そうかい？　あんたも時期分かるよ」

老婆は　顔をくしゃくしゃにして笑ったが　急に真顔になる

「でもね　面倒はごめんだよ
なるべく穏便に悟られないように　したいんだ
だから　ツフュールの意見を聞きたかったんだけど　リーダーが変わったそうじゃない？」
責任は負わないという発言にムッとしたが　老婆らしい考えだと思った

「今はミクがリーダーだ　知ってるだろう？」

「あぁ　弟子のきれいなあの子だね　　でも　私は彼女が苦手でね
向こうも嫌ってるんだ
だから　リュウに相談してたんだよ

あんた　この話　モパって人に伝えてくれる？
彼に会いたいわ　それで　どうするか決めようじゃないか？」

「この話をしたら　モパは何が何でも　彼女を救うぜ」

「そうでなきゃ　困る」

「だったら　あんたも覚悟きめて　協力するんだな」

「それは　モパって人の力量次第だね
再三言っておくけど　面倒はごめんだからね」

この発言に　怒りで立ち上がったセンバティだったが　リュウに宥められる

「あんたの気持はわかるけど　助けたいなら　この人に頼るしかないんだ
とりあえず　モパに話してごらんよ」
肩に手をぽんっと置かれて　センバティも　怒りを堪える
「それから　ミクとツフュールにも話を通した方がいいね
私から伝えるから　あんたは　モパを頼んだよ」
リュウの言葉に頷いたセンバティは　老婆と一緒にモパのもとへと向かった

しばらくして突然　見知らぬ老婆と　友人のセンバティが浮かない顔で訪れた
そして　ずっと探していた　リラの状況を知る
話を聞き終えると髪を片手で　くしゃっと掴んで　たまらなくなったモパは　黙ってしまった
彼女を探し出すことが出来なかった自分をひどく責めていた
そんな様子を　センバティも口びるをギュッと噛んで見ているしかなかった
ようやく見つかった彼女の情報が　こんな悲報になるとは・・・・・

しばらくたって　モパは老婆の前に立つ
「あなたの意向に沿って　彼女を救出する
だから協力してくれ」
と　静かに言った

モパをずっと見ていた老婆は　ゆっくりと口を開く
「あんたになら　出来そうだ
分かった　協力するよ」
リラのことを聞いて　この落ち着いた賢明な決断に　老婆も感心した

「私が　あの場所を去るのは1ヶ月後だ
それまでに　出来るかい？」
試すような　口ぶりだが

モパは　怒りを秘めて
「必ず　救い出す」
と言いきった

そして　モパは　右の手のひらを差し出し　ピアスを片方取りだす
青い　深い海のような　神秘的な色だった　小ぶりで　石の周りは
　ゴールドで飾られてる

老婆は　それを見て　ほほ笑む
「きれいだね」

「これを　彼女に渡せるか？」

ピアスを受け取ると
「やってみるさ　これは・・・・・・？」

「私と彼女の通信手段だ
渡せば　わたしのことだとすぐ分かるはずだ」
長いまつげを伏せて　モパは答える

「それで　どうするのさ？　これから」

「あなたに迷惑はかけない　ただ　これを渡して　彼女と接触してほしい」
じっと　老婆をまっすぐ見る

わかったよと　老婆はピアスを　しまう

「それから　なるべく彼女にパワーを蓄える機会を増やして欲しい
出来るか？」

老婆は　ほほ笑みながら頷く
「ほどほどにならね」

老婆は　救出に協力するということで　とりあえず今日は　帰ることにした
何か異変があったら　その都度　老婆とも連絡が取れるよう　細かく打ち合わせる

帰り道　老婆は　片方のピアスを　取り出し　空に向けてすかすように眺める

「ふふ　通信手段ね」
美しい細工のピアスの使い道を　老婆は知っていた

モパの言うとおり　通信手段としての機能はある
そして　パワーを送ることも出来るのだ
限られた者にしかできない　高度な技が必要なので　ピアスを実物化して使用するものは
今はほとんどない

モパを見た限りでは　並みの力の持ち主でなはい
パワーを送ることも　十分可能だろう
だが　彼女を救うためには　とてつもない莫大なエネルギーが必要だ

「どうするつもりなんだろうねぇ　　一筋縄ではいかない　良い男だったけど」
おかしそうに　笑いながら　ピアスをしまう

「なんだかワクワクしてきたよ　長生きすると良いことあるもんだ」
死期を待つ者とは思えないほど　軽い足取りで　姫のいる　住処へと戻って行った

愛しい声

小さな青いピアスを受け取ると　それを　大事そうに両手で抱え
肩を震わせて　大きな瞳から　涙を流していた

こんなに感情を露わにする姿を初めてみた　老婆だった
お人形みたいな子だと思っていたけど　やはり　感情があるんだな
と　真剣に感心する

そのピアスがモパからの物だということを　即座に感じとったリラは
強くピアスを握りしめ　愛しい人の名前を口に出す

「モパに会ったのね」
涙は止まらない

「あぁ　良い男だったよ
あんたをずっと探していたそうだ　　それで　あんたを守りたいと
言ってたよ」
言わなくても分かっているだろうけど　という言葉を飲み込んでそ
う伝えると

リラから大粒の涙があふれ出し　止まらなくなった

「そんなに会いたいなら　いままでなんで連絡取らなかったのさ
あんまり　泣くんじゃないよ　他の者に怪しまれるだろう」
小さな子を宥めるように　小声で　リラに語りかける

しばらくは　涙が止まらなかったが
老婆の言葉を聞いて　平静を取り戻すように　深呼吸をした

「彼に今さら　迷惑をかけれないと思って・・・・
いなくなったのは　私の意思だったから」
と　かすかな声でそう言った

「もう　そんな悠長なこと言ってらんないよ
モパは　あんたを救うためなら　危険を顧みない様子だった
あんたも　会いたいなら　シャキッと　覚悟を決めるんだね」
それから　老婆は　結界を解く時間を増やして　中庭でパワーを得るよう促した
細かいことは　モパから　連絡を受けて　実行することなる
陰で　手を貸しているのがバレないよう　事を勧めると　リラに説明した

その夜　みんなが寝静まった頃
リラは　ピアスを握りしめ　愛しい人の名前を念じる
かすかに　青いピアスが明るい色に変わると　ずっと聞きたかった心地の良い　優しい声が聞こえる
「リラ　平気か？」
懐かしい声に　涙が自然にあふれてくる
「モパ・・・・・・・ごめんなさい」
涙に交じった　声で答えると
更に優しい声で　モパは話す

「ずっと探していたんだ　今まで　探し出せずにすまなかった」
優しいモパの声に　何年も会っていないが　変わらず昔の面影を鮮明に思い出して
いますぐ　会いたくて会いたくて　強くピアスを握ってる手を抱え込むように抱きしめていた

「あなたに　もう会えないかと思っていた
声を聞いたら　会いたくて仕方ないわ」
リラの正直な言葉に　モパも　リラへの気持ちが高まった

「今すぐにでも　救い出したいが　　準備が必要だ
必ず助けるから　気をしっかり持つんだ
それまで　リラはパワーを少しでも蓄えておくんだよ」

リラは　黙って頷く

姿は見えないが　お互いの様子が手に取るように分かった

「リラ・・・・・愛してる」
この言葉を最後に　ピアスの光は　また光り　通信が消えた

それから　数分後　姿の見えないリラを探しに　若い女がやってきた

「リラ？」

涙はもうぬぐい去っていたリラだったが
嬉しいような　悲しいような表情で　振り返る

なんだか　暖かい光に包まれているようで　幸せそうに見えた

「眠れないの？　ここは寒いから　部屋に戻ろう」

女は　この時　少しリラの様子が変だと思ったが　周りを見回すと
　変わった様子もなかったので

特に気にせず彼女と一緒に病室へ戻って行った

消えゆく力

ツフュールとミクの呼び出しで　モパは隣のアジトへ出向いていた
ミクは　少し険しい表情をしている
糸目のツフュールとリュウは　相変わらずの無表情だった

「話は聞いたわ　彼女・・・・助けるんでしょ？」
ミクがモパに単刀直入に問いかけてきた

「あぁ　必ず助けだす」
きっぱりモパは短く答える

ミクは　リュウとツフュールと一瞬視線を合わせ　一息ため息をついた
「捕らわれの姫を助けるって言えば美談だけれど
話は単純じゃないわ
捕らえてる者との抗争や　助けだす手段について　どうするつもり？」
いつになく手厳しい態度だが　リーダーであるミクには　当然の態度だろう

「詳しくは　まだ考えていないけど　被害は最小限に抑えるよう努力する」

「考えがあって　言ってるわけじゃないのか？」
ツフュールがすかさず　口をはさんだ

「・・・・もともと　私はいなくなった彼女をずっと探していた

そして　ようやく見つけたんだ
出来ることは　何でもする」
力強く言い放ったモパだったが　ミクは呆れた顔で見ている

「モパは　力のある頭のいい人だと思ってたけど
意外と　無鉄砲なのね」

モパはちょっと苦笑しながら笑った
そして　左の耳に　きらりと　ブルーのピアスが光った
今まではしていなかったものだと　ミクは思った

「そのピアスのこと　知ってるわ
モパ　あなた　死ぬ気？　パワーをすべて彼女に送るつもりなんじゃないの？」
眉をひそめて問うと

モパは一瞬ビックリした顔を見せるが
「それじゃ　悲しすぎるよ
彼女もその方法では納得しないだろう
・・・・・・・君たちには　悪いけど・・・・・春から　ありったけのパワーを回収する
つもりでいる」
言いにくそうに　モパは言った

拠点のパワーの源である力を　独り占めするということは　ここに住んでいる者にとっては
敵になるということだ

リュウと　ツフュールは　ムゥっと深い唸り声に似た声を出す
「モパ・・・・・・・それは　宣戦布告と見なすぞ」

ツフュールが　鋭い眼光でモパを見据える

「・・・・・・・・・・」

しかし　そうでもしなければ　膨大なパワーを短時間で集める方法がないのだ

そして　その方法は　春の持ってるパワーを吸いつくし
春の持ってる力を奪い　もう　モパとの交流も途絶えてしまうことを意味している

何より　ここに住む者とのいさかいは避けられない

誰も口をはさめないまま　険悪なムードが漂う

「気づいているかもしれないけど・・・」
リュウが　やんわり口を開いた

みんなが　リュウに注目している
なんだか　一気に　険悪なムードが変わる　間ののびた声だった
「春ってこのパワー　最近　衰えてきてると思わない？

その兆しが　出ていると　私たちは感じとっているんだよ
あの子のパワーは　それほどもう長く持っていられないよ」

驚いた顔をしているのは　モパだけだった

ツフュール達は　最近そのことについて　頻回に話し合い　対策を練っていたのだ

「いずれ　訪れるとわかっていた
私たちは　そのたびに　新しい拠点を見つけ　生きながらえてきたんだ」
ツフュールは　静かにそう言った

ミクはいつもの　優しい眼差しをモパに向けた

「こうなる　運命だったのよ　きっと
あなたが来るまえから決まってたことなのよ・・・・・・・・・
彼女を・・・・救い出すことに　私たちも協力するわ・・・・・・」

「無鉄砲で　見ていられない
一人で抱え込まないで　まず　相談しなさい」
最後は　リーダーらしい　忠告を交えた　優しい友人の言葉だった

ログハウスでの出来ごと

今夜も　みんなが寝静まった頃　リラは　そっと　部屋を抜け出し
人が来ない　倉庫で　ピアスを大事に握り　モパに交信をしてみる
青いピアスは　一瞬光り　すぐ　彼の優しい声が聞こえてきた
まずは　体調を気遣う言葉だが　声を聞いてるだけで　すぐ隣に居
るような錯覚がした
愛しい彼に寄り添ってるような暖かい気持ち
少しずつ元気を取り戻しているリラだった
モパは　ちょっと　一呼吸置くと　あることを聞いてきた
「リラ　聞きたいことがあるんだ
なぜ　わたしの前から　姿を消したのか・・・・・」
ついに　この話をする時が来たと　リラも覚悟はしていた
１０年前　この彼の前から　消えたのは彼女の意思だったからだ
そして　この話は　振り返りたくない過去になっていたが　話さな
いわけにはいかない
長いまつげを伏せて　ゆっくり口を開いた
「ごめんなさい」
一言　誤ってから　リラは　１０年前のことを　話し始めた

リラは　少し遠く離れた土地に　ふらりと散歩に来ていた
のどかで　人ごみの少ない　きれいな街並みが気にいって　近くの公園で　一休みをしていた

すると　公園には　色んな人がやってきて　ジョギングやら　ボール遊び　遊具ではしゃぐ子供の
声が　絶え間なく聞こえた

天気が良くて　午後の平和な穏やかな時間だった

きれいな花壇に季節の花も咲き乱れていて　花が好きなリラは嬉しくなっていた

彼と　一緒に今度　ここへ来てみようかしら？
大好きなモパのことを真っ先に思い浮かべて　思わず頬を緩ませてみる
柔らかい　長い髪をかきあげ　そっと　花の香りを楽しいでいると
学校帰りの　小学生が　４人　元気な笑い声を響かせながらやってきた

女の子のグループで　活発そうな雰囲気の中　最後を歩く女の子は
　浮かない表情で
背負ったランドセルのベルトを　きつく握りしめている

一人　浮かない顔だったのが　なぜか気になって　リラは　その子たちの様子を遠くから見守っていた

良く見ると　他の子の荷物を持たされていた女の子は　砂場の近くに　ようやく荷物を下ろす

それを見ていた　一人のメンバーが　声を張り上げた

「ちょっと！　そんなところに置かないでよ！！　汚れるでしょ」

駆け寄って　女の子は自分の荷物をとり　底についた砂を払い　荷物を運んだ子に冷たい視線を

投げている

「ご、ごめん！　重くってつい・・・・」

慌てて　その子は　他の荷物を拾い上げようとすると

後ろからきた　リーダー風の子に　思いっきり突き飛ばされた

リラは　ビックリして　その様子を見ていた

女の子は　泣くのを我慢して　自力で立ち上がり　肘を打ったらしく　そこを押さえている

どうやら　友達ではなくて　いじめられているようだ

他には　この様子に気づいてる人はいなくて　助けることもできない

ちょうど　大きなログハウスがあって　そこの影になっている

「あんたが　トロいから　怪我したんだからね！」

突き飛ばした　女の子は　誤りもせず　その子を睨んでいる

女の子は　一人　ずっと　肘を押さえたまま　他の子が　公園の遊具で遊び出したのを
遠くから見ている
気弱で　言い返す気もないようだ

気の毒になった　リラは　花壇の近くに座った　女の子のそばへ
怪我の様子を見に行く

普通の人間には見えないので　近づいても　何の問題もないのだ

肘は　擦りむいて　赤くはれているが　出血はなかった

女の子は　つまらなそうな顔で　友達が遊んでいるのを眺めている
一緒に遊ばないのなら　帰ればいいのに・・・・と思いつつ　思わずつぶやいていた

「ひどいわね」
他の人には聞こえない声で　そうつぶやくと　リラは　女の子の横顔を見上げる

ふいに　女の子は　その声に反応して　リラをまっすぐ見つめ
驚いた顔で　目を見開いている

リラは　その様子にキョトンとする

まさかね・・・・・・・

自分が見えるなんて　思ってもいなかったのだ

「妖精・・・・・？」

女の子は　リラから目を反らさずに　つぶやいた

この言葉に　驚いた　リラは　慌てて　花壇の中に隠れた

私が見えるの？・・・・・・・・

心の中で　そう　自問自答していると

女の子は　ゆっくり花壇に近づき　花をかき分けた

「わぁ　お人形みたい！かわいい」

子犬を見るような目で　リラの姿を見つけると　女の子は　初めて

にっこり笑った

これが　彼女との出会いだった

記憶

「で、　その子が　今までずっと一緒に居る女の子か・・・・」
モパは　精神科に入院しているまだ会ったことのない人間を　思い描いた
なんとなく陰湿なタイプが浮かんだが　ハッキリとイメージはつかない

「ええ、それでね　その時　実は　私の姿を見れたのは　彼女だけじゃなくて
いじめをしていたリーダー格の子も　そうだったの」
リラは　ポツリポツリとまた　話しだす

いじめに会っていた子は　「サトミ」と呼ばれていた
サトミは　可愛いらしいリラを一目で気に入り　嬉しそうに話しかけていた

すると　遊んでいた3人が　帰る時間になり　サトミに近寄ってきた
なぜだか　リーダー格の子と　サトミには　リラの姿が見ることができ
他の子は　変な人を見るような目つきで　二人を遠ざけた
リーダーの子は　マズイ傾向だと思ったらしく　一旦引いて　サトミとリラを置いて
仲間と帰ったが
翌日から　リラを自分のペットみたいなものにしようと　サトミと

本気で
リラを奪い合うようになった
サトミにしか見えないという風に仲間には思わせて　執拗ないじめが繰り返されていた
必死で　リラを奪われまいと　体を張って　守っていたが
ある日　放課後　公園に追い込まれ　ログハウスに逃げ込んだ時
悲劇がおきた

仲間3人で　サトミをいつものようにいじめていたが　無理やりリラを奪いとったのをきっかけに
サトミは　我慢の限界を超えた

隠し持っていたライターで　その子の服に火をつけた
慌てて　それを脱ぎ捨てたが　髪に火が燃え移った

洋服は　すぐ燃え広がり　狭い部屋の中はに　火の海になった
ログハウスからは　遠目でも分かるくらい　黒煙を取り巻いている

友人は　必死で　リーダーの服についた火を消そうとして　逃げ遅れ　煙に巻かれ　４人の子供は
次々と倒れてしまった

この異変に　近くに居た　大人たちも気付いて　消防車を呼んだが
小さなログハウスは　すでに炎に巻かれていた

リラは　恐ろしさで震えていたが　力を出し切り　なんとか鎮火に成功する

しかし　ショックとエネルギーの放散で　力を極限まで落としてしまい

その上　記憶を失って　ようやく5年前に　すこしづつ蓄えたエネルギーとともに

記憶を取り戻したのだ

火事の後は　大変だった

警察　学校　親　友人　近所の人から　様態が回復してから散々叱られ　４人は信用を失い

危ない子として　町中の噂になった

幸い　誰も　命に別条はないが　それぞれわずかに　火傷のあとは　刻まれていた

とうとう　その町に居られなくなった４人は　違う土地に引っ越すことになってしまった

この話は　この町では　悲しい・恥ずかしい出来事として　みんなが　口を閉ざすようになった

リラは記憶を失った後一人で　公園にいた

それから　数日後　突然　火傷のため　包帯を巻いた女の子が　公園にやってきて

その子が　ひどく悲しそうに　今までのいきさつを話してくれて

それから　帰る場所も分からないので　女の子と一緒に　暮らすことにした

女の子はリラを大事に　お姫様のようにあつかい　他のものは遠ざけるようにしていた
誰とも　友達を作らない
リラといるときだけ　笑顔を見せていた

やがて　リラは　パワーを回復させ　記憶を取り戻し　すぐモパに会いに行こうと思ったが
いなくなる気配を察すると　その子は　リストカットしてしまう

親からも　見放され　見えないものが見える危ない子として
精神科を受診し　入退院を繰り返しているのだ

リラは　その子を捨てて　離れる勇気がなかった

そうするうちに　ついに　その精神科に住んでいる　妖精類からも目をつけられ
リラは　完全に逃げ場を失った

記憶（後書き）

陽気な話が書きたかったのに・・・・・

暗くて　すみません

一休み（前書き）

そのころ　幸せ一家は　やはり緊張感ゼロで　過ごしています

一休み

「ママ　何見てるの？」
さっきから　必死にパソコンにはりつく妻に聞いてみる
ユイは　ぱっと　画面を隠し　にっこり笑いかけるが　答えてくれない
大体想像はつくんだけどね・・・・・・・・・
「今年のバレンタインは　どんな手作りかな？」
「もう！　見たでしょ！」
ユイは　手作りバレンタインのレシピを見ていたのだ
「見てないけど　毎年　この時期同じことしてるよね」
旦那さんは　笑顔で笑いかける
「そう・・・ね　　でも今年は　春も食べれるでしょ？
だから　ちょっと張り切っちゃうかも」
子供がいるとは　思えない若い可愛らしい妻の言動に　また　吹きだしてしまった

ところで・・・・・・
「モパは　食べれないんだよね・・・・」
ちょっと　さみしそうに　ユイが言うと

「モパって・・・・・・？」

「えぇ！？　　パパ　どうしたのよ！」

「・・・・・あぁ　モパね！　失敬　最近ちょっと　モパの影が薄いから・・・・・」

旦那はポリポリ頭をかく

「もう　痴ほうの始まりと思って　びっくりするでしょ！」

あんまりな言い方だったが　旦那さんも　真面目に頷く

「最近　春も　モパと一緒に居ること少なくなったなぁ

私も　あんまり姿見ないし・・・・・・・・」

徐々に　この家族からも　「力」が失われつつある

「彼女でも　できたかな？」

「えぇ？」

モパのいないところで　シリアス出来ないこの夫婦は　また　お酒を片手に盛り上がっていた

一休み（後書き）

陽気な　モパのイメージが・・・・・
最近出す暇なくて　残念！
本当は　３枚目のちょっとおかしな奴なんです

第三者の目

「彼女出来たっていうより　よりを戻したってことだよな」
さらりとセンバティが言った

モパは　恨めしい目でセンバティを見る
「そんな単純な言い回し　好きじゃないな」

最近の様子を　ちょうどミクとセンバティに報告していたのだ

そして　彼女の過去についても2人に伝えた

ミクは　無表情で
「記憶喪失ねぇ・・・・・・・・・・
こんなこと言ったら　なんだけど　昔のドラマみたいじゃない？」
ちょっと　言いにくそうに言った

「恐怖体験をすると　その時のことを思い出したくないって脳が意識するらしいから・・・
彼女にとって　あの火事は　すごい恐怖だったんだろうな」
モパも　ミクの発言に　少し笑って　同意しながら　答えた

ふに落ちない顔で　ミクは
「それで　今は　記憶を全部取り戻したの？」と聞いてみた

「いや・・・・それが　火事の前後はかなりあやふやで　一緒にいる人間からの
情報が多いみたいだ」

そんな　ミクの様子を見て　センバティは　よりを戻したモパに怒っているのかと思っていた
明らかに　ミクはモパを気に入っていたので　突然の彼女の出現に
　気の強い彼女が
このまま引き下がるのか・・・
諦めてくれていたら　嬉しいなとも　思っていた

「ミク　どうかした？」
恐る恐る聞いてみると　センバティを見て

「なにか　スッキリしないのよ　彼女の話し
　嘘ついてるわけじゃないだろうけど　あやふやな部分が気になるのあなたは　何も　感じない？」
勘の鋭い彼女は　なんだか　もやもやした気分でいた
すっかり　彼女の話を鵜呑みにしているモパ達は　疑う余地もなかったみたいだ
テリトリーを巻き込んでの話しとなると　あやふやな部分が　どんどん気になってきたミクだった

「うーん・・・・・特に・・・・・多少記憶違いでも　何か問題ある？」
いい加減な　発言に　ミクは　ギロっと　２人を睨んだ

「彼女は敵じゃないかもしれないけど
なんだか　胸騒ぎがするのよ　私　勘はするどい方なんだけど　この話　なんだか

もっと裏に何かあるんじゃないかな・・・・・・・・・」
ミクは　　難しい顔で　少し考え込んだ

ミクがこう言いだしてから　モパも少し気になるようになったが
これと言って　真相を解明することはできないので　すっかり忘れていた

今夜も　リラに少し蓄えたパワーを送る

何も言わなくても　通じ合える　２人の　幸せなひと時だった

女同士

「やはり　火事の一軒前後は　記憶が飛んでいるそうだ」
翌日も　モパはミクに　昨夜のリラとの話し合いのことを伝えた
リーダーであり　友人である彼女に　やはり　正確な情報を伝える
と言うのは
当然だと思ったからだ
しかし　記憶のないことについては　もう　それ以上どうしていい
のか見当もつかなかった
決して　我々を欺こうとしているのではないと　ミクにも　分かっ
てもらいたかった
モパはそこで　自分なりに考えた　提案を伝えようと決めたのだ

「それから・・・・・・・・・・

今度　彼女と直接話してみないか？」

意外な提案にちょっとミクは驚いた
けれど　そのほうがしっくりくると即座に判断した彼女は
「ええ。そうしたいわ」と　答えた
直接　会えば　このモヤモヤの意図も　何か掴めるかもしれない
いつもの　キリっとした　美しい横顔で　姿勢よく佇む姿に　モパ

も思わず見とれる

いつ見ても　隙のない美しさで　強さを秘めているミク

おっとりとしたリラとは　対照的な美しい2人

気が合うとは　思えないが・・・・・・

お互いの存在を確認するにも　直接会った方が良いと　モパも考えてのことだった

2日後　リラに　あらかじめ告げていたように　今夜は　モパからではなく

ミクが　ピアスから　話しかける・・・・・・・・・・

当日　モパが大事そうに　ピアスを渡しに来たのだ

同じく　リラも人目につかないところで　ピアスを片手に　空を眺めていた

そして　ゆっくりと2人　同時に　目を伏せ語りかけてみる・・・・・・・・・

目を閉じると　ハッキリと　お互いの姿を認識出来た

2人は同じような　背格好だが　リラは　おとぎ話から出てきたような

まるで　空想の世界から抜け出たように　無垢で　美しい様子だった

とても　ハーフとは思えない　　正真正銘の「妖精」のイメージだった

初めて見た　その美しさに　ミクも言葉を失う

これが　モパの愛する人か・・・・・・・・・・

自分とは　かけ離れた種類の美しさを持っていると　否応なしに見せつけられた

だからと言って　「結婚」という　人間のようにゴールはないためミクとしては　実は　引く気は全くないのだった

リラは　妖艶な毅然とした　リラの姿をみて　思わず　ため息が出た

美しいだけじゃなくて自分の意思をはっきり誇示できる強さと勇気があるのが　一目でわかる

自分には　ないものを持っている人だと　感じとっていた

ゆっくり　口を開いたのは　リラだった

お互い　軽い会釈をすると　にっこり　笑いかけたのだった

「こんばんわ　ようこそ・・・・・」

「初めまして　ミクよ」

見た目通り　おっとりしているリラと　ハキハキしているミクだったが

昔からの友人のように　2人はすぐ打ち解けた

リラはかなり　エネルギーを蓄えてきたようで　明るさも取り戻していた

そして　その力は　モパから　ほとんど得たものだということも知っていた

この莫大なエネルギーをためこんでいたモパにも　驚いた

・・・・・・飽きれるくらい　底の見えない人ね・・・・・・・・

なおかつ　それを見せないように出来る力を　リラも持ち合わせているのだ

2人が本気を出せば　大抵の集団も太刀打ちできないだろう

しかし　ちょっと頼りないモパと優しそうで虫も殺せないようなリラを見てると安心は出来ない

2人の馴れ初めなんて　聞いてる場合じゃないミクは
単刀直入に　記憶を失った前後を　出来るだけ詳しく聞いた
そのころは　ミクも同じエリアに居たハズなのに　火事を防げる膨大な力に
気付かなかったのは　おかしいと・・・・・・・
しれから　そのころのリーダーのツフュール達と　老婆はきっとこの一件に何か
関係があると　確信を持っていたのだ

「あなたを助け出すと言った　老婆のことはどう思う？
前から　交流があったの？」
ミクの問いに　リラは　首を振り
「なんだか　油断できない雰囲気の人で　気にはしていたけど
お互い　何も今まで交流はなかったわ
突然　話しかけてきたの。
でも　私には　あの人に頼るしか　方法が見つからなかったから・・・・・」
「なんで　助ける気になったのかしら？　ガラじゃないのにね」

老婆を思い浮かべ　ハッキリ嫌いだと認識してるミクは　形のいい眉をひそめた

大体　あの人が絡んでること自体　気がのらないのよねとも　思っていた

「あの人は　死期が近いから
ここを出る前に　この集団の負のサークルを止めたいって言ってたわ」
どちらかが　死ぬまで続く　力の奪い合いの触媒となってるリラは
　そう言った

「・・・・理由が　あの人らしくないのよね・・・・死期が近いから？だけでは納得出来ないな・・・・
でも　本人は　本当のこと言わないだろうし・・・」
ミクはますます難しい顔になる
やはり　直接　本人に聞くしか　何かは感じとれないだろうと思った

「一緒に居る　人間とは　別れられるの？」
一番聞いてみたかったことを　質問した

「１０年近く一緒に居て　離れなれなかった人間と　決別出来る勇気はあるの？」

もう一度　訊ねる

リラは　目を大きく開いたが
「出来るわ　　それが彼女のためだし」
と　ミクをまっすぐ見つめ言い返した

「あなたが離れようとすると　手首を切るそうだけど・・・・・」

「きっと　本気じゃないのよ　」

「あなたをつなぎとめるためでしょうね　　でも　もう　それもおしまいにしないとね」

ミクがそう言うと

リラは　可愛らしい笑顔を向ける

思わず抱きしめたくなるような　可愛い笑顔に　釘づけになってしまった

・・・・・・モパが惚れるのも分かるわ・・・・・・・・・

悔しいが　そう心底思った

その時　リラのいる部屋の鍵が　ガチャガチャと動いた

思わず　２人は　交信を止め　ドアの方を見る

暗くて分からないが　誰かが　ドアを開けようとしているようだ

急に　緊張が走り　鼓動がドンドン大きくなっていく

鍵がかかっているので　開かないので　ますます　ドアを開けようとする音も大きくなる

リラは　瞬間的に　移動し　隣の部屋から　そっと　廊下を見る

ある患者が　ドアを叩きだしていた

夜中に　ドアを叩く音はひびきわたり　すぐ　職員が駆けつける

「どうしたの？」

「私の　服が　盗まれる！　誰かが　ここにいたんだ！」

職員にそう訴えるが鍵を開けて　中を確かめ

誰もいないことと　自分の服が取られていないことを知ると

ようやく納得する

「ね　誰もいないじゃない　夢でも見たの？」

職員に軽くあしらわれたが　患者は　特に気にず　自分の衣類を持って　部屋へ戻っていった

ただ　その騒ぎで　患者何人かは目を覚ましてしまったようだ

リラがいないことに気付いた　サトミも　その中にいた

曲がったことは　大嫌い

「疑り深い女だこと・・・・・・」
リュウのアジトへやってきていた　老婆に　いきなり質問をぶつけた　ミクだった

いつものことながら　そのまましておく事のできない性格で
直接　聞きにくいことも　ズバリと聞ける　うらやましい性格の人だった

リュウは　糸目でまったく　表情の変化が見えない

老婆は　お茶をすすっているが　意地悪そうな雰囲気以外は　相変わらず　変化ない

ここは　探りを入れるしかないか・・・・・
「火事の一軒・・・・・・　もしかして2人が絡んでる・・・・・？」
ミクの　言葉に　ギロリと睨むように　老婆が振り向く

「あんた　人をどこまで非情な者だと思ってるの・・・・
お互い　嫌いあってるのは分かってるけど　あんまりだよ！」
怒りをあらわにした老婆は　以前と変わらず　迫力のある言い方だった

リュウはふっとため息をついて　老婆とごにょごにょ耳打ちをした
老婆は　耳を傾け　「わかった　そうまで言うなら・・・・・・」
と　納得したようだった

「いいかい？　私たちは　何もしていないんだ・・・・
これは　非難される筋合いはないよ　　ツフュールにも言っていない
私達が　この土地を預かった時のことだったんだ

あんた　覚えていないか？
力を蓄えるために　ツフュールとあんたが　この土地をしばらく離れたことがあっただろう？」
リュウが　ようやく　事の真相を話しはじめた

老婆は　おもしろくなさそうお茶を飲みながら　黙って聞いてる
出来れば2人とも　この話は他にするつもりもなかったし　気にも止めていない風だった

「火事が起きた時　幹部の私達はその様子を近くで見ていたのよ」
リュウが言った言葉に　大きな眼を見開いたミクだった

「じゃあ、どうして！？」

「言った通りさ　何もしなかったんだ
子供と妖精が火に巻かれるのを見てたんだ」

老婆は　ゆっくりと口をはさむ
「面倒に巻き込まれたくなかったんだよ
何も利益にも損にもならない　出来事だったから」

リラを助ける話を持ちかけてきた　本人なのに　この発言には　苛

立ちを隠せないミクは
「じゃあ、　どうして今さら??」
と　老婆に向かって　強い口調で言い放つ

「・・・・だから　・・・・
死ぬ前の懺悔っていうか・・・・・・罪滅ぼしのつもりなんだ」
興味なさそうに　上を向きながら　老婆は答える

「火事で　焼け死にそうな子供たちを救うのに　力の限りで守る様子を見ていたんだ
想像つかないかもしれないが　　とてつもない　パワーで　立ち入る隙はなかったよ

あの子じゃなきゃ　防げないほどの火事だったんだ

そして　そんな　奴が　この地に居ることに　私たちは恐れを持ったんだ

リーダーも不在だし　そのまま力尽きるようになっても　誰も　困らなかったしね」
相変わらず　損得勘定と薄情さは　天下一品の老婆の言葉だった

「黙って　力尽きるのを見ていただけ・・・・・?」
ミクは　つぶやいた

一番　薄情で　汚くて　大嫌いな事だった

「でさぁ、　まだこれはあの子にも言ってないんだけど

あの時いじめてた子と　いじめられてた子

なんで　あの二人が　つるむようになったか知ってるかい？

」

もう　あまり関係ない話に　方向へ向かせるようで　老婆たちの態度にも　イラだったミクは

「分からないわ」と短く答えた

リュウと老婆は　顔を見合わせると　老婆が　また口を開いた

リュウは　やれやれと言った顔で　首を振りながら　2杯めのお茶を注いだ

「サトミって　同じ名前だったんだよ

そして　いじめられてた子は　遠くに行ってしまって

あの子のそばに居る　サトミはいじめてたリーダー格の女の子なのさ」

意地悪い　老婆がニヤリと　笑って　そう言った

ミクの全身が凍りつくような　そんな　衝撃の一言だった

疑惑

静かな朝　早朝から　患者たちは　忙しく動き回っている
消灯時間が早く　大抵の人が薬を飲まされるので夜は　闇の中のように静かだが
朝は　変わらずあわただしい

朝も　順番に薬を待っていると　職員が手渡す薬を　競うように
患者が手を出す

これが終わらないと　朝ごはんが来ないのだ

お腹ペコペコの状態で待っていることが多い

同室者の　川野さんは　薬が残ってる体でふらつきながら　水を汲み行った

職員が　用意してくれたのをのを飲めばいいのだが　そこは何かしら　プライドがあるらしい

その間に　タッチの差で　薬の順番が抜かされてしまい　かなり儀立腹のようだ

サトミは　特に意識してやったことではなく　いつのも　しょうもない　愚痴を　延々と聞いていた

川野さんは

「順番を守らないなんて・・・・・　！
薬飲むために　水を汲んできてるのを　知ってるだろう？」
と　まだ　ブツブツ言っていた

他の同室者は　相手にしなく　さっさと食堂へ行ってしまった

サトミもいい加減面倒くさくなって　いつもより　早めに　食堂へ向かう

川野さんは　根に持ちやすいタイプなので　しつこくて　苦手だ

部屋に一人きりになりそうになった時

「泥棒のくせに・・・・・」
と川野さんが　サトミに向かってつぶやいた

この言葉に　さすがに　ムッとしたサトミは　振り返り

「どういうこと？」と聞いた

川野さんは　眉間にしわを寄せ　噛みつきそうな勢いで

「あんたの姫は　夜中にコソコソ　倉庫で何か盗んでるんじゃない？
一緒に居る　あんたも　同罪だよ！」

サトミは　この言葉に　驚いた

リラのことを言っているようだが
「・・・何か見たの？」
と聞いてみた

「姫が倉庫に居るところを　見たんだ！　きっと　何か盗んでるに違いないんだ！」
と大声を出した

窓際に居た　リラは　この言葉にビックリして　川野さんとサトミを見比べる

・・・・・・見られてた・・・・・・・・・

胸が　大きく高鳴るのを感じた　後ろ姿のサトミはどんな表情をしているか　こちらから見えない

サトミは　低い声で　川野さんに
「彼女が　欲しいものなんて　ここには何もない」
そう言って　部屋を出て行ってしまった

川野さんは　言い負かさて悔しそうな顔をしているが　やがて　彼女も食堂へ向かった

部屋に取り残されたリラは　まだ　鼓動が高鳴っていた

誰にも見つからないように　十分注意していたのに・・・・・・サトミはどう思っただろう・・・・？
何か　すでに　勘づいてるのではないか・・・・・？

モパからの　十分なパワーを早期に貰ったリラは　以前のようなパ

ワーを得ていた

それを隠すように最近は　力を封じている

外的な変化は分からないハズだが　サトミと　このままあっさり別れられるとも　思えなかった

そして　リラを縛り付けているノベルト達とも　離れられるのか・・・

そうこうしているうちに　サトミが　食事から戻ってきた

そして　ベットに座り　リラに話しかける

「今日は　天気も良いし　午後から　中庭に行かない？

職員にお願いしてきたんだけど　リラも行くよね」

最後の言葉は　リラをまっすぐ見つめ　有無を言わさぬ様子だった

リラは　黙って　頷くことしかできなかった

悲しみの雨

病院一階の長い廊下

午後から　雲行きもどんどん怪しくなったが　なんとか　天気は
もっていた

ゆっくりと　患者3人ほどが　中庭に向かって　進んでいた

途中で　廊下に寝転がっていた　他の妖精が　患者と一緒に　リラ
がやってきたことに気付く

飛び起きて　背筋を正し　通り過ぎるまで　凝視していたが　やが
て　仲間に知らせ

中庭までの道のりは　いつものように　人垣が出来ていた

リラは　浮かない表情で　目線を落としている

いつもとなんら　変わりない姿に見えたが　どこか　神秘的で　近
寄りがたい雰囲気を放っていた

人垣に紛れ　老婆も　その姿を見ていた

馬鹿だね・・・・・　もう　迂闊にみんなの前に現れるのは　危険
だって言っておいたのに・・・・
パワーを蓄えたこと　勘づかれても知らないよ・・・・

老婆は　そう思いながら　リラを見送る

通り過ぎ様　ちらっと目があったリラは　一瞬助けを求めるような
目つきだった

老婆は　隣にいる　若い女の背中を見て
何か　勘づかれたかな・・・・・・・・と　少し　心配になった

若い女は　リラから離れることなく　神経を　集中させているようだった

リラは　パワーを抑え込むのに必死だった

人垣は　今日も　美しい姫の様子を見ようと　次々と人が集まっていて　膨らんでいた

今日は　リーダー会議があったので　重役たちはほとんどいなかったノベルトもそうで　姿がない

突然の姫の登場に　一般的に下っ端と呼ばれる者たちは　我こそはと　前に出ようとしている

老婆は　止める者もいなさそうなので
暴動が起きてもおかしくない・・・・・・と　冷やかな目で　眺めていた

次第に　口々に　「姫・・・姫！」と　声をかけるものも出始めた

リラは　少し困った顔で　振り向くと　大きな歓声が上がり　妖精たちは　ますますざわめき始めた

「ったく　馬鹿だね」思わず老婆は　つぶやいていた

サトミには　他の妖精の言葉は聞こえてこないが　姿は見えているので

人垣が出来てい居いること　リラが注目されてることも　分かっていた

今までは　守るようにしていたが　今日は　手を出す素振りはない

後ろ姿が　怒っているような　試しているようにも見える

花園からは　吸収するパワーはもう　必要なくなってしまうほど力を得たリラは

ノベルト達が　戻って来ないうちに　今すぐに引き上げたかった

老婆もはたから見ていて　ヒヤヒヤしていた

隠しているからと言って　観察力の鋭いものから見たら　リラの異変に気付くかもしれない

助けだす前に　今ばれたら　すべての力を奪い取られ　水の泡になっしまう

低級な　妖精たちは　徐々にリラに近づき　手を伸ばせば　触れら

れるほどに近寄っていた

ある者が　手を出しかけた時　　大きな声が響いた

「いい加減にしな！！」

老婆だった

迫力のある声に　思わず　その場にいた者が　凍りつく

声の主を確認すると　鬼の様な形相で　睨んでいる老婆を見て

みんな　驚いて　　さーっと　引き上げていった

「山の猿じゃあるまいし　みっともないんだよ！」

この言葉で　下っ端達は　肩をすくめて　小さくなっていった

リラも　驚いたが　一瞬の隙をついて　魔法を使う

すると　突然　空から　小さな雨粒が降ってきた

患者たちは　空を見上げ　同じように　　そこにいた　妖精たちも

空を見上げる

雨は　次第に大粒の雨に変わった

慌てて　みんな　中庭から　建物の中へ移動する

温室のようになっているが　雨風も強くなってきたので　引き上げることにしたのだ

廊下と　温室のつなぎ目に居た　サトミは　すっかり　ズブ濡れになっている

「サトミちゃん　大変！　風邪ひいちゃうわ」

職員から　背中を押されて　　ようやく　廊下に戻ったサトミだった

頭から　ずぶぬれだが　　構う様子もなく　佇んでる

リラが魔法を使ったことは　老婆以外は　知られずに済んだ

しかし　サトミは　何かを感じていたのかもしれない

雨のせいか　それとも　涙だったのか

じっと　リラを見つめるサトミの目から　大粒の涙が　落ちていくように見えた

力の源

「センティ！　センティ！」
春が　がっちり　センバティを抱きしめ　頬ずりしている

モパは　自分の部屋で　しばらく横になっていた

「ったく　加減てものを　考えねぇから・・・・・」
センバティは　横目で　モパの部屋を見ながら　そう呟いていた

力の限り　連日リラにパワーを送り続けたモパは　自分のエネルギーも送りこんでいたため
軽い　栄養失調状態になっていたのだった

いつになく　ぐったりとしている

様子を見に来た　センバティが　春に見つかり　さっきから　ずっと　遊ぶことになってる

幸い　センバティは癒しの能力を持っているので
春から得たパワーを　少しづつ　モパに与えていた

柔らかそうな長めの前髪が揺れて　　目を閉じていると長いまつ毛がより　強調される
女の子のような　きめの細かい肌と　美しさだった

うっっすら目を開くと　センバティと目が合い　センバティは一瞬
どきっとした

きれいな　薄い口から　聞こえた第一声は
「・・・・・・おとっつぁん　すまないねぇ・・・・・ゴホゴホ」

「・・・・・・・・・・」

「苦労かけるねぇ　　ゴホゴホ」

「・・・・・・・・・・」

センバティは　たまに見かける　時代劇の貧しい家庭の再現に　どうしたらいいのか分からず
固まっていたが　律儀に

「それは　言わない約束だよ・・・・・」
と　答えた

それを聞くと　モパはニヤリと笑った

こんなバカなやり取りをしてる場合ではないほど弱っていた　モパだったが

さすが　タフなのか　ある程度　回復すると　自力で　パワーを回収し始めていた

もちろん　この幸せ家族の　質の良いパワーあってこそのことだ
血色の良くなっていくモパに　センバティは　聞いてみた
「なぁ　モパ　さっき　ユイさんが　俺のこと　見えなくて素通りしていったぜ」
「あぁ・・・・・」
「どんどん　俺たちの存在が　なくなりつつあるんだな」
「ここ最近　かなりの力を　貰ってしまったからな・・・・・」
モパは悲しそうに笑う
「時期に　春も　見えなくなるんだろうな」
と　つぶやく

まぁ　いずれ　来ることだからなぁ・・・・と　センバティも答えたが
この家族と別れるのは　モパと同じく寂しいと感じていた
ふと　窓際を見ると　ミクが　こちらをうかがって　垣根から　手招きしているのが見えた
とたんに　満面の笑顔で　手を振り返してるセンバティを見て
モパは　楽しそうに　笑っていた

長い放浪の生活で　別れは　慣れているのに

この仲間と　幸せな家族とのつながりは　失いたくないと　モパは

初めて心からそう望んでいた

作戦会議

モパは幸せそうなセンバティの後ろを見ながら　思わず微笑んでいた

モパに送ってくれたパワーは　すでに　ミクを見た瞬間から　元気に回復してしまったようだ

相変わらずの片思いだが　純真で楽しそうで　うらやましいほどだ

手をずっと振り続けているので　ミクも　ちょっと　困った顔をしている

どうやら　作戦会議のために　ミクのアジトへ来るよう　促してるようだ

そこそこ回復したモパも　久しぶりに　家から出ることになった

ミクの白亜のアジトに招かれると　モパを見て　ミクが　呆れた顔をしていた

やはり　力の喪失は見ていても分かるくらいだった

「呆れた・・・・・」

素直な一言に　モパも苦笑しながら

「面目ない・・・・・」と　答える

ここで　ミクにも時代劇風返しをしたら　冷たくあしらわれそうだ

ったので　それは　止めておいた

「センバティが駆けつけなかったら　危なかったんじゃない？？」

「正直　そうだね　　花畑が見えた気がしたよ」

ププっと　センバティは笑ったが

「冗談じゃないわ　」

と　ミクは　怒っていた

「彼女助ける前に　あなたがいなくなってしまったら　助けることも出来ないじゃない

もっと　気をつけなさいね」

ときどき　ミクは　友人と言うより　母のような姉の様な存在に見える

分かりましたと　答えると

モパは　更にパワーを蓄えることに意識し　センバティからも　少し　力を譲ってもらう

白亜のアジトは　意識が集中しやすく　体の隅々まで　気を高めるのに適していた

短時間で　かなりの力を取り戻すことができた

「それで・・・・　助け出す手段のことなんだけど　何か提案はある？」

ミクが　訊ねると

「リラには　出来る限りの力を送ったから　捕まっている場所から
何か　まわりの気を反らすことが出来たら
隙をついて　逃げる・・・・・・って言うのが理想かな

戦いは　できるだけ避けたい・・・・
捕らえてるやつらは　話は分かりあえないと思うし　戦いも避けたいからね」
モパが答えると

「まぁ・・・そうだけど
何か　方法を思い付いてるの？」

「以前渡した　ピアスは起爆できる
遠隔操作で　奴らが集まっている時に　爆発させようかと・・・・・
被害は　最小限に抑えるつもりだけど　ボヤ的なものでは　時間は稼げないし
場所とタイミングが問題だな・・・・」

センバティは　びっくりしながら
「それって　宣戦布告じゃないか？？
思いっきり　テロみたいだけど？？」

モパは　センバティを見て
「やっぱり　そう思うか？」
と　答えた

ミクは　おでこを押さえて
「・・・・・・無鉄砲で　何も　考えてなかったのね・・・・・」
と　つぶやいた

その言葉に　照れたように　笑うモパは　悪びれた様子はない

しかし　その作戦は　一人でも決行するつもりでいたことを　ミクとセンバティは勘づいていた

仲間を巻きこまないつもりなんだろうと・・・・・

「きっかけがあれば　リラは　自力で抜け出せる力を得たんだ

何かで　隙をつけることを考えてみたんだけどね」

モパも　朦朧とする意識の中で　考えたので　良策だとは思っていなかった

若しくはモパが潜入する方法も考えていたが　簡単には忍びこめないだろうと・・・・

「手助けをする者が　彼女の近くに居ないと危険だな

潜入出来ればいいんだけど　・・・・・・」

と　モパが　言うと

3人は　黙って　考え込んでいた

3人で考えても　なかなか方法は思いつかない

ミクが　突然

「昔の仲間ってことで　私が　リラを尋ねるってのはどうかしら？」

と提案した

センバティは

「それは　ダメだ！」と　力強く言い切る

2人は　その剣幕に　驚いたが　モパも
「危険が多すぎる・・・・君にまで危険が及ぶかもしれない」と
諭した

「女仲間だと思えば　向こうも　油断するんじゃない？」

「リラに関係のある者が現れば　警戒するかもしれない　その方法
は　危険だよ」

ミクの申し出はありがたかったが　リラとミクまで捕まってしまう
確率が高い
モパは　仲間を巻きこまない方法を　真剣に模索している

その時　リラのアジトに　交信をするものが現れた
「お客みたいね」
ミクが立ち上がると入り口が開いた

ゆっくりと　姿を現したのは　ツフュールと　老婆と見知らぬ　若
いきれいな女性だった

見たことがない　新顔だったので　3人は若い女性にに注目している

心なしか　ツフュールがひきつっている顔をしている

ミクはツフュールに近寄り「どなた？」と　問うと

つり目の切れ長の目を細めて　女性はほほ笑んだ

「私が　潜入するわ　大丈夫　信用して」
美しい女性は　長い髪を一つで大きく束ね　茶色い髪を　なびかせている
涼しい目元が　自信ありげで　余裕すら感じる
どことなくミクに似ているような・・・・
どこか　芯から強さを感じる雰囲気の人だった
彼女の申し出に　センバティは思わず
「どうしてあなたが??　危険なことなんだ!」と助言すると
彼女は　ゆっくり　センバティの方へ向かって　歩いていく
「心配してくれるの?」
余裕の口元から　にっこりと　きれいな笑顔を見せ
センバティに　細く　長い腕をからめ　抱きついた
センバティは　驚きで硬直している
顔を　真っ赤にして　立ちすくんでいる
ミクも　モパも　驚きで　この2人から　目を離せなくなってしまった
老婆は　声をあげて　笑っている
ツフュールは渋い顔で　若い女の背中を見ながら　ため息をついた
「あ・・!あの・・・・・????」
センバティは　抱きつかれながらも　ミクの視線を気にして　女性を　引き離そうとしてみる

背の高いセンバティと　女性は　自然に目線が合う

その時　センバティは不思議な感じに包まれた

どこかで会ったことがあるような・・・・・・？

しばし　見つめあう2人に　ドキドキしていたのは　モパとミクだった

もしかして　恋が芽生えてしまったかも？とも思っていた

しかし　センバティが　首をかしげて　言った一言で　この思いは
　拭き飛んだ

まっすぐに若い女性を見つめる目つきは　真剣そのものだった

「・・・・リュウ？」

この疑問に　女は　にっこりわらい

「ふふっ　気付いたようね」と　目を細めて笑った

その笑顔をは　以前のリュウと一緒で　ダブって見えた

女豹と言われた女

リュウは　嬉しそうに笑うと　またギュッとセンバティに抱きついた
背の高いリュウは　スタイルも抜群で　２人は　お似合いに見える
センバティは焦りながら　リュウを引き放そうとするが　リュウは
面白がって離れない
幸せそうに　ピッタリ寄り添っている
「どう？　若い時の私　捨てたもんじゃないだろう？
心かわりしそう？」
余裕の笑顔で　色っぽく囁く

「何言ってんだよ！　とにかく　離れてくれ
一体　どうしたっていうんだ？」
慣れない色気に　本気で焦りながら　リュウを制止する

みんなが知ってるリュウとは　かけ離れた風貌で　正直戸惑いを隠
せない

長い手足に　長身の抜群のスタイル　腰上で　ベルトをしている
ため　さらに　スタイルが良く見える
つややかな髪は　上でまとめられて　スッキリし印象だ
切れ長の目元が　いかにも　男受けする感じで　でも　近寄りがた
いオーラをまとっている

「リュウは　チビだったぜ・・・・
年取ると　そんなに　身長縮むんだな」

センバティの発言に　ツフュールも老婆も　大笑いしている

リュウは
「あんたも　いずれそうなるんだよ
これでも　私は女豹って言われてて　すごい　モテたんだからね」
胸をはって　見上げながら答えた

ミクは　驚きの表情のまま
「でも　どうして？」

余裕の表情のまま
「私たちも　誰かが　潜入する方がいいと思っていたのさ
脱走を　手引きする者と　あそこのリーダーの気を反らせる者

モパは　一人でやろうとしてるみたいだけど
人出があったほうが　確実に実行できるだろう？」
リュウが答える
喋り方は以前と変わらない

ツフュールは　ようやく口を開く
「気をそらせる役目に　リュウを選んだ
それで　パワーを　与え　一時的に若返らせている」

3人は　驚愕の表情になる

リュウと老婆は　面白そうに　反応を見ている

老婆は　付け加え
「あそこのリーダーは　女にだらしないんだ

リュウが誘ってくれれば　姫から　気をそらせるだろう？

リュウは　きっと上手く　手玉に取ってくれるよ」

と　自信ありげに伝えた

そして　チラリとミクを見て

「あんたは　姫の代わりになりかねない

ノベルトが本気になるかもしれないし　ここの大事なリーダーだ

それに　男の扱いが　上手いとはいえないだろうしね」と　言った

ミクは　ちょっと　ムッとしたが

老婆のうことも納得できる部分もあるので　それには　反論しなかった

ツフュールも同じように考えていたようで　この手段を選んだのだろう

チラリと　リュウを見ると　やはり　センバティにべったりくっついている

本来の目的を見失いがちに見えて　しょうがなかった・・・・・

「若いって　いいね！　この姿に　戻れるなんて　長生きした甲斐があったよ

気持ちも　若返りそう

私は　ずっと　センバティが気に入っていたんだ〜」
そう言いながら　頬にキスをしている

ビックリして　大声を出すセンバティの声が　アジト中に　響き渡った

モパは頼もしい仲間を　横目に　すっかり　傍観者になっていた

喰えない奴

ツフュールが　突然　大きな咳払いをした

思わず　リュウの変動にすっかり気を取られていたが　それで我に帰る

ゆっくりと喋り出すと　みんなが耳を傾けた

「ここで　我々は　リラを救い出す仲間として行動する

お互い　手の内を明かさないか？

持っている情報は　すべて　共通のものとしよう」

この提案に　その場に居たものは　真剣な表情へもどる

まず・・・・ツフュールが続ける

「リラは　１０数年前に　この土地でサトミという人間に出会った

いじめられていた子供が火を放ち　その火事を食い止めるために

すべてのパワーを出し切った

そこで　記憶をうしなっていた

ほとぼりが冷めるころは　そのサトミが　リラを離さなくなっていて

居なくなったリラを探すために　モパはずっと情報を集めていた・・・・だな？」

モパに向かっての最後は同意を求める

モパは　黙ってうなずく

「リラが回復したのは　そのサトミのパワーを長く補給していたからだ

しかし　記憶が回復し　リラが離れようとすると　サトミは発狂し

たように暴れ　リストカットをするらしい」

老婆は

「本気じゃないんだよ　甘えてるだけじゃないか？」

と　言う

「そうかもしれないけど　一応　命を助けてくれた者への　情っていうか・・・・・

長い間一緒に居たし　サトミには　もう　家族も愛想をつかしていて　リラしか話す人もいないそうだ」

と　モパが付け加える

リュウは　まだ　センバティの隣にピッタリ座ってるが　じっと話を聞いていた

ミクは　ちょっと　間をおいて　リュウと老婆を見る

2人は　軽く　眉をあげどうぞ　と言わんばかりに　目を伏せる

「それと　これは　最近聞いた話だけど

火事のあった時は　ツフュールと私が　この土地を開けていた時のことだったらしいの

その時　留守を任されたそこに居る2人からの話だけど・・・・・

リラが火事をとめてた時　再びその場に迎えに現れた人間は　いじめていた方の子だったらしいの・・・・」

モパは　難しい表情になる

「サトミって女の子が2人いて　今一緒に居るサトミは　いじめられた方を名乗ってるそうよ・・・」

頭を押さえたモパだったが

「・・・・・その時の記憶が飛んでるのは　そのサトミってこの意思が強いんだろうな・・・・

いじめてた方だと知ったら　リラがいなくなってしまうんじゃないかと思ってるんだろう・・・」

意外な真実に　サトミのリラに対する執着の強さを知った

ミクは

「このこと　リラにも伝えてくれる？ショックを受けるだろうけど知っておく必要があると思うの」

と　頼んだ

老婆は　手を軽くあげ

「彼女の力は　ほぼ　元通りだ

今までのような頻回な交信は危険だよ

この間も　そのサトミって子に　何かしら　気付かれてる様子だったし・・・・

ノベルト達も　油断は　禁物だから　慎重にしてほしいね」

と　付け加える

モパは　「そうか・・・・」と答える

老婆は　モパを　ずっと見つめたまま

「あんた・・・・・　ピアスを起爆させるっていってたけど　あながち冗談でもないんだろう？

当然のことだろうけど・・・・私達に怒りを持ってるんだろうね・・・」
と伺うような目つきで　聞いた
モパは　フッと失笑すると
「当然だろう？」
と　言った
「コソコソ　助け出して　終わりじゃ　気が済まない・・・
けれど　あなたが　その場所を去った後で　やるつもりだった」
さらりと　モパが答えた
センバティはその発言に　驚く
人のよさそうな　モパがそんな大胆なことを考えてたなんて思ってもみなかった
「一人で　立ち向かうには　無鉄砲で馬鹿だからね・・・・・
まぁ　何かしら　報復をしようと思っている」
と　今度は　全員に告げた
センバティ以外は驚いた様子はなかった
「それで　どうするんだ？」
ツフュールは手の内を明かせと　モパに詰め寄る
しばらく　沈黙が続いた
「・・・・・・・
リラから得た　パワーを貯めている　倉庫みたいなところがあるは

ずだ・・・・」

老婆は　黙って　頷く

「良質のパワーを　そう簡単に使わないと　思っていたよ

それも　かなりの貯蓄だと考えている

そこを開放して　わたしが　そのパワーを回収する

莫大な力だと思う・・・・失敗すれば　わたしが消えてなくなるほどの・・・・

しかし　それを自由に扱えたら・・・・・

再びこの土地に　パワーを変換し　ここを拠点として復活出来るんじゃないかと考えてる・・・」

途方もない　話に　全員　目を丸くした

そんなことが　可能なのか？

モパには　そんな力が　あるのか？

だれもがそう思ったが　若く　美しいモパは　底の見えない存在だ

敵には　回したくないと・・・誰もが思った

かすかに　ほほ笑んでるモパは　今までと違って　妖精と言うより

悪魔と言った方がしっくりくる

不敵な笑顔を浮かべていた

尻に敷かれるモパ

ミクは　モパを見ながら腕を組んで訊ねる
「それって　考えていた作戦？　　それとも　希望？　実現できることなの？」
ちょっと　怒ってる風にも見えた

「実現可能な　作戦だよ・・・・」
モパは答える

モパの回答に　即座にミクが返す

「あなた　そんなこと考えてたなんて　一言も云わなかったじゃない！？
それって　私達を仲間って認識してなかったってこと？」
明らかに　怒っているミクを宥めるのはいない

どんなにモパが底の見えないパワーの持ち主でも　ミクは関係ないみたいだ

モパは　ちょっと　驚いて　素直に謝っているし

リュウは　センバティの左肩に顎を乗せて　傍観しながら
「まるで　尻に敷かれてる旦那だね・・・・・」とつぶやく

センバティも　思わず頷くが
「違う！　」と　すかさず否定

「お似合いの2人だね　すでに　出来てるんじゃない？」
相変わらず　からかうようなリュウの発言に　今度は青ざめる
「・・・・まさか・・・・！」
2人を　凝視するが　確かに　尻に敷かれてるようにしか見えない
さっきの　悪魔風の底の知れない男に見えたモパは　酔っぱらって
帰ってきた若い夫とダブった
小さな声だったが　ミクには聞こえていたようで
「そこ！　無駄口聞かないの！」と　注意する
ミクは　全くモパのことを知っていなかったこと　彼に信用されて
いなかったことが
悔しくて　しょうがなった
老婆は　ポツリと
「可愛さ余って・・・・てやつかな・・・・」とつぶやく
ミクにそれも聞こえていて　ギロっと睨まれ　それ以降は　口をつ
ぐんだ
ミクは　怒ってる表情のまま　モパを　見つめる
モパは　怒ってるミクって一層きれいだなっと　これも聞かれてい
たら　怒られそうなことを考えてた
「他には・・・・・・　何か　考えてることは？」
少し　怒りのトーンを押さえて聞く

ちょっと自分でも　冷静にならなきゃいけないと　整理をつけたようだ

それでも　ミクの迫力に押されながら　　モパはゆっくりと口を開く

「これは　まだ　未確認だけど・・・・思いついたことがある」

みんなが　興味深そうに耳を傾ける

「サトミって人間の足どめも　必要かと思うんだ

彼女が騒げば　他の妖精にも伝わる危険性もある・・・・・

そこで　もうひとりのサトミを名乗って　おびき出そうかと思うんだ」

モパがそう言うと

みんな　驚きを隠せなかった

「そんなこと出来るのか？」

「いじめられてたほうの　サトミねぇ・・・・

消息は　掴めるのか？　　それに　見つけたとしても　こちらから　接触出来るのか？」

即座に　みんな　意見を交換し合う

モパは

「時間も限られてるし　この作戦に　本物のサトミが協力できる人

かも分からない・・・
代理を　立てようと思うんだ
それで　今一緒に住んでる　ユイに頼もうと思うんだが　どうかな？」

この近所で　春の御蔭で有名になってる　ユイの穏やかな顔がみんなの脳裏に浮かんだ

「ユイさんに・・・・・・？
無理ないか・・・・・　一番　ミッションに不向きな人だぜ・・・・・」
良く知ってる　センバティが　最初に口を開く

モパも　同じく　ユイを思い浮かべて　ちょっと　考えてる風だった
「・・・・そうだけど　彼女しかいないんだ・・・・・」
これには　自信のなさそうな　モパだった

会議は　それから　老婆が　今いるアジトを引き上げるまで
何度か　リュウ　とツフュール　センバティが　訪問することにした
荷物運びとご機嫌伺いという　名目で

訪問には　あらかじめ　ノベルトに了解を得る必要があるが
老婆はそれなりの権力と信用があるため　そこは問題ないだろう
それに紛れて　モパが潜入する・・・・・・・・
ミクは　この土地を守るので待機することとなった
ユイには　サトミを名乗って手伝ってもらうようにモパに託した
（まだ　未許可だが）

待機のミクは　面白くなさそうな顔だが　仕方ないと　自分でも納得した

リュウは　嬉しそうに作戦を楽しんでる
そんな　リュウを横目に　ツフュールが
「楽しそうだな・・・・・しかし　パワーは無限じゃないんだ
実行まで時間もあることだし　一時　気を　解放するぞ」
大きな左手を　リュウに向けて広げると

ゆっくりと　リュウの姿が　年老いていく

寄り添っていたセンバティとの身長差が歴然になって　まるで　大木にはりつく　コアラ状態だ

「あぁ・・・・せっかく　調子よく楽しんでたのに・・・・」
心底残念そうに　リュウがつぶやく

その変貌と　発言にセンバティが
「楽しんじゃ　ダメだろう??」と言うと

見上げたまま　細い糸目で
「若い私はどうだった？　言い寄られて悪気はしなかっただろう？」
と　聞いてくる

センバティは　眉をひそめて
「スタイルの良いオカマに言い寄られてる気分だったよ」
と疲れたように言うと

これには　リュウも
「あんた　ひどいこと言うね！」と怒っていた

みんなが　それに　声をあげて笑っている

作戦実行まで2週間　いよいよ　救出に向けて　動き出したモパ達だった

やっぱり　女好き

病院にいるリラは再び結界を張って　他の者を寄せ付けなくした
サトミもとくにあれから　変った様子は見せていない
退屈な　時間が過ぎるだけの毎日を過ごし　脱走できる日を　心待ちに待つリラだった
一方　老婆は珍しくノベルトに声をかけられた
廊下をプラプラ散歩してるときに　後ろから　声をかけられ　いつもの中庭へ誘われた
長身で　長い脚を組み　老婆にノベルトは礼を言った
「この間は　姫を助けてくれたそうですね　ありがとう」
この前の中庭へ現れた時　暴動が起きそうになったことの話しらしい
老婆は　すでに忘れかけていた話のため　適当に相槌をうつ
ノベルトは　軽く
「もうすぐ　ここを去るそうですが　もう　会議には出席しないんですか？」
と世間話を続ける
老婆は　失笑し
「私の出来ることは　もうないからね　出席する意味がないよ」
と　答える

「あなたは　ここに長く　力も強い
良いアドバイスをしてくれるし　意味がないということは　ないです・・・・・

それから・・・・
姫は　この間の一件以来　姿を現さないけど　やはりショックが大きかったようですね
パワーの補充もままならなかったのではないかと　心配してるんですが」

どうやら　リラの様子が気になって仕方ないようだ

老婆は　いい口実に呼ばれたもんだと思いながら
「あの時　わずかだけどパワーは補充していたから　死ぬことはないよ」
と　嘘をついた

「そうれならいいけど・・・・・」
安心したノベルトは笑顔を見せる

すっかり信頼されてる老婆は　なんだかおかしくなってきた

「あんたは　ずいぶん　姫に　ご執心だね
他にも　いっぱい彼女いるだろうに　なんであの子に　そこまで・・・・」

ノベルトは　照れ隠すように
「彼女は　特別です
あんなに美しい人はそういないでしょう

私だけでなく　ここにいるものすべてがそう思ってる」

ベタぼれしてる　間抜けな返事に　老婆は　突っ込む気もなくなった

・・・・もっと　狡猾でずるがしこい奴と思ってたけど　単なる女好きか・・・・・・・

こんなやつと一緒に　ここを守ってるつもりだったのが　馬鹿らしいね・・・

と　老婆は密かに感じていた

「そういえば・・・・・」

いい口実を　思い出す

「近くに　私を訪ねて昔の仲間がやってくる予定なんだ

3人ほど

荷物の整理や　お別れのためにここに呼びたいんだけど　許可をくれるかい？」

唐突な　老婆の言葉に　驚いた顔をしたが　すぐに

「昔の仲間ですか？　いいですよ」

と　答える

老婆は　ノベルトにかなり信用されているようだ

「客来たら　こちらからも　挨拶させるよ

何度か　足を運んでもらう予定なんだ」

と　続けてそう言う

ちょっと　ノベルトの顔が曇った

閉鎖的な所なので　あまり外部の接触を好まないのだ

ノベルトが喋り出す前に
「一人　あんたくらいの年の女が来るよ
姫までといかなくても　地元じゃ　有名な美人だ
まぁ　あんたの好みに合うかは分からないけど　ここを取り仕切る
あんたに興味を持ってたよ
なにか　アドバイスあったら　仲よくしてあげてください」
と　付け加える

単純で女好きにのノベルトは　大いに　照れて　老婆の要求を受け入れた

そんな様子に　密かに　ほほ笑む老婆だった

・・・・・もう少しだよ　　姫　　頑張りな・・・・・・・・

脱出できる日を待ち続ける　リラにむかって　老婆は　こころで
そう呟いていた

タイプ

ノベルトを誘惑するために　リュウは今日も張り切っている
久々に自分の美貌を生かすチャンスが来たと　化粧にも力が入ってる
美人を通り越して　迫力美人になってしまい　パリ・コレに出てきそうな洗練された美女になっている
スタイルも抜群に良いのだが　他のものを近づけさせない雰囲気になっていた
嬉しそうにしている　リュウに　あちらの様子を伝えに来た老婆が　呆れた顔でそれを眺めている
「本来の目的を　完全に見失ったわね
昔から　そうだったけど　自分が大好きな人だからね・・・・・・・・・」
地獄耳のリュウは
「あら　ちゃんと覚えてるわよ
でも　私の任務は　ノベルトを引きつけることだろう？」
と　すかさず返答する
老婆は　諦めた様子で　頷く
そこへ　お気に入りのセンバティが様子を見にやってきた
振り向いたリュウの顔を見て　大きな声を上げる

「うわ！　リュウ　化粧濃すぎだろ？？」

「一段と　美しくなっただろう？」
リュウは　ひるまず笑顔で言う

一歩後から　やってきたツフュールも　リュウの顔を見て　愕然とした表情になる
「リュウ　遊びじゃないんだぞ
このところ　若くなったからって　はしゃぎすぎじゃないか？」

リュウは　ぷうっと頬を膨らませて
「なんて言い方だい？　それが昔愛した女に言うセリフ？
あ！もしかして　やきもち・・・・・？」
からかうような目つきで　ツフュールを見ると

ゲッソリした顔をして　ツフュールは
「やめてくれ・・・・・・」と言った

センバティは　しばらく　新事実に驚愕の表情になっていたが　ようやく落ち着きを取り戻し

ある疑問を口に出した

「ノベルトって　モパの彼女にかなり執着してるんだろう？
それって　あいつの好みだからじゃないか？

リラと　リュウは　見た目　共通点あんのか？」

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・」

3人は　リラの可愛らしい姿を思い浮かべる
そして　化粧で　可憐といより　スタイリッシュで　クールなリュウを見る

「・・・・やはり　無理があるな」

「・・・・・うっかりしてたよ　やつの好みは　儚げな可愛らしい女がいいみたいだ
リュウ　すまないね　その気にさせといて」

さっさと　予定を変更しようとする　老婆とツフュールに　リュウは
「あんたたち　あんまりだよ！
分かった！　この　化粧は止めて　清楚にいくから　このままでいさせておくれよ～」
若い姿を取り戻したリュウは　拝むように　懇願している

見かねて　センバティが
「目元の印象を変えたらどうかな？
つり目じゃなく　たれ目に出来る？　ツフュール」
と提案すると

仏頂面のまま　重々しい口調で
「私は　魔法使いではない・・・・・」
と　ツフュールに即却下されてしまった

リュウも　「ひどい！」と　泣きまねをしてセンバティにやつあたりしてきた

いつも　この連中は　緊張感が持てないようだ

一方　　モパは　救い出す手段として　人間のユイに協力を求めこの計画について　説明をしている最中だった

タイプ（後書き）

更新がなかなか出来ずすみません

完結まで　もう少し！

それまで　気長に見守ってください

涙

久々に　ユイと話をしている

前は　はるの昼寝中に　家族の話を聞いたりして
よくユイの話し相手になっていたが　最近は　そんな時間さえ持てなかった

自分のことで　精いっぱいだったが　ユイは　話しかけるといつもと変わらず
優しそうな笑顔を浮かべて
自分用に　紅茶を入れて　飲まないのは　分かっているのに　モパの分も用意してくれる

なんだか　モパが　ちょっと　疲れてるように見えて
元気がなかったので　気になっていたのだけど　モパから切り出すまで　じっと待っていた

そのうち　ミクも現れて　同席することになった

ミクは　はるの様子を気にしていたが　ぐっすり眠っているので
ほっとしているようだった

ミクを初めて見たユイは　急に　目をキラキラさせて

「なんて　きれいな人なの・・・・・」
と　素直に　感動していた

「とっても　お似合いよ
モパの彼女ね・・・・・・・式の相談？」
などと　ボケをかましてくれた

ミクは　悪気はしなかったみたいで　否定はしなかったが
モパは　困った顔で「違う　違う」と　答えていた

ここ数週間で明らかになった　リラのこと　捕らわれて　助けが必要なこと　捕らえている者たちのことを
なるべく　簡潔に　分かりやすく説明をした

余計な　情報を伝えなかったことが　ユイにとって
モパの心情を　考えさせられて　途中から　大きな瞳から　大粒の涙がこぼれ出した

これには　ミクもモパも　かなりの驚きを受けた

良く知らない他人のことで　こんなに　涙を流し　悲しんでる人間を　ミクは初めてみた

でも　心底　モパのことを心配している人間なんだということが分かった
モパが　ユイを信用して　協力を得ようとしているのにも　なんとなく　理解できた

モパは困った顔をして　ユイに　声をかけているが　涙は　一向に
ひかない

声を　詰まらせながら
「ごめんなさい・・・・
つらいのは　モパや彼女なのに・・・・・・・

なんだか　出産してから　嫌に　涙もろいのもあるんだけど
モパのことを思ったら　胸が張り裂けそうで・・・・・・・・・」
ぽろぽろと　頬を涙が伝っている

「わたしに・・・・・・・・・」

「わたしに出来ることがあったら　何でも言ってね
頼りないけど　力に　なるから」
ユイは目頭を押さえながら　そう言ってくれた

モパと　ミクはチラリと目を合わせ
目を　真っ赤にしたユイを　まっすぐ見つめ　協力を求めた

「ユイは　そう言ってくれると　信じてたよ」
優しい　モパの声でそう言われると
ユイの　引きかけた　涙が　また　どっと　あふれ出した

手紙

まだ目元が赤い　ユイがたいぶ　落ち着きを取り戻したころ
「それで　私は何をすればいいの？」
と　聞いてきた

モパは　ゆっくりと　話し始めた
「まず　ユイには　「サトミ」を名乗ってもらいたいんだ
いじめられてた方の　「サトミ」をね」

ユイは　驚いた顔をしていたが　モパの話を聞く

「直接　顔を合わせたら　きっと　バレてしまうから
精神科に　入院している　サトミには　電話で連絡を取ろうとおもう
若しくは　手紙だ・・・・・」

ユイは
「そんなことできるの？」
と　精神病院に隔離されてる　人間に　外部の人が連絡をとることが可能なのか聞いてみた

「入院中のサトミは　任意入院という形になってる
監視は強くないから　もちろん　通信手段も制限はされていないと思う

稀に　迷惑行為になる場合は　精神科の職員が付き添いで
決められた時間に　電話したりするそうだけど
そこは　問題ないと思うんだ」
モパのリサーチは　ユイですら知らなかったことも多かった

ミクは
「ユイさんなら　声も若いし
本当のサトミと区別はつかないと思うの
だって　もう１０年前から　お互い連絡は　取っていないと思うし」
と付け加えると

ユイは　ちょと嬉しそうな顔をしていた

「最初は　手紙で連絡をとり
それが上手くいけば　電話をするという方向で行こうかと思うんだ
いきなり電話だと　本人も　心の準備が出来ていなくて　出ないかもしれないしね」

ユイもそうね・・・と　納得した

「其れだけ？」

モパと　ミクは　キョトンした顔をする

「私に出来ることは　それだけなのかな？」
ユイは　２人に見つめられて　ちょっと気まずそうな顔をする
モパ達が　命をかけて戦うのに　ユイは　もっと出来ることがあるんじゃないかといいたかったのだ

ミクは　優しい笑顔で
「あなたが　そう言ってくれるだけで十分です
他に　助けが必要になったらお願いします」
と言った

モパも
「この任務もとっても重要なんだ
ユイにしか頼めないことだから　慎重に進めていこう」
と　声をかける

なんだか　少しさみしい気もしたが
ユイはわかったわと答える

そして　書斎から　早速シンプルなピンクの封筒を取り出し
サトミに　手紙を書くことにした

まずは　ここからだ

真っ白い便箋を見つめながら　３人は　真剣そのものだった

潜入前夜

いよいよ　明日　リラの捕らわれているアジトへ　ツフュール・リュウ・センバティの3人が潜入することになった

とりあえず　様子見ということで　敵地を知るのがメインだ

いつになく　真剣な表情で話し合いが続いている

把握してくる　内容をみんなで細かに打ち合わせしているのだ

ミクとツフュールは師弟だけあって　息もピッタリ　意見もほぼ一緒だ

綿密で慎重な意見が多く　なおかつ繊細で隙がない

挨拶から　誰が　どういう風に話を切り出すか　どこに注意をおくか　細かに打ち合わせをする

ハッキリとした役割分担をもらい　センバティ達も　一言も漏らさないよう耳を傾ける

それから　リーダーとして残留するミクにも　ツフュールはさらに細かく　指示を出していた

分かりきってることのようで　ミクはちょっと嫌そうな顔をしていたが

こう言う所がツフュールなんだと　もう　諦めているよう

リュウは奇抜な発想で　早くも一歩踏み込んで　リラの様子を探ろうといいだしたが

みんなに　次の機会に・・・・・と　言われる

「くれぐれも　自分勝手な行動は控えるよう
最初が　肝心だ　怪しまれたら　もう　接触できなるなる可能性が高い」
渋い表情で　ツフュールが釘をさす
モパにも　しばらくは　通信を控えるよう指示を出された
それから　人間に出す手紙については　まず　潜入が無事終わってから
行動を起こすことになった
それから　・・・・・・・
みんなの視線が　リュウに集まる
リュウはわけがわからず　パチクリしている
ソファに　きちんと座り直し　みんなの視線に首をかしげている
化粧していなくても　十分美人でスタイル良いので　休日のモデルという風貌だが・・・・・
「相手のリーダーが気にいるか・・・・
なんせ　よく聞くと　小動物のように愛らしいタイプを好むみたいだ
せめて　前髪切ったら　もう少し　幼くみえるんじゃないかな？」
センバティとモパの　非情な一言に　リュウが　ご機嫌を損ねた
「リラとは　かなり　違うタイプだとは思うけど
相手の女好きに　賭けるしかないな・・・・・」
真剣に言ったモパだったが

「なんか　すごい　次元の低い相手に挑むような気がしたよ」と
苦笑した

ミクは　すぐさま片手に　鋏を取り出し

「一理あるわね　この際　ちょっと　イメチェンしようかしら？」
と　リュウに詰め寄る

リュウは　嫌がっていたが

「前髪あったほうが　より　若くて　似合うと思うけど」
の　モパの一言に　まんざらでもない顔になり　あっさり　承諾

見た目は　上手くカットできて　確かに　若くなり　以前と　雰囲
気も変わった

みんな　必要以上に賞賛したため　リュウも満足そうに　ずっと
鏡を覗き込んでる
ミクと　明日の衣装の打ち合わせのため　奥の部屋へ　消えていった

「よろしく頼む！」

モパは　翌日　旅立つ3人に　一言言うと　ミクと一緒に見送った

3人とも　力は十分にある
リュウとツフェールはベテランなだけあって　度胸もあり頼もしい
友人のツフェールも人情に厚くて　頼りになる男だ
吉報を信じて　今は待つしかなかった

花と手紙（前書き）

パソが壊れて　しばし　更新できずすみませんでした

花と手紙

一方　精神科病院では　またくだらない　いつものリーダーの定例会をしていた

特に　異変がなくても決まった時期に開催されているのだ

今回は　ちょっとだけ　意義のある会議になっていた

ノベルトが　淡々と話を進めていく　そして　一番自分が気になっていた話題を最後に発表する

辺りを見回しながら

「知ってる者も　いるだろうが　明日は　客人が来る

あの人がここを去る前に旧友に会いたいそうだ」

すでに　話を通してあるので　反対する者はいない　　あの人と言うのはもちろん老婆のことだ

すると　ゆっくりと　後ろから　老婆が現れ

「すみませんね　こんな大事な会議に　私の用件で話しまでしてくれて・・・・」

ほほ笑みながら　周りに愛想笑いをしているが

突然の登場に驚き　周りのリーダー達は　元リーダーの老婆に　挨拶を交わしてく

「昔の友人で　信用できる人だから　心配いりませんよ

お供に若い衆を2人連れてくるそうで　ここの見学もちょっと兼ねて勉強したいそうですよ」

最後は　ノベルトに向かって言った

ノベルトは　笑顔で
「こんな所で　勉強なんて成果あるかな?」と　言い
その発言に周りも　どっと笑っている

大きな規模だけが売りの烏合の衆と言うことが　みんな　よく分かっているのだ

「なんせ　パワーは強いものだろうから　来ればすぐ分かると思いますが
くれぐれもよろしく

それだけ　伝えにきたので　みなさん後は　大事な話し合いを続けてくださいね」
頭を軽く下げ　老婆は出て行った

皆も　一礼して見送った

老婆は　半ば　能天気な連中に泡を吹かせてやれると　楽しみながら次は　リラの様子をうかがいに
リラの結界が張ってある　廊下へ進んだ

すると　廊下は　室内なのに花壇が両脇にズラリと設置されている

これには　半分夢を見てるみたいだったが　遠くで　この花壇をせっせと世話している者に
見覚えがあった

小さな男で　腰を低く曲げ小人の様な老人の様な庭師のテルだった
「あんた　ここを花園にする気？」
老婆の声に　ぱっと反応するが　立ち上がっても　老婆より身長は低かった

「あんたか・・・・・・姫のために作ってるんだ　すごいだろう？」
テルは目が悪く　声で人を判断している
褒めてもらいたくて　ニコニコしているが　老婆は呆れながら

「どうしてここに？」

「姫が中庭にもうずいぶん来ないから　きっと弱っていると思って・・・・・・
ノベルトには許可は得てるんだ
まぁ　「あまり甘やかすな」って言われたけど
みんな　姫を心配してるんだ」
テルは　結界の向こう側を　切なそうに見ていた

有り余るパワーを得た　リラには必要ないものだ
むしろ　結界はパワーの存在を知られないようにしているのに
老婆は　おめでたい連中だわ・・・・・と　心から思っていた

リラは直接会うことはせず　すぐその場を離れることにした
余計な行動を起こすと　このおめでたい連中も　何か　感じるかもしれない

花を一輪だけ　テルに断って　結界の向こうに送りこんだ
これで　彼女も　明日のことが　わかるだろう

それから　精神科急性期女子病棟では　一通の手紙を前に　職員が会議していた
家族からも滅多に連絡がないサトミに　ピンクの可愛らしい手紙が届いたのだ

ドクターとも話し合い　ドクターとサトミと看護師の前で　開封することになった

最初は　なぜ呼ばれたのか分からないサトミは　真っ白の手を組みながら
不思議そうに　封筒をみていた

「君にだよ　ここで開けてくれないか？」
ドクターに言われ　一瞬目を丸くしたが　ゆっくりと手を出し　開封する

「　こんにちわ
お久しぶりです　覚えてるかな？
最近こちらに転勤になったので　懐かしくなり手紙を書くことにしました

私は元気です
サトミちゃんは　元気にしていますか？
また　手紙も書きます
そのうち　サトミちゃんの元気な声でも聞かせてくださいね
では　また
サトミ」
短い文で　特におかしなところはないので　医療者は　ほっとしていたが
サトミは　青い顔をして　震えだしていた
その様子に　ようやく気付くと　慌てて声をかける
「どうしたの？　サトミちゃん！！
このサトミって子は　お友達なんでしょ？？」
看護師の手を払いのけ　手紙を　びりびりに引き裂き始めた
「いやぁぁぁぁぁ！！」
あとは泣き崩れて　座り込んでしまった
普段　抜け殻のように大人しい彼女だが　錯乱した姿に　職員と患

者の人垣が出来る

差出人は　同じ名前の　「サトミ」なのだ

１０年前　火事を体験したメンバー

名前までは　病院にも伝わっていなかったので　突然のサトミの変貌に

医療者は慌てている

落ち着かせようとするが　力いっぱい抵抗するので

奥の保護室という個室に　何人かで連行されてく

そして　落ち着かせるための注射を打たれる

その様子を　遠くで見ていたリラは　　手紙がモパからの策略だということを察知した

これで　当分　サトミは奥の部屋から出てこれない

リラは　監視されることがなくなったのだ

顔合わせ

田舎の道をさらに外れた場所白い精神科病院がそびえ立っている

人の出入りは職員だけなので　静かでガランとしていた

入り口ホールにはたまに　事務や薬局　病棟のスタッフが薬をとりに来る程度

ツフュール達は　すんなりと　ホールへ入り　すぐ目に着く中庭の花園付近で
老婆を待っていた

どことなく　センバティは緊張している風だったが　さすが　年を重ねてるせいか
他の2人は落ち着いて見えた

リュウは物静かに辺りを観察している

すぐ　遠くから老婆がやってくるのが見えた

歩調は緩めることなく　笑顔でゆっくり近づき
「よく　遠くまで来てくれたね」と　声をかける

遠巻きに　何人か　妖精の姿が見える

すでに　監視というか　侵入者に対して　向こうは警戒しているの

か？

センバティの目線に気付いた老婆は　半笑いで
「あれは　野次馬だよ　　あんたたち　予想以上に目立つからね」
と小声で言った

リュウは背筋をピンっと伸ばし　花園を指して
「すごい花園じゃない？　手入れも行き届いていて　いろんな種類があるわ」
と　美しい笑顔で言うと

後方から近づいてくる気配と　また何人か人影が見えた

「あれは　ここの自慢の花園です」
若い男の声がした

先頭に立つのは　ノベルト　　笑顔を作り　3人を見ていた
供らしき物が2人　　その二人は無口だったが　リュウに釘づけになっているようだ

正装で　黒っぽいドレスでまとめたリュウは高嶺の花というのが
今日の衣装のポイント
だと言ってたが　その通りの効果はあったかもしれない

「あなたが　ここのリーダーですね」
切れ長の　美しい瞳で　そう尋ねられて

ノベルトは　口元が二ヤつきながら
「一応　そう言うことにはなっています　　大した住処じゃないんですけどね」

と　謙遜して見せる

ツフュールは重い口調で
「初めて　お目にかかる　　以前　世話になった者の見送りに来た
第一線で　リーダーをやっていた　ツフュールだ」
同じく　黒い衣装から　手をだし　握手を差し出す

ノベルトは　　リュウとの目線を遮られた感じで　一瞬　ビックリ
していたが
ツフュールの噂は　ここにも届いているので　また　驚きの表情で
「あなたに　一度お会いしたかったんです　　噂はかねがね・・・・
・」

ノベルトは　ツフュールに少し憧れていたせいもあって　心なしか
　少年のようのいはしゃいでいた

ツフュールは　センバティに目をうつすと
「あれは　私の弟子だ　2人ともそうだ　　よかったら　この大
きな集団を統率する能力に
ついて　レクチャーしてくれたまえ」
と　ノベルトに　語った

それが　ノベルトの自信に火をつけた様で　　張り切って　院内の
案内を申し出た

それに　稀に見る　美人の登場にも　テンションが上がったらしく
自分の仕事を分配し　2人をあとから　案内する約束をつけてくれた

お互い　危険な人部物ではない・・・・・・・という前提で
まずは　老婆の部屋で　３人がくつろいでから　いよいよ　ノベルトとの濃厚接触だ

部屋に通され　４人になると
大きなため息をひとつついた

だが　たった　数分だが　計算されつくした順序で　スムーズに事は運んでることに
満足した

リュウが「私への　反応もまんざらじゃなくない？」と言うと

ツフュールが　「噂にたがわぬ女好きだったな　　リュウ　これからが　本番だ
踏み込みすぎるなよ！」
と　釘をさす

リュウは　怪しい笑顔で　答える
何かやらかしそうな感じはするが・・・・・・それ以上は言わなかった

椅子にも座らないで　センバティは突っ立って　腕組みながら話を聞いていた

ツフュールはチラリと見て　「お前は　常に気を抜かず　必要な間

取りや　様子をうかがうだけで
基本喋るなよ」と　支持を出す

センバティは　短く答えた

ふーっと　一息ついていたら　遠くの建物の上から　人間の女の叫び声が聞こえるのに気付いた

泣いてるような　怒ってるような　ずっと　なんかに叫んでるのだ

老婆は　タバコに火をつけながら
「精神科の患者って感じだろう？」と　ポツリと言う

「あぁ」

「・・・・・・・あれが姫を管理してる　人間の女の子さ・・・・・」

その言葉に驚いたが

「モパ達も　動き出してるんだよ」

聞きとれないくらい　小さな声だったが　みんな　聞き逃さなかった

そうだ　モパが黙って見てるわけがない　でも　一体何をしたんだろう？

確か　その人間は　もう人形のように大人しいと聞いていたのに・・・・

老婆は淡々と　状況説明をする　「彼女は今保護室いて監禁状態
姫は　外だ（一般室）。　姫は　自分の塔なら　邪魔されず　自由
に行き気が可能になった

巡回で　チャンスあれば　一目会える可能性はあるけど　無理はし
ないように

姫は　このアジトの「宝」だからね」

老婆の　教え通り　　それから　ノベルトが　案内に呼びにくるまで

全員　さんざんやってきた　これからのシュミレーションを　今の
状況とかぶせつつ
各々　瞑想にふける

ただの偵察が　目的だ

あわよくば　ノベルトが　また　リュウに会いたいと思って来るよ
うになれば
ミッションは成功なんだ

何度か　顔を合わせるうちに　茨の向こうの姫と接触できるまで
異常者と思われないように
しなければならない

ほうら

ようやく　ノベルトが　さっきの衣装チェンジもして
案内を　してくれる時間となった

リュウを意識してる証だろうな

3人は　目配せをした　　背の高い3人が一度に立ち上がっただけで　威圧感ありありあんだけど

ちょっと　身長低めのノベルトは　気にしてないのかもな

お喋りが上手いノベルトの案内で　サクサクと　院内を見物がスタートした

顔合わせ（後書き）

まずは　第一関門突破！！

女たらしって　扱いやすいのかも

病院見学

紺色の衣装を身にまとった　ノベルトは　清潔感あふれていて
凛々しい今どきのアイドル風なのに　年は３０歳頃の風貌のため
落ち着いていて　それでかなり　良い男のポイントが上がっていた

ノベルトに視線を送る回数まで制限されているリュウは　話しかけられた時以外は
目線をずらしていたが
内心　「久々の良い男を見たわ！」と　ウキウキしていた

ノベルトは　分かりすく　リュウに話しかけることが多かったがセンバティにも
声をかけ　会話に交じっていたので　嫌な思いを微塵も感じさせない　社交的な男だった

すらりと長身の　おそろい？の衣装の　センバティ達を見て

どんどんフレンドリーになっていくノベルトは　唐突に
「２人は　恋人同士？」と　口は笑っていたが　真剣な目で聞いてきた

リュウはクスッと笑って
「そう見えますか？　　私達はライバル同士なんです」

センバティも
「恋人ではない　仲間の一人だ」

ときっぱり言い切った

2人の答えの少しホットしたノベルトは
「2人はモテるだろう？　お互い恋人がいてもおかしくないかと
おもっていたんだが」
と　さらに掘り下げてきた

リュウの情報を聞き出したいのが　よくわかる

リュウは　含みを持った笑いで
「それなら　あなたのほうが　大きなアジトの若い美しい権力者で
私達なんか足元にもおよばないくらい　力を持っているでしょう？

ノベルトは　どこからも人気が高いのがわかりますわ

私なんて　太刀打ちできないわね」
と　軽く笑った

センバティは気のある女を取り込むスピードに長けているので
しのまま　口説き落とすスタンバイに入っていた

しかし　後方には　明らかに身長。腕力にまさる「仲間」がいるの
で。。。。。。

センバティは
「そんなこと言ったら　ノベルトさんが　困るだろう？」
とたしなめるふりをする

ノベルトは謙遜してみせたが　「リュウと2人きりだったら　イケ

そうだな」とも思っていた

興味のない院内のいつもの廊下や抜け穴　ノベルトの部屋　会議室
など回ったところで休憩

しばしお茶がくるまで　ノベルトの部屋の隅々を　脳裏に鮮明にイ
ンプットしていた

何か　重要なものが　隠されてそうな所はなかったか・・・・・・・
・・

変わった様子は感じとれなかったか・・・・・・・・・

次に行く　人間と接するエリアに入る前に　少し　注意事項が言い
渡された

「ここには　妖精・悪魔が人間にとりついていることが多い
そして　その患者は　中には　私達と会話することもできる

そういう機会はほとんどないが　もし　はなしかられても　相手に
しない聞こえないふりを
してほしい

あとは　ご自由に　見学を楽しんでください

一応　間取りを書いたので　迷うことはないでしょう」

屈託のない笑顔で　２人から離れると　仲間を何人か集め始めた

ここからは　リュウとセンバティは自由行動のようだ

帰る時間は決まっているが　べったり監視・リュウを落とすことは今ではないと

感じたノベルトは　泳がすことにしたらしい

気がつくと　部屋の向こうでは　何人か妖精が集まっている

各階のリーダーと　補佐３名が　待機していた

１階から順番に　リーダー達の案内で　病院見学が始まった

リュウは　興味なさそうにしていたけど　リラのいいる階は興味あるので

しぶしぶ　付き合う羽目になった

ここからが　メインなのに　なんでそんなやる気ないんだと　センバティは内心思っていた

「リュウ　お世辞言いすぎだぞ　あんまり喋ると　ボロ出るからな」と　小声で忠告するも　あっさり聞き流した　古狐リュウだった

笑顔が美しいのと（センバティに対する　嫌味笑いだったが）　抜群のスタイルのリュウに　みんな見惚れていた

センバティもいつもより　精悍さがまして　男らしい力強い寡黙な雰囲気で

女子の注目を集めている

きっと　油断させて　あとで　変な行動がなかったか　報告させる
つもりなんだろう
意図が読めた2人は　やはり　ノベルトは腹黒いなと思い
気を引き締め直した

案内を勧めると　リラと一緒だった人間の雄たけびもどんどん近づ
いてくる

はやいこと　そこへ見学に行きたい2人だが　失礼にあたらないよ
う　不自然じゃないように
向こうのペースを合わせて　進んでいった

姫の視線

事務的に案内は続いていく

階が上がるごとに　案内するリーダーが変わって行くので

ここにいる重要人物と自然に顔合わせと会話が出来る

しかし　２人はあくまでも「病院見学」なのだ

リラついて　エネルギーの塊の隠し場所について悟られないよう

探る・・・・・

出しゃばっては終わりなので　向こうのペースに合わせる

リーダーの案内と世間話で　ここの統率力も大体把握できる

何人かは　さすがに力があり油断できない妖精もいるのだ

４階についた所で　人間（サトミ）の叫び声は　無視できないほど響いている

ついに　この階に着いたのだ

女の案内をするリーダーは若く　きれいなしゃきっとした人だった

女子急性期精神科病棟　　ここには　女しかいない

センバティは居心地が悪そうだったけど　そうも言っていられず

周りを見回していた

ここではリーダーも　忙しそうに　淡々と歩調を歩めるが

「・・・・ずっと声が聞こえてますね　　いつもこうなんですか？」

センバティが　口を開く

この叫び声、聞かないほうが　おかしいかもしれない

リーダーは振り返り

「あぁ　数日前から始まって一日中なんです

もう　慣れてしまったけど　精神科の病院では珍しくない光景です」

と　にっこり笑った

リュウはなんだか　目線を下げ　そのリーダーを追っていた

雰囲気からして　自分が喋るべきではないと　判断したようだ

リーダーは

「ここを案内なんて　滅多にないことです

何か　収穫になることでもあるんですか？

質問があれば　なんでも　言ってください」

人のよさそうな　ハキハキした言い方だった

しかし　リュウとセンバティは顔を見合わせて　答えを考えていた

「あの・・・・・・・」

リュウは　ゆっくり口を開く

何を喋るのか　仲間が一番ドキドキしていた

「廊下に花がいっぱいあるんですけど　だれか世話をしているんですね
ゆっくり見ても良いですか？　　花が大好きなんです」
と　リュウはにっこりきれいな笑顔を浮かべていた
卒のない　しかも　ゆっくりここを観察できる提案に　センバティはほっとした
「えぇ！もちろん
これは　うちの花好きの妖精が咲かせるのを助けているんです」
下の階の
花園も　彼の力が大きいんです」
リーダーは　快く笑顔で承諾し　廊下へ進んだ
その時　花壇周りに１０数人の妖精が集まる
ミーハーに　見学者の様子を見に来たらしい
黄色い歓声もあがり　２人の人気はもの凄かった
美しい力のある妖精は　ここでは貴重な存在のようだ
リュウと　ちょっと　困った顔をしていたが　外野は無視することにした
周りは　ここも女だらけだった
リーダーは　一旦　大きな声でその観衆を　解散させたのだ

しかし　物陰から　熱い視線をまだ感じるものの　構わず　花壇に
進む

「かっこいい～　　断然　あの彼が素敵！！」

「ノベルトより　いいよねー！！」

「あの女の人も　素敵！　恋人同志かしら？」

「どいてよ！みえない」

それぞれ　大きな声でもちらにも　丸聞こえだ

「きれいなひとね　・・・・・　姫とどっちがきれいかしら？」

一人の　つぶやきを　２人は聞き逃さなかった

しっかりと　耳は　その発言をした妖精に集中する

「姫は　別格でしょ？　　タイプも違いすぎるわよ」

他の　妖精も　その話題で盛り上がっている

「あの　王子様が　助けに来たのかしらね？」

「いやぁ――！！助けてもらいたいわ」

この言葉に　　女のリーダーの温厚な顔は一変し

「そこ！！　いい加減に無駄口は　慎みなさい！！！」

と　一喝

みんな　首を引っ込めている

その時　また　小さな悲鳴が　聞こえ
リュウとセンバティの後ろを　指差す

白いドレスに　長い艶のある髪から　花の美しい香りがする

思わず振り返ると　そこには

まさしく　リラがいた

柔らかい雰囲気と人形の様な可愛らしい顔立ちは無表情だが

目をそらせなほど美しく　思わず見とれてしまった

パワーも復活しているせいか　近寄りがたいオーラ―と神秘性もある

言葉で表しきれない美しい人だった

2人は　姫の姿に思わず息を飲み　時が止まったかのように感じた

これが　モパの彼女か・・・・・・・・・

むちゃくちゃ美人だな　女神みたいだ・・・・・・・・・

センバティは見惚れていた

リュウも　言葉を失って　釘付けだ

リーダーは　しまったという顔をして　見比べていた

リラが　ゆっくり　２人のほうへ視線を向ける

長いまつ毛と澄んだ大きな瞳が２人を捕らえる

悲しそうな　何か言いたげな表情に見えた　　それが　儚げな印象を強くしている

なんて　きれいな子なんだ・・・・・・・・・・・・

それが　２人の正直な思いだった

それは一瞬で　目が合うと　姫は　ゆっくりくるりと反対方向へ進んで行ってしまった

たったそれだけのことなのに　時間はとても長く感じた

何も言わず・伝えず　ただ何か言いたそうなリラだった

ここで　話しかけたりすると　計画はブチ壊しと言うことも分かっての行動だろう

2人は我に返り　思わず目を合わせると　隣のリーダーを見比べる
女リーダーも　はっとそれで我に返り　目をパチパチしている
そしてあからさまにしまったという顔をしていた

すかさずリーダーが2人の肩を押して　反対方向へ歩きだした
質問など与えない雰囲気で　かなり強引だった
「すみません　時間が来てしまったので　次の階にご案内します」
と　その場から離されてしまった

姫の登場は　みんなにとって意外だったので　かなりの驚きだった
ようだ

まずいものを見られた・・・・という感じで一切の口を開く間を持
たせず
リュウとセンバティは　次の階に押し込められたのだった

テレパシー会話

次の階に引き継ぎは　リラの登場もあって
リーダー達は　ちょっと離れた別室で数分話し合っていた
リュウとセンバティは　ここで一時解放され　お互い思っていること
とを話できる機会を得た
まぁそれでも　再三注意を払って　テレパシーで極秘会話にする
「見ちゃったね噂の彼女・・・・本当に姫ってピッタリの名前ね」
「あぁ・・・・きっと俺たちの波動を感じて来てくれたんだろうな」
「連中も思いがけなかった登場で　今軽いパニックみたいね
話し合いするほどのことなのかね？　やっぱり・・・・」
「一目見ただけで　あの騒ぎだ・・・・リラの情報は漏らしたくな
かったんだろうなぁ」
「・・・・・あの階には　リラ意外秘密はないね」
「どうしてそう思う？」
「あの　女リーダーはまだ若い。
しっかりしていそうだけど　秘密は姫の管理だけを任されていて
パワーの源の場所は　きっと　男のリーダーが守っているハズよ

ノベルトは女好きだけど　そこは　きっちり屈強な男がいるところに守らせると思う」

「じゃあ、　この次の階ってこともあるか・・・・」
ノベルトから貰った　見取り図を見ると　男子病棟はあと3つある

そこには　大勢の男子妖精とハーフの集団もいる

リュウは　鋭い目つきで
「そこのリーダーは　きっと　ノベルトに従順で　力があって優しい雰囲気を持つ男だよ
古臭い頑固タイプは毛嫌いするはず
自分の力を誇示して　なおかつ　信頼できそうなタイプがいたら要注意だね！」
自信ありげに　そう言い切った

「・・・・そこまで考えてるなんて　さすがだな」
その洞察力に心底感心する
合っているかは　不明だが　リュウがいてくれると心強い

リュウはニコッと笑い
「だてに　長生きしていないからね」
と　ほほ笑んだ

すると　遠くから　背の高い男のリーダーとともに　さっきの女リーダーがやってくるのが見えた

2人は　ぱっと　会話を止める

背の高い　細い男は人相はきつくヤンキー風に見える　年もまだ若
そうだ

ぼそぼそっと
「お待たせしました　では　行きますか」
と　何事もなかったかのように　次の階の階段へ進んだ

テレパシー会話（後書き）

話がなかなか進まず苦戦中です

更新もかなりあいてしまい　すみません

なんだか　すごい長い話になりそう・・・・・すっかり主役のモパの影　薄いです

管理

背の高い　男は長い脚で　スタスタと進んでいく
「どこも　構造は一緒だけど・・・・・」
と　また体格に似合わずボソボソと独り言のように喋る
確かに　他の階と一緒で　見慣れた構造　何の面白味もない見学だ
この男に別に聞くこともないが・・・・・・
「何か　質問は？」
先生のように　形式的に尋ねてきた
リュウとセンバティは顔を合わせると
センバティが
「さっき居た　下の階の　きれいな女の子は誰ですか？」
強速球で聞いた
何も知らない者が訊ねるとしたら　やはり　こうストレートに聞くのだろう
リュウはじっと　男のリーダーの顔を観察している
男は　頭をかきながら
「きれいな子なんていたかな？
ばばぁと普通の顔の輩しか知らないけど　その子が何か？」
とシラをきった

それ以上は　聞き出せない雰囲気だ
「いや　すごくきれいな子だったんで　気になっただけだ」
と　こちらも深追いはしないことにする

「・・・・じゃあ、　見学はもう良いかな？次の階に移ります」
と　また独り言のように　足を進める

２人も　その後に続く

リラの存在自体は　極秘情報になっているらしい
いわば　拉致されて監禁しているので当たり前だが・・・・・・・・・

リュウは　無言で　周りを見回していた

周りは　そこそこ若く力強そうな男の妖精集団が７～８人が　この
３人を見に来ていた

珍しい客に興味を持っていたらしいが　男のリーダーに睨みを効か
されて撤収していく

淡々とその後も見学は進んだ

見学が終了すると　２人はノベルトの部屋に通される

すぐさま愛想よくノベルトは話しかけてくる
「どうでした？　何の参考にはならなかったでしょう？」

「時間を割いていただき　ありがとうございました
みなさんにもお礼を言います」
リュウは　軽くお辞儀をするとそれだけ述べた

「いいえ　いつでもいらしてください」
ノベルトの笑顔はリュウに向けられる

センバティも軽く会釈し　２人は　その場を離れ　ツフュールのもとへ戻る

老婆の部屋で　仲間が全員集まると　その日は　早々と帰ることにした

ツフュールは　重重しく
「それでは　今日は失礼する
また　近いうち訪ねることなるが　頼んだぞ」
ノベルトの肩に手を置き　そう伝える

憧れのツフュールにそう言われて　素直にノベルトも喜んでいた
「もちろんです」
そして　リュウをチラリと見る

リュウも　ニコっと笑顔を返すがすぐ　視線を落とした
これが　リュウの気を引く手らしい

ノベルトはあからさまに　嬉しそうな顔をしてまんまとハマったよ

うだ

部屋の出口で老婆と別れ　3人は　帰路に着く

「収穫は？」
かなり　病院から離れると　ようやくツフュールが聞く

「姫に会ったわ
それから　パワーの貯蔵庫もなんとなく　目星付いたわよ」
リュウは　ニヤリと笑う

「深追いしすぎなかったろうな？」
ニヤリと　リュウを見て笑う

「そんなバカなことはしないわよ」
リュウは長い髪をかきあげながら自信ありげに言う

「・・・・・ただ・・・・・・」
リュウは　眉をしかめる

「あの　お姫さん
モパの御蔭なんだろうけど　　すごいパワーを持ってるわね
それも　秘めているせいか　見た目がきれいすぎるせいか　ちょっと　ゾクッとしちゃった」

ツフュールは渋い顔をする

「それは　どういう意味だ？」

珍しく　神妙な顔つきで
「・・・・・・・・何とも言えない　　一瞬だったから」
リュウは　そう答える

実は　センバティも同じような感覚を感じていたのだ
黙って　この話を聞いている

ツフュールはそんな様子を見て察したらしく　深いため息をつくが
「こちらは　老婆と次の打ち合わせをしていた
次回の予定などだが　基地に戻ってから　話し合おう

モパとミクが待ってる」

と　２人の背中を押し　アジトへ向かった

裸の王様

ノベルトの部屋に　訪問者が来る
すでに今日は報告会も終わり　誰もいない時間だった

「今日は　どうもありがとうございました
友人も喜んでいました。」
と　老婆は挨拶に来たのだ

ノベルトは　椅子から立ち上がり
「いえいえ　こちらこそ　あのツフュールと会えたし
こんな機会を与えてくださって感謝しています」

「ただ・・・・・・・・・・・・姫が姿を見せたそうで　ちょっと焦
りましたよ」
小声で　そう言うノベルトは子供のようだった

「珍しいね・・・・・よそ者ののので入りが気になったかな？
まぁ　友人は何も言ってなったから気にしていないよ」
と　軽く笑ってみせた

「そうですか　よかったです。
次は　彼女たちいつ来るんですか？」
ノベルトは　だらしない笑顔になる

「リュウが気にいったみたいだね・・・・・・
あんたは　姫が一番なんだろう？」

ちょっと冷やかにそう言う

「もちろんそうだけど　彼女も美しい！
あっ・・・・・・もしかして　ツフュールの彼女だったりします？
？」
急に慌ててそう聞いてくる

そう言うことにかんしては　鋭いんだねと　内心思いながらも
「それは無いわよ　安心しなさい」と言った

ノベルトは　すっかり　リュウを気に行ったようで次のデートをするかのように
再会を待ち望んでいる

「向こうから　また後日連絡来るから
分かり次第報告します」
鼻の下を伸ばしてるリーダーを　冷やかに見てあしらうように去っていく

部屋を出ると　老婆は　長い廊下をゆっくり歩く

ノベルトはすっかり信じ込んでいるね・・・・・
警戒は怠らないだろうけど　管理は甘くなりそうだ

しかし　女好きだと　能力が高くても仕事が出来てもちっともついていく気がしないね

あれさえなければ　裏切らないのに・・・・・・・

女好きな男は　ろくなもんじゃないわ

リュウが図に乗る姿を見るのはしゃくだけど　どうやら第一段階は上手くすべり出したようだね

密かに　にやりとほほ笑む老婆だった

一服

3人が　ミクのアジトへ戻ると　ミクとモパはすぐさま安堵の表情で迎え入れた

「無事　戻った」
短くツフュールがそう言うと　ミクは笑顔で頷いた
「御苦労さまでした
お疲れでしょうが　早速　話を・・・・・・・」
そう言って　広間へ進む

モパはセンバティの顔を見て　心底安心している表情を浮かべてほほ笑む

みんなが　腰を下ろすと
「どうでした？　内部の様子は？」
モパが口を開く

ツフュールは　端的に答える
「内部は　親切にも隅々まで案内してくれて　リュウとセンバティが視察済みだ

私は　老婆と極秘に次に向けて　ずっと話合いをしていた

疑われることなく　次回も潜入は可能だ

今回の作戦は　成功と言っていいだろう」
渋みのある表情述べ　その様子は貫録もあって安心出来る

モパも　ミクも　嬉しそうに安心した顔になる

ミクはチラリとリュウを見て
「女好きの王様は　食いついた？」
と　いらずらっぽく聞いてきた

リュウは　自信ありげな怪しい笑顔を浮かべると
「当然！　すっかり　私を気に行った様子だったわよ」
と　長い足を組み直す

モパは　笑いながら
「前髪切って　成功でしたね！」
と　付け加える

「今度も　会いたいって言ってたし　大歓迎の様子だったわ
センバティがいなきゃ　もっと　接近できていたんだけどね―」
と　ちょっと　残念そうに言う

ミクは　眉をひそめて
「そんなに　気に行ったの？　リュウ」
と聞くと

「なかなかいい男で力もあるのは　間違いないよ
女好きで　性格悪そうなのも間違いないね」
と　答える

ツフュールは　顔をしかめて
「センバティの御蔭でお互い　ブレーキが効いたんだろう？
最初からづきすぎては　女たらしもすぐ　飽きてしまうだろうからな」

と　呆れた　様子で　にんまり笑ってるリュウを見る

センバティも頷き　その様子を見て笑っているが　はっとしたように思いだすと

モパに大事なことを伝える

「・・・・彼女を見たよ　　一瞬だったけど

力を蓄え　元気そうな姿だった」

その言葉を聞くと　心底安心した表情で　「そうか」とつぶやいた

嬉しさを　かみしめてるようで　見ていると　2人の絆の強さを実感した

あまり　喜怒哀楽を現さないけど　とても喜んでるようだった

その場にいたみんなが　そう感じた

リュウは　それから話を続ける

「それにしても　姫と一緒にいた　若い人間の　女の子はずっと叫びっぱなしだったよ

個室に保護されて錯乱状態

あんた　どんな方法取ったのよ・・・・・・・・」

怪訝な表情でモパに問う

あの数行の手紙のことで　サトミは完全に　崩壊しつつあるようだ

モパはゆっくり

「それは　後ほど言います

まぁ　そうでもしないと　彼女を自由に出来なかった

長い呪縛から　サトミという人間も　冷めてくれればいいと思い強行しました」

真剣な表情で答える
こちらも　有無を言わせない　静かだけど強い意志を感じた

他にも　事細かい情報交換を続け
話し合いは　夜中まで続き　また　次の潜入に向けて作戦を練る

ノベルトへの接触　院内の脱出・潜入場所・エネルギーの隠し場所
と管理方法
姫への接触方法など　まだ課題はいっぱい残っている

ミクは　美しい頬笑みで
「まずは　計画は無事成功だわ
これから少しづつ　各々遂行しましょう」
と　内に秘めた力強い言葉に　皆が頷いた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3136i/

半端者

2010年10月17日20時24分発行